

官能のプリマ

バージョン VII

婚 姻

アカマル

## 目次

1. 解放	1
2. 富士見荘	8
3. 内職	17
4. 面会	38
5. 婚姻届	57
6. 義父母	72
7. 結婚	82
8. 試練	91
9. 事情聴取	102
10. 告別	108

## 1 解放

時刻はとうに午後十一時を過ぎて、平日の歓楽街を飲み歩く人の流れも途絶えて久しかった。サロン・ペインのカウンターには祐子しか座っていない。カウンターの中でグラスを磨いていたチーフが、酒場に不似合いなミルクに口をつけた祐子に苦々しく声を掛けた。

「まるでMが座っているように見える。祐子、いっそのことマティニを飲みなさいよ」

「初めてこの店に来たとき、私にミルクを勧めたのはチーフよ」

冷やかしを待っていたように、すかさず祐子が答えた。長い髪がいらだたしように揺れる。

「十年前の話でしょう。祐子はまだ十五歳だった。私は二十五。Mは確か三十二歳だったわ」

遠くを見る目つきでチーフがしんみりした声で言った。祐子が気ぜわしく言葉を引き取る。

「Mはもう四十二歳になるわ。私はMが二十七歳の時に鉾山の町で知り合ったの。あのころのMは思い切り輝いていた」

祐子の言葉にチーフは応えない。気まずい沈黙がカウンターに落ち、二人の脳裏でMの記憶が渦巻いた。

「三年間は辛かったでしょうね」

突然、泣き出しそうな声でチーフが言った。言い出しかねていたことを先に言われてしまった祐子のいらだちが募る。無性に時刻が気に掛かり、振り返って壁の時計を見た。針は午前零時を回っていた。やっとMの出所の日が来たのだ。肩の力が抜け、ホールを掃除するモップの音が間近に聞こえた。

「たかが三年の刑務所暮らしでMが音を上げるはずがない。若い女囚を集めてスケベなことを教えているに違いないよ」

「あなたっ、なんてことを言うの」

フロアにモップをかけていた天田の陽気な声に、チーフが怖い声で応じた。

「天田さんの言うとおりでいいな。それなら安心できる」

すがるような声で祐子が応えた。

「大丈夫だよ、そうに決まってる。仮釈放にもならず満期まで務めてくるんだ。相当ひ

どいことをしていたに相違ない」

「よしなさい。Mの悪口は許さないわ」

チーフがまた怖い顔で天田を睨み付けた。

「亭主よりMの方が大事なんだから、俺だって妬けるよ。祐子ちゃんもそう思うだろう」

同意を求める天田の言葉に、思わず祐子は笑ってしまった。何と言っても二人は似合いの夫婦だった。チーフを妻に選んだ天田の見識を見直すと共に、応じたチーフの勇気も立派だと思う。人の世もまんざら捨てたものではない。つかの間の温かさが心に満ちる。とにかく行動することだと祐子は確信する。

「ごちそうさま、もう行くわ」

明るい声で言って祐子が立ち上がった。

「行くと言ったって、Mの出所は朝の七時よ。今から出掛けると午前五時には着いてしまうわ」

チーフが怪訝な顔で言った。

「午前零時で刑期は終了したわ。Mは七時まで待ってくれないような気がするの。夜明け早々に刑務所を出て都会に行かれてしまったら、二度と会えないかも知れない」

厳しい表情で祐子が答えた。チーフの顔に不安がよぎる。

「そうね、裁判の時のMの態度は立派だったけど怖かったわ。あれっきり誰もMを見ていないのね。何度面会に行っても会ってくれないし、まるで私たちを避けているみたいだった」

震える声でチーフが事実を口にした。祐子の身体にも震えが伝わる。裁判所で胸を張って判決に聞き入る堂々としたMの姿が目の前に浮かび上がった。

「懲役三年に処す」

裁判長の重々しい声が最前列で傍聴していた祐子の全身を震わせた。前科のあるMに執行猶予はつかない。覚悟していた実刑判決だったが、やはり胸が締め付けられた。だが、Mは動じる風もない。静かに一礼して裁判長を見上げた。裁判所に言いたいことがあれば言いなさい、と言う裁判長の声に小さくうなずく。黒いワンピースを着た後ろ姿が大きく見えた。背筋を正した均整のとれた身体から静かな声が廷内に響いた。

「現金強奪グループの過激な行動にも関わらず、各施設の皆さんに負傷以外の重大な損傷がなかったことを率直に喜びます。しかし、グループ内の膨大な死者の責任と人格をどの

ように贖えばよいかを考えると暗澹とした気持ちになります。修太、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、そしてオシショウと飛鳥。十二人の死者が裁かれることもなく彼岸にいます。生き残った私もピアニストも、睦月、霜月、極月の三人も、死者と同じ彼岸にいるしかないのです。裁判長、善悪を越えたところで芽生えた信仰を裁くことができないように、私の犯行への参加も裁けないでしょう。彼岸にそびえる無限のエネルギーの塔は、昇っていった者の責任と人格しか問わないのです。たかが懲役三年という社会の寛大な裁きには取り立てて言うことはありません。ただ、テロ組織に誘拐された私が、強いられて今回の犯行に荷担したとは決して思わないで欲しいのです。私は最後まで自分の責任と人格で行動したことを申し添えます」

懲役五年を求刑していた検察も実刑に満足し、量刑を不服として控訴することはなかった。Mも控訴しないで下獄した。再びオックスフォードに帰った祐子はイギリスでの生活を二年間延長した。光男と修太の死に続くMの不在を耐えきれぬ自信がなかったからだ。

「今朝Mを捕まえられなかったら二度と会えないような予感がするの」

つぶやくように言った祐子の言葉にチーフが大きくなずく。

「そうね、私もそんな気がする。祐子、悪いけどすぐ迎えにいったよ」

急かすように言ったチーフの目を祐子が見つめた。不安そうな眼差しの底に、Mに捨て去られる恐怖にすくんでいる顔が映っていた。

「そんなことはないさ。出所前のらんちきパーティーで疲れ切って、Mが朝早く起きられる道理がない。ゆっくり行けばいいよ」

愉快そうに告げる天田の声が深刻な顔で見つめ合う二人の間に落ちた。緊張の糸が切れ、苦い笑いが祐子の口元に浮かぶ。チーフが天田を振り返って睨み付けた。祐子の目の前で夫婦の情愛が往復したような気がした。まだ実感したことがない感情だった。だが、Mも知らない世界だと思えば悪い気はしない。祐子は黙ってドアに向かい、二人に挨拶してからサロン・ペインを後にした。明かりの消えた看板灯の横に真っ赤なMG・Fが駐車してある。三年前にMが使っていた車だ。刑務所からの帰り道は、ぜひMにハンドルを預けて助手席に座ってほしいものと祐子は願った。

市から北へ、高速道路を乗り継いで五時間走った所にMの収監された刑務所があった。インターチェンジを下りて四車線もあるバイパスを三十分ほど走った場所だ。全国的な都

市化の波をもろに被り、周囲にはショッピングセンターやファーストフードの店まで進出している。開発が進む街の勢いに取り残されて見捨てられたように、先住者の刑務所は肩をすぼめてうずくまっていた。新興の住宅団地に取り囲まれた花火工場や養豚場のように違和感がある。祐子は改めて高い塀に沿って刑務所の回りを一周した。車で簡単に回りきってしまうほど刑務所は狭い。古都の寺院の伽藍を思い出し、尼寺に引きこもってしまったMを想像してみた。意志して引きこもらない限り、社会と隔絶した生活を送るには悲しすぎるほどの狭さだ。しかしMは尼ではない。強いられてこの刑務所で三年間を暮らしてきたのだ。祐子の胸がまた熱くなってしまう。

三月中旬とはいえ、夜明け前の底冷えはきつい。フロントガラスの周囲が白く曇ってくる。MG・Fを止めたコンビニエンス・ストアの駐車場からは斜めに刑務所の正門が見通せた。門を隔てた四車線のバイパスをヘッドライトがまぶしく行き交う。思ったより交通量が多い。漆黒の空がほんのりと白み、ライトのまぶしさが気にならなくなったころ、東の空に日が昇った。朝日は刑務所の真っ黒のコンクリート建築の端から顔を出し、アスファルトの路面を赤く染め上げた。ちっぽけな太陽だった。横断歩道の先にそびえる巨大な鉄扉の隅で小さな潜り戸が開いた。黒い制服を着た刑務官に従って大柄の女性が出てくる。短い髪型だったが、端正な横顔と長く伸びた脚が祐子の目に飛び込んできた。慌てて車のドアを開けて冷たい地面に降り立つ。

「Mッ」

大声で道路の向こう側に呼び掛けた。横断歩道の信号はあいにく赤だ。行き来する車両が途切れる様子もない。もどかしく手を振ってみたが、門前に立ったMは応えようとしないう。背中から朝日を浴びた真っ黒な人影が、全身で祐子を拒絶しているように見えた。

「Mッ」

もう一度かん高い声で叫んだ。黒い影が一瞬動揺したように揺れたが足早に歩き出す。信号が青に変わった。祐子は凄いスピードで駆け出し、四車線のバイパスを渡りきった。

「Mッ」

息を弾ませて三度目を呼び掛けると、二メートル前の後ろ姿がゆっくり振り返った。

「やっぱり来たのね。一人にはさせてくれないの」

三年振りに聞いた声は冷たかった。誰が面会に行っても会おうとはしなかったMだ。予期していた答えだった。

「私が来なければ、Mは黙って姿を消すわ。私たちの記憶を消してしまいたいMはいいけ

れど、消される私たちは耐えられない。置き去りにされるのはもう懲り懲りよ。ねえ、お願い。一緒に市に帰って。私はMを求めているの」

身体を振り絞って訴える祐子の言葉に見開かれたMの目が曇る。落ち着いた表情に苦悩が掠めた。

「祐子は、私が迷惑するとは思わないの」

刑務所前の寒い空気に乾いた声が落ちた。祐子の肩が震える。だが、ここで引き下がるわけにはいかない。Mを放してしまえば自分の生涯もなくなるような気がした。

「思うわ。でも、見捨てて欲しくないの」

祈るように祐子が言った。

「祐子はもう一人前の女よ。独りで十分生きられるわ。私も祐子と同じように独りで生きさせてもらいたいのよ」

断固とした声で答えたMが背を向けて歩き出す。

「逃がさないわよ。裸になってどこまでもついていく。これがMに学んだ私の生き方」

拒絶した背に叫んでアイボリーのコートとグリーンワンピースのファスナーを下ろした。両手に力を込めて二枚の服を脱ぎ捨てる。白い裸身が朝日を浴びて真っ赤に染まった。陰毛を剃り上げた股間を冷気がなぶる。引き締まった裸身を躍らせて後ろ姿を追い、Mの背中にきつく抱き付く。振り切ろうとする胸元に両手を回して紺のスーツの上着をはぎ取る。スカートを膝まで引きずり下ろすとMの歩みが止まった。すかさず白いタートルネックのセーターの裾をつまんで力いっぱい引き上げた。Mはセーターで顔を隠したのっぺらぼうの裸身を晒す。刑務所の規則正しい過酷な暮らしに耐えた引き締まった身体だ。肌の白さが目にまぶしい。黒々とした陰毛が股間に燃え上がっていた。

「祐子ッ」

振り返ったMが感極まった声で祐子を呼んだ。膝まで下りたスカートの足元に落ちる。刑務所の正門から十メートルの所で、高い塀をバックに素っ裸の女が抱き合っている。行き交う車のクラクションの音が響き渡った。正門の潜り戸が開き、数人の刑務官が慌てて二人の方に駆け寄っていった。希望に満ちた祐子の目から喜びの涙がこぼれ落ちた。

「百歩譲ってもドーム館で祐子と暮らすわけにはいかないわ」

MG・Fの助手席で心地よく車の揺れに身をまかしている祐子の耳にMの声が響いた。

「Mは疲れているはずよ。落ち着くまでは一緒に暮らして欲しいの」

「私は疲れていない」

媚びるような祐子の頼みに、にべもなくMが答えた。

「だってMは、お金もないし職もない」

言ってしまうから祐子の頬が赤く染まった。Mが気にしたかと思って横顔をうかがう。真っ直ぐ前を見て運転するMの口元はほころんでいた。

「お金持ちの祐子が心配してくれるのはありがたいけれど、私はお金を持っているの。働いた分には見合わないけど、刑務所ではお金をくれるのよ。当座の心配は要らないわ」

「いくらあるの」

「三十万円もあるわ」

「一か月しか持たない」

「とにかく一か月持てばいいのよ。正直な気持ちを言うと、今でも市に戻りたくない」

「ごめんなさい」

「気持ちはどうあれ、私が市に戻ることを決めたんだから祐子が謝ることはないわ。とにかくアパートを探す。月五千円くらいの安い部屋がいいな。トイレも風呂も、キッチンだって共用で構わない。刑務所の雑居房で三年も暮らしたんだから十分すぎるくらいよ。個室が持てるのは大した出世よ」

楽しそうに話す横顔に見入った祐子の目がまん丸になる。小さく開いた口から溜息が漏れた。数回まばたきを繰り返すと涙がこぼれ落ちた。

「三年間は辛かったんでしょね。ごめんなさい。私はMの気持ちを少しも考えていなかったわ」

「辛くなんかなかったわ」

ポツンと答えて首を振った。確かに辛い三年間だったとMは思う。毎日の暮らしのすべてが強制され監視されているのだ。人格さえ否定される。当然のことに自由はない。呼吸することだけが唯一、囚人に許された自由だった。その自由さえ奪われる者もいる。地獄より辛い所だ。

「そう、Mは心身共に鍛えてあるもの。股間の毛を剃ってしまえば勇気も湧くし、どんなところでも自分の責任と人格で生きられるわね」

祐子が吸り上げて邪気のないことを言った。Mは思わず笑ってしまう。刑務所で剃刀など持ってられるはずがない。鉄格子の中で隠匿物を疑われれば、それこそ毎日のように素っ裸にされ、尻の穴まで検査されるのだ。股間を剃るなど論外のことだった。裸にされ

ることはあっても、勝手に裸になることなど許されない。自由はないのだ。だが、たわいない祐子の話が解放された自分を再確認させてくれる。うれしかった。

「そうだわ。アパート探しは天田さんに頼もう。ねえ、いいでしょう。月五千円の部屋なんて、不動産屋では見付からないわ」

祐子のはしゃいだ声で言って、バッグから携帯電話を取り出す。ケースワーカーの天田なら安アパートに詳しいはずだ。

「いいわ、お願いして。できれば今日中に入居したい」

答える声が弾んでいた。三年間、国の施設にホームステイしていたのだ。すぐにも自分の部屋が欲しいと思った。

## 2 富士見荘

鉄道高架に沿って安酒場が並ぶ歓楽街の外れの一画をMG Fが走っていく。一帯は市の区画整理事業の対象になっていたが、まだ手も着けられていない。古い家屋を取り壊した跡の狭い空き地が所々に目立つ。高架をくぐり抜けた所で右手の路地に入った。路地は煤ぼけた家並みに挟まれ、かろうじて車が乗り入れられるだけの道幅しかない。地図を片手に進路を指示した祐子の肩が緊張している。これまで足を踏み入れたこともない地区の荒涼とした雰囲気不安を与えている様子だ。路地の奥の行き止まりになった小さな広場に白い軽自動車が止まっていた。その自動車を上から圧するように、二層の反り返った瓦屋根が覆い被さっている。屋根の高さは隣りに背を向けて建つ四階建てのコンクリートビルに負けない。木造三階建ての巨大な建築物は正午の日を浴びて微睡んでいるように見えた。

「天田さんが来てくれているわ」

軒先の暗がりにたたずむ天田を認めて緊張の取れた祐子の声が車内に響いた。

「お帰りM。祐子ちゃん、お疲れさま」

MG・Fに近寄ってきた天田が気安く声を掛けた。Mと祐子は黙って車を降りる。木造三階建ての異様な建築物にじっと目をやったままだ。

「この建物が富士見荘。Mの新居だ。とにかく安い。月五千元というわけにはいかないが六千五百円で手を打ってもらった。掘り出し物さ」

胸を張って天田が言った。相変わらず抜け目のない身ごなしだが、腰の回りとうエストのたるみが目立つ。

「ありがとう。気に入ったわ。私にぴったりの新居よ」

幾分の自嘲を込めてMが答えた。

「気に入ってくれてよかった。今の俺はMの義弟みたいなもんだから、喜んでくれてほっとしたよ。実は、富士見荘のことはチーフに話してないんだ。家賃のことだけ言ってある。見てのとおり、ここは元の遊郭だ。遊郭の跡にMが住むとは、さすがに俺も言い出せなかった。非常識だと怒鳴りつけられてしまう。でも、Mは相変わらず色っぽいよ。この遊郭が一番盛んだったときに入居してもナンバー・ワンのお女郎さんになれたと思うよ」

不見識なほめ言葉を聞いた祐子の顔が蒼白になった。どっしりとした建築を見上げていた目が急に気色ばむ。

「天田さん、部屋は断ってください。まさか遊郭の跡だとは思わなかった。Mがいいと言っても女性が住む所ではないわ。天田さんは非常識よ。月五千円の部屋なんてないと言ってくればいいのに、よりによって遊郭を紹介するなんて最低よ。Mを売春婦と比較するなんて決して許さない」

怒りに満ちた声が静まり返った路地を駆け抜けた。小さな広場の隅に備え付けられた屋外水道の蛇口から、ぼたぼたと漏る水音が響く。水道の横には古めかしい井戸ポンプが取り残されていた。

「条件どおりの部屋を見付けて怒られたんじゃ、たまらないよ。朝っぱらから電話で起こされ、仕事の合間にやっと家主の了解を取ったんだ。それに、富士見荘の住人のほとんどは女だ。男は一人しかいない。女性向きのアパートだぜ」

言い訳がましく天田が弁解した。救いを求めるようにMの横顔をうかがう。

「祐子が何と言っても私はここに住むわ。条件どおりのすてきな所よ。早く自分の部屋が見たい」

「Mッ」

はっきり言いきったMに抗議をしようとした祐子が言葉を呑み込んだ。重々しく戸の軋る音が響き渡る。富士見荘の広い間口のガラス戸が大きく開けられ、四人の老婆が一団となって広場に出てきた。

「天田さんおはよう。何か用事かい」

先頭にいた老婆が天田に呼び掛けた。小さな身体に虫食いだらけのセーターを何枚も重ね着している。いくら寒いと言っても早春の日射しにはふさわしくない服装だった。

「いや、お菊さんに用はないんだ。もう付き合いは終わったからね。せいぜい内職で頑張ってくれ。仕事がなくなったら、また面倒を見させてもらうよ」

砕けた口調で天田が答えると、お菊と呼ばれた老女は口元に抜け目ない笑みを浮かべた。Mと祐子に鋭い視線を投げ掛けてから、三人の老女と連れだって路地の出口に向かう。祐子が説明を求めるように天田の顔を見た。

「あの人はお菊さんと言って去年まで福祉で生活を保護していた婆さんだよ。年金を積んでいなかったから保護するしかない。他の三人の婆さんは一人暮らしができる程度の年金がある。今は四人で協力して高収入の内職をしているから、お菊さんも福祉と縁が切れた。あの四人が富士見荘の住人だよ。みんな女性だ。もう一人は男だけど金持ちの爺さんだ。心配は要らない」

「まるで姥捨て山じゃないの。どうひいき目に見ても天田さんは常識がない」

天田を睨み付けた祐子がふくれっ面になった。

「それは差別発言だよ。老人だろうが貧乏人だろうが市民には違いない。福祉の仕事をしているときの俺は無差別平等なんだ」

祐子の失言をうまく捉えた天田が胸を張ってきれい事を言った。

「無差別平等かどうかは別にして、天田さんの言うとおりでわ。早く部屋に案内して欲しいな」

右手に下げた小さなポストンバックを振ってMが催促した。天田が大きくなずき、両手で巨大なガラス戸を開ける。老婆たちの力でよく開いたと思えるほどの重さだった。正午の日射しを浴びていた三人の目には、映画館に入ったように屋内は暗い。入ってすぐの所が広い土間になっていた。高さが膝まである式台の正面に二階に続く階段が見える。幅三メートルの黒々とした木の階段だ。両脇には見事に彫刻された欄干が続いている。二階正面の壁に設けられた明かり取りの小窓から入る斜めの光が、広々とした階段に深い陰影を与えている。

「二階に八室、三階に十室、合計十八の部屋があるが、現在は二階しか使われていない。三階は婆さんたちの内職の作業所になっているんだ。トイレは二階と三階にもあるが、風呂と台所は一階にある。共同で使うんだ。洗面所は外の広場の水道か井戸を使う。ちょうど江戸時代のような、古き良き日本の習俗が満ちあふれていると思えばいいさ。慣れれば住みやすいと思うよ。セールスマンも来ない。Mのように、当面の煩わしさを避けたいという世捨て人にはぴったりの所だ」

天田が不動産業者も顔負けの歯の浮くような解説をして靴を脱いだ。確かに世捨て人に違いないとMは思い、口元に笑みを浮かべて式台に上がった。案内する天田と並んでどっしりした階段を上る。階段は三人が横に並んで上れるほど広い。一段上る度に分厚い木材から冷え冷えとした冷気が足先に伝わってくる。身体を被う空気も寒い。かつて苦海に身を沈めた無数の女たちの嘆きの声が聞こえてくるような気がした。一切の虚飾を打ち捨てた暗く重々しい雰囲気は身体を締め付けてくる。二階の踊り場まで出ると異様な臭気が鼻を突いた。強い芳香剤とアンモニアの匂いだ。祐子の足が止まる。

「このトイレは水洗じゃない。昔ながらの汲み取りだよ。何事につけてもナチュラルなんだ」

気配を察して天田が言い訳した。幅一メートルの中廊下を挟んで踊り場の左右に四つず

つ八つのドアが並んでいる。いずれのドアも、直接向き合わないように部屋によって左右に分かれていた。

「Mの部屋は西の端だ。東隣は空き室で、すぐ前はお菊婆さんの部屋だ。お菊さんは富士見荘のボスだから仲良くするといい。三階に上る階段の横がトイレだ。少々匂いが気になるが、いい部屋だよ」

中廊下の突き当たりの角にあるドアを天田が開けた。四畳半の方形の部屋がMの目の前にある。視線を動かさなくても部屋の一切が見て取れる狭さだ。開けたドアの先がすぐ畳になっている。ただ一つある小さな腰高の窓には曇りガラスが入っている。押入はおろか戸棚一つない。刑務所の独房の方が余程機能的に造られていると思った。だが、この部屋はMの自由意志で手に入れるのだ。誰に強制されるわけでもない。殺風景な空間が一時、光り輝いて見えた。

「これがMの部屋ですって。あんまりだわ。せっかく市に帰ってくれたMに、こんな仕打ちはできない。ねえ、M。ドーム館か鋸屋根工場のアトリエと一緒に暮らしましょうよ」

ドアの前で立ちすくんでいる祐子が涙を浮かべながら訴えた。

「いいえ、この部屋は気に入ったわ。なんにもないところが最高。素っ気ない優しさを感じる。小さいけれど、ちゃんと窓もある。何が見えるのかしら」

途方に暮れた顔をしている祐子に言って、Mは腰高窓に近寄っていった。三年間閉じ込められた獄舎には眺めを楽しむための窓などなかった。新鮮な気持ちで曇りガラスの入った窓を開けた。

グオーッ

開ききった窓の中に列車の轟音が飛び込んできた。ちょうど目の高さに当たる鉄道の高架をオレンジ色に塗った電車が走り抜けていく。窓から五メートルと離れていない。木造三階建ての建築が電車の響きに合わせて細かく振動した。

「窓からの眺めは悪い。でも下を見れば緑道が見える。高架に沿って整備した散歩道だよ。もうしばらくすれば春の花がいっぱいに咲く」

天田がMの後ろで苦笑して言った。人気のない物件を何としても強引に押し付けようとする不動産業者にしか見えない。

「いいわ、天田さん。この部屋を借ります。家主さんの所に行きましょう」

天田を振り返ってMが大きな声で答えた。祐子の肩が落ちる。

「家主は大屋さんと言うんだが、昼間は仕事でいないよ。雑貨の卸をやっているんだ。こ

の地区の福祉委員をしていたので面識もある。いつ入居してもいいと言っていたから挨拶は後でいいよ。気の向いたときに行ってくればいい」

素っ気ない天田の言葉に祐子の顔がまたこわばる。だが、気分を変えるように明るい声を出した。

「M、こんなに殺風景な部屋では落ち着かないわ。寝具や家具を買いに行きましょうよ」  
「チーフに頼まれて一応の用意はしてある。寝具といっても、毛布があればいいんだよな。急に布団を買っても眠れないと困る。その気になったら徐々に揃えればいいよ」

祐子の言葉を待っていたように天田が答えた。あっけにとられた祐子が天田の視線の先を追うと、五枚の毛布がドアの真横に重ねられてあった。毛布の上には男物らしいパジャマとタオルも置いてある。どれもがありがたりの安物だった。目にした祐子の顔が蒼白になる。

「天田さん、本当にチーフがこれを用意したの」

「違うよ。当座のものも用意しろって頼まれたから、俺が勝手に買ってきたんだ。なあ、M。これだけあればいいんだよな」

当惑した天田がMにまた助けを求めた。

「何がいいのよ。まだ寒いのに、毛布だけでMを寝かせるつもりなの」

怒りで顔を真っ赤に染めた祐子が天田にくっつくかかった。

「祐子、天田さんを非難しては失礼だわ。私はこれだけ揃えてもらえば十分。天田さんは福祉のケースワーカーだから刑務所のことにも詳しいのよ。刑務所には布団はないの。どんなに寒くても毛布だけで平気よ」

「せっかく市に帰ってもらったのに、刑務所の記憶を思い出させるようなことはさせられないわ」

祐子が頬を赤くして言い募った。

「私は刑務所の暮らしを忘れたくないの。祐子、これは私が決めたことよ。私は大丈夫。今日は疲れたから、もう一人にして欲しいの」

断固とした声でMが宣言した。祐子が泣きべそをかく。だが、構ってはいられないとMは思う。せっかく自由になれたのだ。考えねばならないことが山ほどあった。

「天田さん。全部チーフに報告するわよ」

捨てぜりふのように言った祐子が明日の再会を約して、渋々帰っていった。Mは二人を見送りもしない。無性に一人になりたかった。

祐子と天田が帰ってから十五分経った。寒々とした四畳半の部屋は静まり返り、富士見荘全体が喧噪から取り残された静寂の中に沈み込んでいる。Mは窓辺にいて、外の散歩道を見下ろしてから窓を閉めた。幅二メートルの緑道には青銅のベンチが置かれているだけで枯れ草しか見えなかった。まだ春は遠いのだ。部屋の中央に戻って天井から吊り下げられた蛍光灯の紐を引いた。三十ワットの光が方形の部屋を照らし出した。煤けた天井板には涙の跡のような無数の染みが浮いている。ソックスを穿いた足裏で古畳が擦れた。紺色のスーツを脱ぎ、白いセーターを脱いだ。素っ裸になって畳に座り、脱いだ服をきちんと畳む。自由に裸になれるうれしさが胸に込み上げてきた。小さな希望が見えてきたような気がする。干渉する者は誰もいない。冷気が素肌を包んで鳥肌が立ったが、気持ちは高揚してくる。ドアに向かって正座した。背筋を正すと、そろえたかかどに尻の感触が伝わってくる。きゅっとくびれたウエストが小気味よい。やっと自分の身体が戻ってきたと実感できた。思わず涙がこぼれ、乳房を濡らして太股に落ちた。股間で漆黒の陰毛が燃え上がっている。この冷え切った股間を誰が撫でてくれるのだろうとふと思った。悲しかった。悲しみは次から次に湧き出してくる。この市で死んだ弥生の顔が脳裏を掠めた。光男が、修太が、数多い死者たちが裸身をなで回す。止めどなく涙が流れ落ちて股間を濡らした。温かい涙が冷え切った心に染みる。口を突いて嗚咽が漏れた。

Mはしゃくり上げながら小さな布地のボストンバッグを抱え上げた。震える指でファスナーを開き、洗い晒しの灰色のジャージを取り出す。バッグを逆さにして振ると、三十万円の現金を入れた白い封筒と三十通の茶封筒が畳の上に落ちた。茶色の封筒の幾つかは太股や膝の上に落ちた。白い裸身が小さく震える。封筒を拾い集めて乳房の前で強く握り締めた。紙に込められた寒さが両手から伝わってくる。高揚した気持ちは急速に冷えていくのが分かる。三十通の封書は獄中のMに宛ててピアニストが出したものだ。涙に霞む目で刑務所の住所が記された宛名書きに見入る。神経質そうな、細く小さな文字でMの名が泣いている。封筒を裏返すと力強い筆跡でピアニストの名が書かれていた。自信のない文字で印されたMの名が悲しい。すべての手紙に目を通したくなる衝動に必死で耐えた。何回となく読み返して内容はすべて記憶している。文字に託したピアニストの心情だけが哀れでならなかった。最初の手紙は下獄してから半年後に届いた。積もり積もった鬱憤と怨嗟をぶつけてきたのだ。

## 獄舎のMへ

僕はMを恨み、大人の女を恨む。三十歳になった僕が子供じみた女々しいことを言うとは、Mにだけは言わせはしない。なぜMは僕の求めを一回も拒絶したのか。それほどの憎しみを僕に抱いていたのか。そして、その方がどれほど僕にとって気楽だったか、Mは思ってみたことがあるのか。僕を憎むどころか、Mは僕を子供扱いし、無視しただけだった。まるで姉が出来損ないの弟にする仕打ちのように、なんの説明もなく僕の希望を摘み取っていった。僕の思いの丈を知らなかったとは言わせない。最低二度、僕は口に出してMの愛を求め、全身で乞うた。だが、返ってきた答えは冷たい拒絶だけだった。それならば、金輪際、お互いに近付かない道をとるべきなのだ。だがMは、何回となく僕の前に現れては僕の幼さを嘲笑っていった。僕一人が受けた冷たい仕打ちだ。何よりも官能を追い求めたMに、決してふさわしくない仕打ちと言える。僕はMにとって露ほども性的な魅力がなかったのか。僕の性もペニスも弱々しくて、Mを喜ばすことが到底できぬと見限ったのか。M、僕はMを憎む。大人の女を憎み通す。

M、僕が穏やかな性を求めていたとの、Mの断定を否定する気はない。しかし、僕がその性を、他ならぬMに求めたことだけは忘れて欲しくない。穏やかで平安な性のイメージが先にあっただのではない。Mがいたから、Mを知ったから、僕は過激な性の中に二人の平安を夢見たのだ。ただ一心にMが欲しい。それだけだった。

もうじき僕の性は絶たれる。生と共に断ち切られてしまう。報告が遅くなったが僕は死刑の判決を受けた。今は死刑囚として日本海に面した獄舎に繋がれ、来るべき死を待っているだけだ。すべてを失い、すべてを得た。得たものはただ、Mを求め続ける性の希望だ。失ったものは、それに比べれば徹々たるものだった。平穏で安らかな性と家庭、理想的な社会に向けての改造と革命。すべてが空しく朽ち果て、失われていった。もう僕には港は要らない。終着駅も要らない。僕の旅路に帰り着く場所はない。

ただ日夜、襲い来る死を待ちながら痛切に願う。何よりも激しく過激にMを求め続ける。Mを素っ裸に剥き、厳しく後ろ手に縛り上げてやりたい。股間を縛った縦縄がぐっしょりと濡れ、二条の縄の間から固く突き立った性器がのぞいている。僕は苦痛を耐えて眉間に皺を寄せたMを抱き寄せる。股縄を外し、濡れそばった陰門に、はち切れんばかりのペニスを突き立てる。二人の官能は鋭く舞い上がり、宙を漂う。その一時を抱き締めて生にピリオドが打たれることを、僕は痛切に願う。

M、僕はMを恨む。大人の女を恨む。そして今、死にいく僕には希望がある。 Mが欲しい。

死刑囚のピアニストは手紙の数を制限されている。毎月一回、もどかしいように、Mへの思いがエスカレートしていく手紙が届いた。内容にこれといった変化はない。Mは返事を出さなかった。だが、ピアニストからの手紙は毎月のように襲い掛かってきた。その度にMを裸に剥き、縛り上げ、鞭で打った。一方的に文字で陵辱する手紙は切ない。Mは獄中で泣き、夜毎股間を濡らした。最後の手紙は今月の初めに届いた。飽くことなく陵辱の文字をつづり、繰り返し希望を語っていた。ただ、文末がこれまでと違っていた。Mの刑期が終わるのを見越して、刑務所へ面会に来てくれるように熱烈な文字で要望していた。だが、ピアニストの言う希望という意味は現在も分からない。分からないまま、すべての手紙をポストンバックに詰め込んで出所してきた。

Mは抱いていた手紙の束を下ろして膝の前に置いた。もう涙は止まり、冷え冷えとした心が戻っていた。正座した膝をそっと開いて股間を見る。黒々とした陰毛の間から赤い性器がのぞいている。割開いた陰部を寒い風が渡る。右手の指先で性器をつまんだ。親指と中指に力を込める。軟らかな肉の棘が指先で潰れて鋭い痛みが深奥に伝わっていく。枯れていた涙が一滴、目尻からこぼれ落ちた。両膝を大きく開いて股間を晒した。背中に両手を回して後ろ手に緊縛されたポーズを取る。見えぬ縄で緊縛された裸身が苦悩と官能に悶える。悲しみが股間から込み上げてくる。涙になった愛液が陰門を濡らした。ピアニストの鬱憤も怨嗟も不当なものではない。確かにMはピアニストの求めを拒絶してきた。求められれば応ずるのがMの生き方だ。それを四度の巡り会いのすべてで拒絶したのだ。なぜだろうと、ずっと自問してきた。恐らく、なにがしかの希望をピアニストに託したせいだ

と思った。それは、Mが歩めなかったもう一つの道なのかも知れない。だが、その道も絶たれることが決まってしまった。Mはもう四十二歳だ。すでに人生の半ばまで来た。Mにとってピアニストはずっと同伴してきた苦い棘のようなものだ。なす術のない現実が切ないまでにMをいらだたせる。この巨大なハードルを跳び越さねば行く道さえ途絶える予感がした。豊かな胸を張って膝立ちになった。尻を突き出して全身で悶えた。背中で組んだ両手を解いて股間に伸ばす。涙となった愛液を指先で掬って性器になすりつけた。そっと指を陰門に挿入すると他人になった肉襷が指の根元を締め付けてきた。荒々しく指を使うと官能の炎が燃え上がる。冷え切った素肌から汗が浮き出た。極みに駆け上がる寸前に指を抜き去る。ぬめぬめとした指を改めて肛門に突き入れた。痛みが、快樂が、疾風となって全身を駆け抜けていった。ハードルは跳び越えるためがあると肉体が宣言した。狭い方形の部屋で白い裸身が慟哭する。脳裏にまた、さわやかな弥生の笑顔が浮かんだ。死者たちが肉体の宴に集まり、Mの官能を内部から祝福するのだ。股間の毛を剃ろう。唐突に決心した。祐子の言っていたように、陰毛を剃り上げれば勇気が湧いてくるような予感がした。

### 3 内職

Mが遊郭跡のアパート富士見荘に住み始めてから、もう五日が経った。腰高の小さな窓から入ってくる日射しが四畳半の部屋を明るく照らしだしている。Mは毛布の間で目を覚ました。天田の用意してくれた毛布のうち二枚を重ねて折って敷布にし、二枚を身体に掛ける。もう一枚は枕替わりに使っていた。右手を伸ばして畳に置いた腕時計をとる。ディオールのブラックムーンの黒い文字盤が午前九時を回っていることを教える。時計は祐子が置いていったものだ。貰い物だが、年齢的にMに似合うと言って無理に押し付けていった。相変わらず祐子は嘘がへただと思う。わざわざ買って来たことぐらい百も承知だった。チーフはゲランのルージュを置いていったが、祐子とは違う。口紅も引かない女は、いくら美しくても許せないと説教をしていく余裕があった。祐子もチーフも五日間の間に入れ替わり、立ち替わりに訪ねてきた。決まって帰り際に出所祝いのお話をする。だが、Mは首を縦に振らない。いくら誘われてもドーム館にもサロン・ペインにも行こうとはしなかった。三人で会っても話題は極めて少ない。Mは弥生や修太、光男、他の死者たちの話をしない。ピアニストを初めとした生き残った人たちのことも話題にしない。沈黙の時間ばかりが流れていった。祐子もチーフもMの態度をはかりかねて、おろおろするばかりだ。だが、Mは態度を変えようとはしない。じっと貝のように部屋に逼塞する日々を重ねていった。

「毎日、朝が遅くなる」

声を出してつぶやき、Mは毛布をはねのけて起き上がった。灰色のジャージを着ている。刑務所では裸で眠ることは許されない。服を着て寝る習慣が自分の部屋を持った今も続いていた。立ち上がって壁に掛けたタオルを取る。いくらか伸びた陰毛が内腿を鋭く刺激するが、取り立てて感動はない。陰毛を剃ってはみたが勇気は湧いてこなかった。全身のだるさが喉元まで溢れ、口からこぼれ出るのを待っているだけだ。起き抜けのまま玄関に向かう大階段を降りた。この重々しい階段を上り下りするときだけ富士見荘の前身に思いを馳せる。多くの女たちの血と汗と涙、そしてわずかばかりの官能の匂いを嗅ぐ。かつて、ここでは強いられた性だけが女の裸身を撫で回していたはずだった。残された建物と建物にまつわる性の伝説はすべて抽象に過ぎない。それぞれの女たちの過酷な性だけが遊郭にとっての真実なのだ。現在のMとピアニストと同様、つぐんでしまった口が真っ直ぐ暗い

深淵に通じていたはずだった。

重いガラス戸を開いて広場に出ると暖かな日射しが全身を被った。吐く息は白く、厳しく素肌を刺す冷気も漂っていたが、着実に季節は流れている。冬は立ち去るのだ。Mは広場の隅で水道の前に屈み込んだ。洗面器を忘れたことを一瞬悔やむ。しかし、コンクリートの流しの隅に伏せてあるプラスチックの洗面器を拝借することにする。午前九時を過ぎて起き出してくる者は、富士見荘ではMの他にいないはずがなかった。水道の蛇口を捻って洗面器に水を満たす。しばらく水を出しっぱなしにしておくで、手に突き刺さる冷たさが消えて懐かしい温かみが水中に広がる。待っていたように両手で水を掬った。数回顔を洗った後、首筋や耳の裏まで丁寧に洗う。ショートは本当に便利だと思う。刑務所の暮らしは合理的なのだ。顔一面に滴る水滴を首に掛けたタオルで拭き取っていると、背後から冷たい声を浴びせられた。

「あんたは刑務所帰りだったのかい」

突然の言葉に肩が緊張する。低く掠れた女の声だった。

「その洗面器は、わしのもんだ」

畳み掛けてきた声を聞いて、Mはしゃがんだまま振り返った。背後から朝日を浴びた黒い影がすぐ後ろにいた。声の感じから富士見荘に来た日に天田に話し掛けてきた菊という老婆だと知れた。だが、天田と話す時とは違い、腹に染み通る威厳のある声だった。

「そのサンダルも、わしの物だ。ぬしはまだ刑務所ボケしているのか、刑務所のしつけが甘くなったのか、どっちなのか答えておくれ」

老婆が追い打ちを掛けた。完璧にMの負けだ。返す言葉がなかった。靴を履くのが面倒で一番古ぼけたサンダルを突っ掛けてきたのだが、他人の物には違いない。刑務所でなくても、どこの世界でも盗みに違いなかった。Mはその場でサンダルを脱いで地面の上に正座した。洗面器とサンダルを膝の前に置いて深々と頭を下げる。

「確かお菊さんでしたね。私はM。おっしゃるとおり五日前に刑務所を出所してきました。日用品を買いそろえることを怠り、お菊さんの洗面器とサンダルを無断でお借りしてしまいました。二度としません。許してください」

真剣な声で訴えた。老婆だろうが生活保護を受けていようが、見くびるわけにはいかなかった。無意識に盗みを働いたのはMなのだ。許しを乞うしかないと思った。

「ハハハハハハ」

神妙に土下座した頭上にお菊さんの笑い声が降ってきた。

「許すも許さぬもない。足りない物があれば融通し合うのが当たり前だ。だが、ぬしの答え振りを見て安心したよ。今でも刑務所のしつけは厳しいらしい。わしも刑務所では辛い思いをした。そのサンダルはぬしにやる。わしはやっと新しいのを買って来たんだ」

邪気のない声に顔を上げると、お菊さんが手に持った白いレジ袋を子供のように振り回している。袋を透かして赤いサンダルが揺れていた。

「ありがとうございます。でも、サンダルはお返しします。早速私も買ってこようと思います」

ほっとした声で答えて洗面器とサンダルを差し出した。

「困ったときはお互い様だと言ったろう。そんなに緊張しなくていい。でも、それなりの披露目は必要だ。狭い世界のことだから筋だけは通さなければならない。ぬしが富士見荘に来たことは皆が知っている。だがな、ぬしの口からはっきり聞かぬ限り、わしらは噂するしかない。どこの世界でも挨拶は大事だ」

また凶星を指されたと思った。人間関係の煩わしさを避けたいために、誰と擦れ違っても目礼だけで済ましてきたのだ。だがそれも、自分の暮らしを自分で守れなくては意味がない。他人の洗面器やサンダルを黙って借りるようでは人を疎んじる資格がなかった。

「ぬしのような若い女が刑務所のしつけどおりの洗面をしていれば、お節介でも声を掛けたくなるぞ。娑婆の人間は首筋や耳の裏まで洗いはしない。その代わり毎日風呂に入る。刑務所で暮らしたことを知られなくなかったら、つまらん習慣はやめた方がいい。ついでに言うておくが、娑婆に帰ったとて水道の水を出しっぱなしにしてはだめだ。水道料はやがて家賃に跳ね返ってくる。皆の首を絞めるようなことをしてはならない」

流しの横で正座したMの頬が恥ずかしさに赤く染まった。お菊さんの言葉が怠惰な心をしたたかに打った。Mと同様、刑務所の辛い生活を耐え抜いたというお菊さんに、もう一つの厳しさを見た。それは、暮らしの辛さを潜り抜けてきた者の持つ自負だった。Mはこれまで暮らしの辛さなど経験したことがない。水道を出しっぱなしにしても水道料を払うだけのことだった。だが、その金は労働の対価をもって充てるのだ。得た金の量がすべてだが、底を流れる論理は貧富の格差を拒絶する。貧困を笑うことはできない。暮らしに無知なだけの話だった。真っ直ぐ伸ばしていた背筋が崩れ、うなじが下がる。小さな声で「ごめんなさい」とつぶやいた。

「若い女にしては、ずいぶん素直でいい子だ。さあ、わしのやったサンダルを履いて立ちなさい」

お菊さんが打って代わった優しい声で言ってMを立ち上がらせた。ちょうどMの肩までの背丈だ。

「お菊さん、私はそんなに若くない。もう四十歳を過ぎている」

照れくさそうにMが言った。

「何を言う。娘っ子のようなもんだ。わしは七十七歳になる。だが、歳は自慢にならない。やはり若い方がいい。ぬしは若くてきれいだ。羨ましいぞ」

小さな口の中で含み笑いをしたお菊さんが、まじまじとMの全身を見た。灰色に濁った目の奥に憎しみに似た羨望が浮かんでいる。Mは目のやり場に困った。そんなMの姿を舐めるように見つめていたお菊さんの目が、急に抜け目のない眼差しに変わり、さり気なく周囲を見回す。再びMの顔に視線が戻り、濁った目で正面からMの目を見つめた。

「惨めな服を脱いで、裸におなり」

さり気ない声でお菊さんが命じた。一瞬Mは自分の耳を疑う。突飛な指示で動揺した顔がお菊さんの瞳の中に映っていた。いつになく情けない姿を自認して頬が赤くなった。毅然とした自分に戻りたかった。

「はい」

短く答えてうなずく。素早く灰色のジャージの上下を脱ぎ捨てた。春の日射しを浴びた裸身が木造三階立ての遊郭跡のアパートを背景に浮かび上がる。足元にくたびれた灰色の生地が脱ぎ捨てられている。お菊さんの言ったように刑務所のレクリエーション用に購買で買ったジャージだった。惨めな服には違いない。脱ぎ去った裸身に爽快感が残った。

「思っていたとおりの立派な身体だ。光り輝いている。薄汚い囚衣を脱がせてよかった。M、ここ一帯は遊郭の跡だ。美しい裸を誇らしく晒してもいいんだ。刑務所の暮らしを引きずっていることはない。わしらには目の保養になる。長生きがしたくなるぞ」

分厚く重ね着をした小さな老婆の前に大柄の裸身がたたずんでいる。異様な眺めだった。お菊さんが一步後ろに下がって、じっと裸身に見入る。

「前を隠すことはない」

お菊さんの声にうなずいたMが、股間で重ねていた手を背中に回した。豊かに胸が張られ、形の良い乳房が前に押し出された。陰毛を剃り上げた隠しようのない陰部が初春の日射しをいっぱい浴びた。切れ上がった深い割れ目から赤い性器がのぞいている。

「股間を剃り上げているのか。潔いことだ。かわいらしい下の顔が丸見えだぞ。上の顔も美しいが、下の顔も見事じゃ。女のわしが見てもほれほれする。多くの男が泣き狂ったに

違くない。だが、それもみな、ぬしのせいではないぞ。艶めかしく生まれたただけのことだ。思いのまま悶えればいい。ぬしの特権だと思えばいいのだ。後ろを向いて尻の割れ目も見せる」

お菊さんの感動の音が耳をくすぐる。Mは命じられたとおりに後ろを向いた。両足を広げて尻を突き出す。鋭い日射しを浴びた裸身が火照り、汗が噴き出しそうな気がする。お菊さんの言葉が身体の芯から素肌を熱しているのだ。尻の割れ目を風が通り抜け、お菊さんの言葉が落ちた。

「尻の穴もよく使い込んでいる。言うことはない。若いのに立派な女だ。M、おっ母さんはいるのか」

「いません」

股の間から答えた。お菊さんは少しの間下を向き、何事か考えている素振りだ。だが、すぐ顔を上げて素早く尻の横に立った。

ピシッ

突然、尻に強烈な平手打ちが見舞った。口に悲鳴が走り、痛みが尻全体に拡がる。

「M、気に入ったぞ。親子の盃替わりの平手打ちだ。ぬしのおっ母さんに代わってその身体、しっかり磨いてやるぞ」

お菊さんののにこやかな声が路地の出口まで響いていく。Mは尻を突き出したまま面食らって声も出ない。ありがた迷惑な話だが、行きがかり上逆らう術もない。苦笑を隠して股の間からお菊さんを見上げていた。お菊さんは大きく胸を張り、小さな口元にいっぱい皺を寄せて愉快そうに笑っている。

「もういいぞ、部屋に帰ろう」

お菊さんに促されて仕方なく素っ裸で後に従う。木造三階建ての遊郭の玄関に曳かれていく裸身は、やり手婆さんに連れ戻された逃亡女郎のように見えた。白い尻に浮かんだ平手打ちの痕が痛々しい。

「M、いつまでもぶらぶら遊んでいてはいけない。ちゃんと働いて稼げ。しのぎを削らねば、娑婆では尻の毛まで抜かれてしまうぞ」

先に立って大階段を上るMに、お菊さんがまた説教をした。Mがしおらしくうなづく。Mの態度に満足したお菊さんが尻に手を伸ばして割れ目をまさぐる。

「まあ、尻の毛まで剃り落としていては抜かれる気遣いもないか。潔くていいぞ」

楽しそうな声が吹き抜けの階段に溢れた。

「今日は昼の三時に内職の材料が来る。わたらの働く姿をよく見ろ。皆の衆にも紹介してやる。いいな、忘れるなよ」

二階の踊り場で言って、お菊さんがもう一度尻を軽く叩いた。どことなく懐かしさが漂う甘い痛みが尻に拡がる。憎めない婆さんだとMは思った。

午後になってすぐ、Mは三年と五日振りに商店街に買い物に出掛けた。これまでにサンダル一つ買わなかったことが情けなかったのだ。

春の商店街は明るい。街をいく人たちの顔も皆、一様に晴れやかに見えた。死者と生者のことを思い煩っていたことが無益な時間だったような気がする。真っ先に化粧品屋で大振りの鏡を買った。肌触りの良いタオルと高価な石鹸も買った。次にトラッドショップに行ったらしばらく迷い、黒いロングスカートと煉瓦色のシングル・ジャケットを仕入れた。現在の流行が気になったが、あえて店員に尋ねることなく気に入った品だけを選んだ。インナーには白いスタンドカラーのシルクシャツをおごった。体のサイズが変わっていないこともうれしかった。買った品を全部試着室に持ち込み、その場で着てきた紺色のスーツと替えた。どの品もぴったりMに似合った。姿見の中の自分が一段と大きく見えた。少しの直しも要らぬ体型に店員が驚嘆の声を上げる。それもMにはうれしい。調子に乗って靴も欲しくなる。ショーウィンドウに飾ってあったワインレッドのプレーンなスリッポンを求めた。ヒールは三センチメートルしかないが、Mの身長はこれで百七十三センチメートルになる。気分が良かった。ついでにジーンズショップをのぞき、ブラックジーンズと黒のタートルネックのセーターも買った。買い物をする度に気持ちは高揚していったが、終わったときには十五万円がなくなっていた。有り金の半分を使い切ってしまったのだ。

「ようし、稼ぐぞ」

大きな紙袋を三つもぶら下げて、思わず歩道の端で声を出した。途端にお菊さんの顔が脳裏に甦った。恥ずかしさが込み上げてきて頬が赤く染まる。私の暮らしは高々このくらいの物かと思い知ってしまった。水道料金を節約するなど思いも及ばない。収入の当てはないが、無いはずはないと思ってしまう。一人暮らしの若さの驕りだった。もう四十歳を過ぎたなどと威張ることはできない。苦海に身を沈めた多くの女たちの怨嗟の声が聞こえた。

「あの、良かったらお茶でもご一緒できませんか」

横断歩道の赤信号を見つめていたMの耳に豊かなバリトンが響いた。思わず首筋が痒く

なって、隣の男を見つめる。ほぼ同じ背丈の男の頬が赤く染まった。グレンチェックのスーツを着た繊細な感じの男だが、年齢は三十歳を出た程度にしか見えない。

「また、暇なときにね」

素直に答えると、また男の頬が赤く染まった。

「僕は銀行員で、怪しい者ではありません。ぜひ付き合ってください。何でもします」

温室育ちの匂いが鼻先を掠める。何よりも声が素晴らしかった。股間が熱くなるのが分かる。

「そう、怪しい者なんて、もうこの市にはいないわ。銀行員が何でもするというのは、十億円ぐらいは融資するってことかしら」

Mの言葉に青年がどぎまぎした。しかし引き下がろうとはしない。信号は赤のままだ。

「いえ、仕事を離れてプライベートな場所でお役に立ちたいんです」

「分かったわ。素っ裸にして、縛り上げてちょうだい」

「えっ」

絶句した青年の顔が戸惑い、信号が青に変わった。Mは足早に横断歩道を歩く。ついてくると思った青年は交差点を渡らず、そのまま歩道に立ちすくんでいる。振り返ったことを悔やむとピアニストの顔が目に見えた。ちょうど青年と同じくらいの歳だが、ピアニストの顔は苦悩で年老いて見える。急に気分が沈み込んで悲しい痛みが全身を捕らえた。履き慣れないスリッポンが歩みを妨げ、尖った陰毛が内股を刺す。Mは激しく首を左右に振ってピアニストの幻影を追い払った。背筋を正し、あごを引いて正面を見据える。商店街の歩道を春の光が照らしている。まぶしい光の中をできるだけ快活に歩こうとした。擦れ違う度に振り向く男の視線だけを感じ続けようと思った。

富士見荘に続く路地に入ると途端に風景が暗く陰鬱になった。正面にそびえる木造三階建ての威容が周囲を押し、毒気を振りまいているように見える。玄関の重いガラス戸を開けて大階段を上る。春の光を拒絶した暗い吹き抜けに寒い空気がよどんでいる。黒光りする中廊下を渡って自分の部屋のドアを開けた。腰高の小さい窓から入る斜光を浴びた方形の部屋が目に見え込む。煤ぼけた畳があるだけの何もない部屋だ。心の底まで寒くなっていくような気がする。せっかく取りそろえた衣装も形無しだった。買って来た鏡を取り出して壁に掛けた。吊った鎖が捻れて鏡面が斜めになる。鏡に映る横を向いた顔の回りを寒々とした部屋が取り巻いている。自分自身の横顔も表情が暗い。突然ドアが開けられ、お

菊さんの着膨れた姿が鏡に映った。

「ほう、服を買ったのか。まぶしいくらいあでやかだ。Mによく似合うぞ。テレビの画面から抜け出てきた女優のようだ。きっと皆の衆も喜ぶ」

お菊さんの最大級の賛辞がMを元気づける。確かに私は美しいと、鏡の中の自分に心の中で呼び掛けてから振り返った。

「この服でよそよそしくないかしら」

「なんの、華やかなことはよいことだ。くすんでいるのは年寄りだけでいい。早く行こう」

お菊さんは忙しなく言って背中を見せた。小さな背中にMを早く仲間に見せたいという無邪気な興奮が溢れている。まるで道端で拾った子犬を友達に見せびらかす子供のような。Mは思い切り愛嬌を振りまかねばならない心境になる。老人との付き合いも辛い。廊下の端まで行き、三階に続く階段を上る。玄関の大階段と違って三階に上る階段は狭くて急だ。その代わり建物の両端に二つの階段がある。上り切ると、さすがに低過ぎる天井の下に中廊下が延びていた。廊下を挟んで左右に五つずつ十室のドアが向かい合っている。Mたちの住む二階に比べて一目で格が低いことが分かる。東西に小窓があるだけの廊下は暗くて侘びしい。今にも女の啜り泣きが聞こえてきそうだ。思わず全身が緊張し鳥肌が立った。「南側の三室の壁をぶち抜いて、わしらの作業場に使っている。あとは無人だ。遠慮することはないぞ」

お菊さんが緊張を察して声を掛けた。

「さあ、中に入れ」

ノックもせず右手のドアを開き、お菊さんが道を空けた。仕方なくMが先に部屋に入る。入った途端にきつい皮革の匂いが鼻を打った。四畳半の空間を三つ並べた細長い部屋に三つの腰高窓が等間隔で並んでいる。曇りガラスの入った窓から射し込む日射しを受けて、三人の老婆が座り机に向かって仕事をしていた。鳴り続けていたミシンの音がやみ、六つの目がMを見つめる。

「皆の衆、わしの部屋の前に越してきたMだ。よろしく頼みますぞ」

Mの後ろから、お菊さんが三人の老婆に声を掛けた。Mは慌ててささくれた古畳に正座して姿勢を正す。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。Mと言います。越して来たばかりで日が浅いため、不調法があろうかと思いますが、よろしくご指導ください」

深々と頭を下げて口上を述べると、窓際に座っていた老婆が大きな声を出した。

「耳が遠くなってよく聞こえん。もっと近くに来てくれ」

「年寄りには不便なもんだ。Mの声は小さくはないぞ」

大きな声でつぶやいたお菊さんがMを促し、並んで座る三人の前に導く。Mは座り直して、また頭を下げた。

「私は五日前、刑務所を出てきたばかりです。刑務所にいたことは今朝、見事にお菊さんに見破られてしまいました。別に隠そうと思って皆さんにご挨拶しなかったわけではありません。しばらく静かに暮らしたかっただけです。三年間、世間と交流がなかったので不安もありました。でもお菊さんが、富士見荘には昔ながらの暮らしが残っていると教えてくれました。お陰で私も、もう一度やり直す決心がつかしました。働きたいとも思っています。今日は皆さんの仕事ぶりをたっぷり見せてください」

「若いのに素直で良い。何よりも見目がきれいだ」

耳が遠いと言っていた老婆が真っ先に口を開いた。相変わらず声が大きい。座り机の横に黒いなめし革が高く積んである。机の上には風呂敷ほどの大きさの黒皮が広げられている。はさみとカッターナイフで裁断作業をしていたらしい。手を休めたまま言葉を続ける。「わしは米という。この地区に住み続けて八十四年になる。親子二代の女郎だ。この富士見荘はな、商売敵の郭じゃった。わしのいた郭はどうに潰れ、ずっと空き地のままだ。だが、その旦那は不思議なお人だったぞ。女郎ごときを厚生年金に入れてくれたのだからな。よその旦那衆はあきれておったという。郭が潰れた後も店を仕出し屋に替えて面倒を見てくれた。お陰で食うに困らぬ年金がもらえる。今では女郎も捨てたもんじゃないと思うぞ。当時であれば、お前はさぞかし高く売れただろうよ」

Mの年齢の二倍も生き抜いてきたお米さんは、値踏みするようにMを見つめてにっと笑った。一瞬背筋が寒くなったが、Mも負けずに微笑み返した。さすがのお菊さんが閉口したように溜息をつく。

「Mが刑務所の話なんか出すから、お米さんまで郭話を始める。他人が聞いていたら目を回すぞ。お梅さんは粹筋だから、次は品よく頼むよ」

色々な形に裁断した黒皮の縁を折り込んで電気鋸をかけていた老婆が手を休めて顔を上げた。

「あたしは梅。七十五歳になるが、品のある話などありようもない。隣町でずっと囲われ者の暮らしをしてきただけ。それは旦那にはかわいがられた。生前に十分過ぎるほどの資

産も金ももらった。でも、旦那が死んで本妻さんの気持ちが変わった。家に乗り込んできて、毎日毎晩あたしを責めた。旦那にもらった物を全部返せというんだ。素っ裸で縛り上げられ、尻に焼き鑊まで当てられたのだ。仕方なく、泣く泣く隠しておいた土地の権利書を出した。今度は預金通帳も出せと言って、また責める。一週間の地獄の責め苦で殺される寸前まで行ったとき、本妻さんが隙を見せた。身一つで逃げ出してここに隠れ住んだ。三十年前の話だ。あたしには粹でもなんでもない。じっと隠れ住んできたただけだった。風の便りで本妻さんが死んだことを知ってから、まだ十年も経たない」

溜息の出るような話ばかり続く。Mは正座した足のしびれを感じた。だが、まだ一人残っている。お菊さんが元気に紹介した。

「さあ、しんがりは桜さんだ。桜さんは女学校を出ている。わしらの中では一番のインテリだ」

一番若く見える老婆の机の上には二台の頑丈そうなミシンが置いてあった。皮紐や皮帯をミシンで複雑に縫い合わせているのだ。一台は手回しのミシンだった。長い皮帯を手に持って静かな声で話し始めた。

「私は桜。まだ七十二歳だから一番若い。他の姉さんたちと違って経験も浅いわ。機屋の一人娘でずっと育ってきたのだから、確かに女学校にも行けた。でも、あんなに大きかった機屋もあっけなく潰れたわ。真面目で小心だった両親は負債の大きさに絶望して一緒に自殺してしまった。私が三十歳の時よ。すべての相続を放棄した私は、借金から免れて洋裁を教えるようになってきた。たった一人で爪に灯をともしようにしてお金も貯めた。その金も初めての男が競艇場の沼にみんな沈めてしまった。私が五十歳の時よ。男は四十歳だったわ。やけくそになった私はお酒に溺れ、病気になって生活保護を受けたわ。凄く屈辱を感じたことを覚えている。でも、お金がないことは事実だった。そして、ずっとお金には縁がない。今でも豪華な振り袖を着た若いころの私が夢に出てくる。貧乏には慣れたけど、お金に不自由しなかったころの夢からは未だに逃れられない。姉さんたちがいなければ、きっと生きられないわ」

最後の話も切なくやり切れなかった。歳を取るということは汚濁にまみれ、暮らしに疲れ果てるということかも知れないと思ってしまう。

「Mのお陰で、みんな若かった時を思い出してしまった。うんざりするほどの思い出だが、それでも今よりはましなのかも知れぬ。若いMが羨ましいぞ」

お菊さんの言葉につられて全員が羨望の眼差しでMを見た。Mのうなじが下がり頬が赤

く染まった。刑務所を出てきたばかりの女に、この先どんな未来が待つというのか。むごい憧れが全身を覆う。もう財布には十五万円しかないのだ。強奪し損なった十五億円のコンテナの山が目に見えなかった。死者と生者の影がまた目の前を掠めた。急いで気分の転換を図る。

「三人に詳しく自己紹介をしてもらったお陰で、お菊さんのことが一番分からなくなってしまったわ。私は強盗の罪で刑を受けたのだけど、お菊さんは何をしたの」

何気なく尋ねた言葉で部屋中が静まり返った。沈黙の中からお菊さんの掠れた声が浮かび上がる。

「わしは殺しだよ。憎い男の腹を三回刺して殺した。お米さんの前では言いたくないが、大事な乳飲み子を取り上げて、わしを女郎に売り飛ばそうとした男だ。そんなものは人でない。人でないものを殺して殺人とは、ちゃんちゃらおかしい。今でも後悔はしていない。あんな奴は何度でも殺してやる」

お菊さんの憎悪に燃えた目が宙の一点を見据えた。西日を浴びた部屋が冷たく凍り付く。四人の老女がくぐり抜けてきた男女の愛憎の淵が遊郭跡のアパート富士見荘に漆黒の闇を創っているようだ。Mは目がくらみそうになった。

「まあ、顔見せも済んだことだし、Mさんよ。わしらの内職をゆっくり見ていくがいい」

お米さんが大きな声で取りなし、三人の老婆がそれぞれの机に向かった。素知らぬ顔で仕事を始める。いずれも老婆とは思えぬ手早さで、丁寧な仕事ぶりだ。Mの口から感嘆の溜息が出た。

「内職と言っても一貫した流れ作業になっているのね。まるで工場みたい。でも、桜さんの所まで行っても何ができるか分からないわ。ずいぶん柔らかそうな皮だけど全部黒ね。皮革工芸品を創っているの」

Mが首を傾げ、誰にともなく尋ねた。前に座った三人の老婆が一様に品のない顔で笑った。

「お菊さんの所まで行くと形になる。さあさ、お菊さん、いつまでも興奮しないで、かわいい娘に組立を見せてやりな。これでも立派な実用品なんだ」

お米さんがお菊さんに大声で呼び掛けた。やっとお菊さんの口に微笑が浮かぶ。自分の座り机の前に座って、桜さんがミシンをかけた皮帯を手取る。机の上には小さい箱が五つ置いてあった。その一つから銀色のリングを摘み上げて長い皮帯と短い皮帯を複雑に繋ぎ止める。続いて大小のリングに二十本もの長短の皮帯を繋ぎ、折り返しに黒い鳩目を打

って止める。最後に要所要所に尾錠を付け、差込の皮帯に小さな穴を空けて作業が完了した。組立作業は三十分ほどの工程だった。

「ほら、一挺上がりだ。使いやすそうだろう。羊皮を使っているからとても柔らかいぞ」

お菊さんが誇らかに言って、蜘蛛の巣のように入り組んだ黒い皮帯の寄せ集めをMに手渡す。確かにしなやかで柔らかい手触りだが、何に使う品かまだ分からない。

「何に使うと思う」

皮帯の複合品としか言えない製品を手にして首を捻っているMに、お菊さんが笑いながら問い掛けた。

「さあ、何かに被せて梱包するようだけど、よく分からないわ」

答えを聞いて、四人の老婆が一斉に笑った。

「半分は当たっている。これは女の身体を梱包するときに使う物だ。これを見れば分かるだろう」

お菊さんが楽しそうに言って、壁際に並んでいる段ボール箱から黒革の手枷を取り出す。製品の中央のベルトに手枷を通してから、またMに返した。まだMにはよくイメージできないが、手枷の印象から身体を拘束する器具であることは知れた。

「SMプレイで使う拘束具なのね。失礼だけど、まさかお婆さんたちが性具を作っているとは思わなかったわ。きっと高価なんでしょうね。どうやって使うのかしら」

「設計図には乳房強調拘束具と書いてあるぞ。都会で売るときは一本三万円だと聞いている。わしらには工賃として一万円入る。割のいい仕事だ。だが、こればかり作るわけにはいかない。高価すぎて量が出ないそうだ。その手枷もわしらが作った。猿轡も作るし、肛門調教具も作る。皮革を使うSM用品は一手に引き受けている。みんな天田さんが紹介してくれた業者からの注文だ。お陰で生活保護をもらわなくとも暮らしが立つ」

お菊さんの説明を聞いたMの脳裏にチーフの顔が浮かんだ。チーフは都会でSMショーの女優をしていたのだ。そのころの関係者を天田に紹介したに違いなかった。四人の老婆の暮らしと生き甲斐をSMが支えている。不思議な気がした。だが、この建物ですら遊郭の跡なのだ。余りにも濃厚に性の匂いが満ちあふれている。鋭敏になった神経が官能の予感を告げる。痺れきった足を崩すと短い陰毛が股間で疼いた。危険な兆候だった。

「富士見荘にはもう一人、お爺さんが住んでいるって聞いたわ。その人にも紹介してくれるんでしょう」

無理に話題を変えて、四人の老婆に尋ねてみた。

「ああ、先生のことか。お菊さん、連れてってやんなよ。あのすけべ爺はきっと、涎を流して喜ぶこと請け合いだ」

お米さんが毒々しい声で言って下品に鼻を鳴らした。

「退職教員なんですか」

Mが問い返すと、お米さんが即座に大声を出す。

「墮胎専門の医者だって噂だよ。でも、わしは墮ろしてもらったことはない。ただの噂さ。先生はもう九十歳になる。今じゃあ強突張りの金貸しさ。いっぱい貯め込んでるよ。わしはまだ、担保に取られた厚生年金証書を返してもらっていない。利息が残っているって言うんだ。足元を見て月一割も利子を取る。わしらは四人とも泣かされているんだ」

話はまた妙な方に進んでいく。お米さんの顔が醜く歪み、濃厚な暮らしの匂いが漂ってくる。

「まあまあ、お米さん、あんまり興奮せんで。先生のごことはわしに考えがある。それよりM、拘束具の使い方が見当もつかないと言ったろう。わたしたちも設計図しか知らん。使っている写真も絵も見たことがない。でも全員が使い方を知っているぞ。女の身体に使う品の見当がつかないのでは女とは言えん。M、勉強が足りんぞ。自分の身体で試してみるがいい。ここで裸になれ、わしらが使い方を教えてやる」

お菊さんが意地悪く話題を拘束具に戻して難題を持ち掛けた。他の三人も目つきが変わり、そろって腰を上げた。休憩時間にふさわしい刺激が久方ぶりにこの部屋に訪れたという雰囲気だった。

「M、裸になりなさいよ。あたしたちは使い方を知っていても実際に使ったことはない。羨びきった婆さんの乳房に乳房強調拘束具は皮肉すぎる。Mの身体なら言うことはない。ぜひ見てみたい」

お梅さんがMの前まで来て励ますように言った。

「そうよ。私たちの製品の出来映えをぜひ試して欲しい。きっとMなら、ほれほれするほど似合うと思うわ」

桜さんがオートクチュールのドレスの試着を勧めるような口調で言った。四人の老婆に取り囲まれたMは小さく首を縦に振るしかなかった。母親以上の年齢の老婆たちがSMのモデルを欲しているのだ。凄まじいエネルギーが全身に覆い被さる。性の行く末に果てはないのだと、改めて思った。四人の老婆がMを立たせ、寄ってたかって全裸に剥いた。剃り上げた無毛の股間を見た老婆たちが一様に溜息をつく。均整のとれた裸身に羨望の眼差

しが集まる。Mは背筋を伸ばし、胸を張って煤けた空間に直立した。

拘束具から取り外した手枷を持って、お菊さんがMの背後に回った。驚くほどの力で両手を背中にねじ上げ、黒革の手枷で嚴重に拘束した。厚手の羊皮で作った手枷はしなやかだった。両手首が無理なく一つに繋がれてしまった。続いて桜さんが首に黒い皮帯を巻く。柔らかな羊皮の帯が身体の前後に何本も垂れた。裸身の様々な方向に革帯が伸びて要所要所が尾錠で固定される。最後に背中の皮帯が手枷のチェーンに通され、首筋に向かって後ろ手が厳しく引き上げられた。調節のきく尾錠が固定されると拘束が完成した。豊かな乳房は菱形の皮帯で持ち上げられて、高々と突き出されてしまった。つんと立った乳首が目の下で仲良く並んでいる。両方の二の腕も左右均等に皮帯で縛られてしまった。身動きできないほどの厳しい拘束だが、しなやかな羊皮が肌に優しい。麻縄で縛られ慣れた裸身が優しさに一息つく。何となく中高年向けの縛りのような気がした。改めて自分の年齢を感じさせる。暗然とした気分になった。

「きれいよ、M。全身から官能が溢れてくるようよ。素晴らしいわ。口枷もしてみましようよ」

華やいだ声で言った桜さんが別の段ボールから大きな穴の開いた皮帯を持ってきた。

「お願い、M。大きく口を開けてみて。そう、歯が溝にかかるまで口を開くの」

桜さんが直径四センチメートルほどの金属の輪を口に噛ます。裏側は硬質ゴムが貼ってあり、上下に歯が入る溝が切ってあった。金属の輪は黒革の猿轡の中央に取り付けてある。輪を口にくわえ終わると、猿轡から鼻の両側を通して延びた皮帯で額と後頭部、あごが拘束されてしまった。大きく口を開けて拘束する口枷からは驚愕した大きな目と落ち着きなく蠢く赤い舌しか見えない。もちろん発語することなどできはしない。唾さえ呑み込むのに苦勞する。口中に空しく涎がたまった。

「仕上げに肛門調教具を装着してやろう。桜さん、持ってきておくれ」

若かったころの自分の肉体を思い描くような目をして、お米さんが興奮した声で言った。「でも、股帯に空ける穴のサイズ用に借りた調教具はLサイズしかないわ。一番太い所が四センチメートルもある。Mのお尻に入らないかも知れない」

のんきに答えた桜さんの言葉がMを驚かせた。反射的に尻の穴がきゅっとすぼまる。言葉にならぬ声を上げ、身を震わせて拒絶した。だが、お菊さんの素っ気ない声がMを打ちのめす。

「大丈夫だ。Mの尻の穴はよく使い込んであるぞ。わしがこの目で見たんだから間違いは

ない」

一方的な答えに桜さんが感心した顔でうなずく。足早に壁際の棚に行き、二つの品を手にしてきた。一つは真ん中が括れたヒョウタンのような黒いゴム製の筒だ。筒の底から二本の細いゴムパイプと、バルブのついた小さなゴム鞠が二つぶら下がっている。もう一つはしっかりした造りの革のT字帯だった。お米さんが凶々しい黒い筒を受け取り、Mの目の前で無邪気そうに振った。

「これはわたらの製品ではないが良くできている。肛門調教ポンプとも呼ぶそう。二つ付いたゴム鞠のポンプを使い、筒を膨らますこともできるし浣腸もできるという優れ物だ。この責め具をわたらが作ったT字帯で股間に装着するんだ。昔からそうだが、人は皆すけべなものだ。Mも心行くまで悶えていいぞ。さあ後ろを向いて足を開き、尻を突き出せ。糞が出るほど尻の穴を広げないと肛門が裂けるから心しろよ」

口枷を噛まされたMに返事はできない。正面に立ったお米さんに小突かれて後ろを向き、腰を曲げて尻を突き出す。突然、尻を激痛が襲った。お米さんが合図もせず、マッサージもせずにゴムの筒をグリグリと肛門に押し込む。Mは涙を流しながら強く息んだ。ほんの少し失禁した途端にゴムの筒先の前方のくびれが肛門に入った。

「本当によく使い込んだ尻の穴だ。若いのに隅に置けぬ。立派な心掛けだぞ。女郎屋がなくなったことが残念でならない。これなら天下一品の身体だ」

嘆息したお米さんが、肛門調教ポンプを装着したT字帯でキリキリとウエストと股間を締め上げた。

「ついでに足枷と膝枷も試そう」

お梅さんが言って、両足首と膝を頑丈な革の枷で拘束した。一仕事終えた四人の老婆は顔を見合わせ、Mの周りを巡って舐めるような目で拘束振りを点検する。やがて一様に満足して思い思いにMの回りに座り込んだ。すけべの行き先にも果てはないと、Mは思う。どの顔にも歡喜と性的な高ぶりが溢れていた。黒い皮帯で拘束されて直立するMだけが悲惨だった。心行くまで悶えても良いと、いくら言われても無理な話だ。衆人環視の中で官能に悶えられるほどの修業は積んではない。それに、見ている者は老婆だけだ。失礼ながらグロテスクな思いが先に立ち、官能どころではないのが本音だった。ただじっと不当な慰みの時間が終わるのを待つだけだった。時間は悔しいほどゆったりとしか流れないが、ようやく薄闇が部屋に訪れてきた。暗く沈んだ荒涼とした空間に白い裸身が浮き上がっている。妖艶な眺めだった。しばらくの沈黙の後、お菊さんが口を開く。

「桜さん、下に行ってすけべな金貸しを連れておいで。富士見荘に越して来たばかりの娘が素っ裸で縛られ、挨拶をしたがっていると訴えるんだ。這ってでも上がってくることを請け合ひだよ」

四人の老婆が高らかに笑った。Mは気が気ではない。今度はお爺さんまで来るという。悲惨な姿で挨拶をさせられるのだ。

「すぐ連れてくるわ」

少女のような華やいだ声を残して、七十二歳の桜さんが軽い身のこなしでドアを開けて二階に下りていった。やがて階下からステッキを突く音が聞こえてきた。音はゆっくり階段を上がり、廊下の端で少し途切れた。九十歳になる元墮胎医の高利貸しが息を整えているに違いないとMは思った。ノックの音が響き渡る。

「先生がお見えになりました」

中の者に触れる桜さんの若やいだ声が聞こえた。

「どうぞ。お待ちしていました」

三人の老婆が立ち上がり、お菊さんが気取った声で言ってドアを開けた。桜さんを従えた先生は小柄な老人だった。左足を微かに引きずり、ステッキを突いていたが、とても九十歳には見えない。表情も知性的だ。強欲な金貸しのイメージも墮胎医の暗さも感じさせない。リタイアして久しい小児科医といった風貌だった。しかし、ツルツルに禿げ上がったまん丸な頭部と、ぞろりと着こなした茶系の大島紬がどことなく怪しい雰囲気醸し出している。

「おお、悩ましい姿だ。二十年は寿命が延びそうですね」

薄暗い空間に浮かび上がる裸身を見た先生が大仰に感嘆の声を上げた。その声が合図のように、後から入ってきた桜さんがドアを閉めて蛍光灯の紐を引く。頭から明るい光を浴びた裸身が微かに震えた。拘束具で強調された両乳房で、突き立った乳首が固くなった。柔和だった先生の目が刺すように光る。

「M、正座して先生にご挨拶しなさい」

丁寧な言葉使いになったお菊さんがMに命じた。Mは足枷と膝枷で繋がれた足を無理に折って、ささくれた畳の上に正座した。先生もMの前に座る。四人の老婆が座るのを待って、Mは後ろ手に緊縛された不自由な身体で中腰になって頭を下げた。畳に額を着けて身体を支える。下に向けた口から情けないほど涎がこぼれて古畳を濡らした。背後に高く突き出した尻で、肛門調教ポンプから伸びた二本のゴムパイプとゴム鞠が尻尾のように揺れ

る。恥ずかしさで全身が赤くなった。お菊さんが立ち上がり、裸身に手を添えて再び正座させた。口枷で戒めたあごに手をかけ、無理に顔を上げさせてから先生に訴える。

「先生、このように口を開けて、この娘は先生をお待ちしていたのです。なにとぞ、お情けをかけてやってください」

「お願いします」

お菊さんの口上に続けて三人の老婆も口をそろえて艶めかしい声を出した。Mの背筋を冷たいものが走る。先生が大きくならずいて腰を上げ、すぐ前に立った。やにわに大島紬の袴の裾を大きく開く。後ろに控えた桜さんが裾を摘み、素早く背中にたくし上げた。細い足を剥き出しにした先生の股間で萎びきったペニスが揺れている。目と鼻の先だ。顔を曲げてよけようとしたが、お菊さんが後ろから頭を支えてしまう。口枷で大きく開かれた口の中に先生がペニスを挿入した。なんとも言えぬ、ぶよぶよとした感触が舌尖に触れた。一瞬全身がビクッと震えた。先生が腰を使う。縮めた舌を追ってぐにゃっとしたペニスの先が口の中を動き回る。喉元に吐き気が込み上げてきたとき、両の乳房が優しくもまれた。意外に張りのある先生の指先が繊細に乳房を這い、乳首をつまむ。T字帯で戒められた股間の奥で小さな火が点った。Mを求める先生の執念が痛いほど陰部を刺激する。縮めた舌を伸ばし、恐る恐る柔らかなペニスの先に舌を這わせた。小さな喘ぎが先生の口を突くと、萎びきったペニスがむっくりと頭をもたげた。なんとも言えない感動が下腹部から湧き出し、股間が濡れた。官能の行く末にも、きっと果てはないのだと痛切に思う。ピアニストの顔が脳裏を掠めた。死刑囚のピアニストには明らかな果てが実在する。きつくつむっていた両目から涙が湧きだし、頬を伝った。涙の滴は頭をもたげかけた先生のペニスの根元も濡らした。先生の腰の動きが止まり、勃起しかけたペニスがそっと引き抜かれた。

「この性具は気に入りました。一セット十万円で買しましょう。この娘を付けるなら百万円だ。文句はありませんね」

先生の陽気な声が部屋にこだました。思わぬ臨時収入の知らせに四人の老婆が浮き立つ。Mは涙に濡れた目を開いて先生を見つめた。

「どうせ返済金の遅れを見逃してもらいたくて、婆さんたちの仕組んだことに違いないのですが、あんたの潔さが心底気に入りました。Mさん、これに懲りずにいつでも遊びに来てくだされ。買った性具を使わせてくれれば、その都度二万円を出しましょう。どうせ九十歳の爺の言うことだ、気軽に付き合ってくればいいんですよ」

Mを見つめて言い切った先生が懐を探り、分厚い財布から十二万円を取り出す。二万円

を別にして裸身の前の畳に置いた。

「これはこれ、あれはあれだ。皆さん、利息は寝ていても付くことを忘れずに、みっちり稼いで借金なしに励んでください」

言い残して先生は立ち上がり、先ほどと同じ知性的な身のこなしでドアを開けて廊下に出た。階段を降りるステッキの音が響くと同時に、四人の婆さんははじかれたようにMの周りに寄ってきた。喜々とした六本の手が素早く淫らな拘束具を外して裸身を撫で回した。「凄いわ。Mは金の卵ね。先生の言いなりになりさえすれば一か月で六十万円も稼げるわ。私も若かったら借金苦勞をしなくて済んだのね。Mが羨ましい」

畳の上に置かれた十二万円を見つめて桜さんが陶醉した声で言った。

「何を言う。Mは女郎ではないぞ」

言ってしまうからお菊さんは、慌ててお米さんの横顔をうかがう。

「いいや、女郎だってそんなに稼げない。わしを見れば分かる。Mの身体はお宝じゃ」

興奮しきったお米さんは昔の自分に帰って話している。皆一様に若やいでいた。老婆たちの興奮がMの素肌に染み通っていく。

「私は、本当に求められたときは先生の所に行こうと思う。先生のような老人に身体を売っても売春のような気がしないわ。でも、ただではだめ。先生を馬鹿にしているような気がするの。強突張りの金貸しでも性には惜しみなく金を払う。具にも付かない男に身も心も捧げきる性もある。大先輩たちの前で言うのも気が引けるけど、皆さんを見ていると女の性は凄いと思う。奥が深すぎて、原初の仕事の売春さえ肯定したくなってしまう。自分の責任と人格で生きて行くなら、身体を金に換えることが罪悪とは思えないわ」

思いがけぬ言葉が口を突いて出た。Mは惑う。

「そうじゃ、そのとおりじゃ。女郎はみんな、好きこのんで身体を売ったのではないぞ。悲しい性が身体を売らせたのだ」

お米さんがまた大声を出した。Mの真意は伝わっていない。共有した興奮だけが世代を越えて性を謳っていた。ただ一人興奮を免れたように、お菊さんがMを拘束していた性具を袋に詰め、いつもの掠れ声で問い掛けた。

「M、この拘束具は十萬円で金貸しに売れたものだ。悪いが、ぬしが持っていってくれ。奴も喜ぶだろう。この二万円はMのものだ。わしはMが身体を売ったと思わんし、たとえ売っても軽蔑はしない。だが、暮らしが立つのに身体を売ることを、きっとわしは認めないだろう。M、好いた男はいないのか」

「いるわ」

即座に答え、嘘をついた。ピアニストの顔が宙を掠めて消えた。やはり嘘かとMは思った。熱くなっていた気持ちが急激に冷え切っていく。疲れ果てた裸身を震えるほどの寒さが襲った。

先生の部屋は大階段の踊り場の東側にあった。ドアの横にはインターホンが取り付けられている。Mがインターホンに向かって来意を告げると電氣的に錠の外れる音がした。別回線で部屋に電源を取って、セキュリテーシステムを導入しているらしい。ドアも他の部屋とは違い、別あつらえの厚い樫材でできていた。方形の部屋の広さだけが同じだった。古畳はなく、桜材の寄せ木で葺いたフローリングの上をふっくらとしたペルシャ絨毯が被っている。黒檀の一枚板でできた大きな座り机がドアに向かって置いてある。腰高の小さい窓は聖母マリアを表したルオーの模写のステンドグラスになっていた。狭い部屋に三灯も使った間接照明がステンドグラスを絵画のように浮き上がらせている。富士見荘ではなく都会のホテルに紛れ込んだような豪奢な部屋だった。空調の音だけが微かに響いてくる。室温は暖か過ぎるほどだ。拘束具を入れたレジ袋を持ってドアを背にして立ちつくすMの前で、二間続きの引き戸が音もなく開かれた。厚手のシルクのナイトガウンを着た先生がMを見てにこやかに笑う。

「早速届けに来てくれたのか。口枷をされた裸身も良かったが、服を着た素顔も捨てたものではないな。掃き溜めに鶴とはよく言ったものだ。きっと深い訳があるのだろう」

静かな口調だったが、先ほどと言葉遣いが変わっていた。若い性に対抗するような気負いを感じて、思わずMは笑ってしまう。

「そんなにおかしいか。若い女はよく笑う」

九十歳の老人から若いと言われても否定することはできない。Mは富士見荘にいる限り、小児化し退行して行くしかないような気がした。年相応のMの行為が、老人たちには背伸びをしているとしか見えないらしかった。老人たちが成長をやめてしまったとしか考えられなかった。思うにまかせぬ行動力が思考を停止させ、後から追う者を擲擄させるのだ。肉体の衰えが一切を規定している。歳を取ることが恐ろしくなった。

「二万円はありがたく頂きます。ありがとうございました」

誠意を込めたMの声に先生の目が鋭く輝く。口元に下品な笑いが浮かんだ。

「金に困っているなら、僕がいつでも貸してやる。利息は月十パーセント。Mの場合は物

納も認めるよ」

「身体を売れということね。私は物でないわ」

挑戦的な答えに先生は特別の反応を見せない。ゆったりとした立ち姿で背の高いMの顔を見上げた。

「ほう、さっき二万円で買ったはずだが、他の売り方もするのかね」

「確かに、お金はいただいたわ。でも、不当に拘束された身体を陵辱されたのよ。謝罪金といった方が正解ね」

「受け取った金にMは礼を言った。身体を売ったことを認めたのだろう」

動じる気配もなく先生が言い募った。Mの全身に疲労がたまる。

「百歩譲って、身体を売ったと言ってもいいわ。でも、私が売ることを決めたのよ。決して買われることを認めたんじゃない。これは、私が先生を買う場合もあるということなの」

「言いたいことは理解できないでもない。僕は九十年も生きてきたすけべだ。春をひきぐ女との経験も豊富だ。身体を売る女は決して自分の官能を求めはしない。商品としての身体が持たなくなるからだ。Mはさっき、悲惨な姿態をさらけ出しながら九十歳の僕を相手に官能を追おうとしたね。僕はうれしかった。だから二万円払った。Mが僕に二万円払う場合もあるという意味は分かる。金の受け渡しがなければ自由恋愛ということだ。だがこの歳になって、そんな甘い夢など見たくはない。金を受け取ってくれたことに感謝している。Mはプライドが高すぎるのだ」

Mは黙って大きくなずいた。先生の口元にまた薄笑いが浮かぶ。

「素直でいい娘だ。この部屋で今、Mの裸が見たい。素っ裸になってくれるだけで五千円出そう。脱いでくれないか」

「お断りします。私は身体ではなく労働が売りたい。でも、若い私がお婆さんたちの内職に参加するわけにいかないわ。仕事を紹介してください」

「身体が売れない者が労働を売るのだよ。なんで身近な物から売ろうとしないか分からないね」

「私は商人ではないわ。生産に携わってきたいの」

「どんな仕事がいいのかね」

「できれば単純労務がいい。特技のない前科持ちの女がすぐ働けるところなら、明日からでもいいわ」

先生の目がまた鋭く光った。しかし、口に出した言葉は言おうとしたものと違う言葉のようだった。熱意がない声だ。

「工事現場の交通誘導員をすればいい。この家主の大屋もしている。運転免許さえあれば誰にでもできる仕事だ。少しきついが月二十五万円にはなる」

「家主さんは雑貨の卸商だと聞きましたが、勤めているんですか」

天田の説明と違う家主のイメージに戸惑い、思わず尋ねてしまった。つまらなそうな顔で先生が答える。

「今時、ちり紙や歯磨きの卸がやっていける道理がない。売れ筋の雑貨はみんな、安売りスーパーの目玉商品だ。大屋の店も火の車だ。自分で稼ぐしかない。土地は全部抵当に取られ、こんなぼろアパートの権利書すら僕が預かっている始末だ。大屋と一緒に日に焼けて交通整理をするといい。色が黒くなっても僕は一向に構わない。いつでも拘束具を身につけに来てくれ。約束の値段でMを買おう」

先生の目が、また好色そうに光った。富士見荘には性の匂いと暮らしの匂いだけが満ち溢れているとMは思う。今日一日の疲れが全身に込み上げてきた。そっと目を閉じると、広い戸外で自動車を誘導する制服姿が目に見えた。爽快だった。老人のお守りはしていただけないと思った。家主と一緒に交通整理で汗を流すことに決定した。

#### 4 面会

Mが工事現場の交通誘導員を始めてから三週間が経った。思っていたより仕事はきつい。朝八時から夕方五時まで路上に立ちつくす。雨の日もあれば風の日もあった。毎朝の起床は午前六時。六時半にはきちんと朝食を食べる。食堂は富士見荘一階の暗い台所の板敷きの広間だ。四人の婆さんたちと一緒に食べる。午後七時の夕食も同様だった。一か月五万円を拠出して婆さんたちの共同生活に混ぜてもらったのだ。毎日二度の食事と風呂に入る権利が獲得できて洗濯もしてもらえた。金貸しの先生も月八万円で加入している。先生の料金には膳の上げ下ろしと身の回りの世話も含まれていた。先生だけは二回の食事を自室で食べる。だが、本当は金を払っていないらしい。料金は四人の婆さんの借金返済に充てられているという。一人当たり月二万円の返済だ。婆さんたちが実際に切り盛りする金は月二十五万円しかない。食事はお梅さんが作る。囲われていた旦那に愛でられたというお梅さんの料理はうまい。Mは一万円を余計に払って昼の弁当も作ってもらっていた。婆さんたちはMが加入したことで使える金が増え、食事の質が上がったと言って喜んでいる。全員が五万円ずつ拠出しているかどうかにも怪しいものだ。その上、内職の荷物運びや買い物、掃除などで力の要る仕事はMが受け持つことにされてしまった。会費を払って役務も提供する。原始的な共同生活といえないこともない。非力な婆さんたちが編み出した暮らしの知恵だった。息苦しささえ我慢すれば理想的なシステムだ。しかし、何もしない先生が混じっているため、どう格好を付けてもコンミュンとは呼べなかった。

食事はいつも台所の板の間に五人で輪になって座り、床に直接置いた食器を使う。今朝は暖かになった風が真冬には底冷えのする台所をさわやかに渡っていく。富士見荘は夏向きに作られた典型的な日本家屋だ。すでにMは灰色のガードマンの制服に身を固めていた。

「今日も、同じ現場なのか」

中央に置かれた山菜のお浸しに箸をのぼした途端に、お菊さんの声が飛んだ。

「いいえ、今日から現場が変わるわ。運動公園の横の水道工事よ。また大屋さんと一緒。お陰でバイクに乗せていってもらえる」

答えてから、さり気なく鉢に箸を入れた。しばらく前までは箸を躊躇していたところだ。Mがおかずを食べ過ぎると必ず誰かが何かしら声を掛ける。やはり婆さんとは食べる量が違うのだ。だが、嫌がらせをされても食べる一手だった。知らない振りをしていれば済む

ことに、やっとMは気付いた。四人の婆さんが無料の福祉バスで山地に行って摘んできた山菜はおいしい。あれこれ言っても結局老人は暇なのだ。味噌汁と漬け物、丼飯の他に、たまに生卵が食卓に出る。決まってスーパーで卵の安売りをしているときだ。使う醤油の量にまで婆さんの目が光った。けちと言うより確固とした暮らしの重みを感じてしまう。お陰で六万円を払っただけで安心して一か月の生活ができる。ガードマンの賃金も割のいい月給制を選ぶことができた。日給制にない皆勤賞の二万円が余計に支給されるのだ。給料が出るまで外食やコンビニエンス・ストアの弁当を利用していただけるとしたら、Mの残金と金銭感覚では食べられなくなっていたはずだ。婆さんたちの長年の個人的生活の失敗から編み出された共同生活は、煩わしさを差し引いてもお釣りの来るものだった。

「お先にごちそうさま」

四人の婆さんに声を掛けて立ち上がり、流しに行き自分の食器を洗う。婆さんたちは当番制だが、勤めに出るMは当番に参加できない。かといって余計な金を払う気はない。婆さんたちはしっかりしている。暮らしのキャリアが違うのだ。そもそもMに家計の切り盛りという感覚は初めからなかった。天涯孤独の付けが変なところで回ってきたと思う。婆さんたちに毎日厳しく仕付けられ、これまでの付けを払わされていた。とても太刀打ちできる相手ではない。食器を洗っている間にお米さんが入れてくれた温い茶を啜ってから、誘導灯やトランシーバーなどの七つ道具を入れたリュックサックに弁当を詰める。白いヘルメットを被ると全身が引き締まった。

「行って来ます」

全員に挨拶した。

「行ってらっしゃい」

声をそろえて四人の母がMを送り出した。このときばかりは温かいものが胸を満たす。たとえ紛い物でも家族はいいなと思ってしまう。黒い編み上げの安全靴を履いて玄関から外に飛び出す。鋭い日射しが全身を被った。春とはいえ、今日も結構暑くなりそうだった。足早に路地の出口に向かった。

家主の大屋の家は市道沿いの大きな店舗だ。広い間口にはシャッターが下ろされていた。本業の雑貨の卸はずっと停滞している様子だ。一枚だけ半分上げられたシャッターの前に90ccの黒いバイクが止められている。Mはいつものようにシャッターをくぐって暗い店舗に入った。住居は店舗の二階にある。大屋は五年前に妻を亡くし、今は一人暮らしだという。一人息子は都会の有名大学に進学していると自慢そうに話していた。四十七歳の

男だ。

「なにっ、息子の学費を取り上げるだって。そんなことはさせない、許さないぞ」

突然興奮した声が耳に飛び込んできた。大屋の声だ。事務所に使っている小部屋の奥から声は聞こえた。

「たかが百万円じゃないか。すぐに返すよ。三日、後三日待ってくれ。なあ頼むよ。長い付き合いだろう。息子の学費を押さえるのだけは勘弁してくれ。後二年で卒業なんだ。頼みますよ」

初めと違った気弱な声が後に続いた。借金の返済を迫られているようだ。どこに行っても金のない話しか聞こえてこない。うんざりする。もちろんMにも金はない。就職の支度や寝具の購入に出費がかさみ、有り金はもう五万円を切ってしまった。給料日まで一週間もある。百万円など夢の世界の話だった。

「おはよう、M。恥ずかしい話を聞かれました。本当に所帯苦勞はやり切れないよ。一人暮らしのMが羨ましくなる。大学生の息子を持つと本当に辛い。たかが百万の金で泡を食ってしまう。本当に情けない」

神経質そうな顔で大屋が愚痴をこぼした。いつもの悠揚迫らぬ、若旦那然とした顔の方がMは好きだ。

「なるようになるわ。行きましょう」

できるだけ明るい声でMが促した。大屋の長身がやっと胸を張る。黒く日に焼けた顔で白い歯が笑った。

「まったくだ。Mの言うとおりで。元気に稼ごう」

明るさの戻った声で大屋が答えて外に向かう。Mが後ろに続いた。

90ccのバイクが朝の織姫通りを駆け抜けていく。ガードマンの服装をした二人乗りは目立った。渋滞した車の列から悪意に満ちた視線が突き刺さってくる。それでもバイクはミズスマシのように車の列の間を縫って走る。四車線の産業道路に出ると、やっと一直線の安定した走りになった。小さなバイクの後部座席に跨ったMは窮屈そうに大屋のウエストを抱いている。しきりに祐子がMG・Fを使うように勧めに来るが、工事現場にスポーツカーで乗り付けるのは嫌味だった。もちろん富士見荘に駐車場はない。今はバイクの後ろがいいとMは思う。大屋の背中にぴったり張り付き、ウエストを抱いているのが楽しかった。このスタイルで三週間通勤したが、Mに抱かれた大屋のペニスが勃起したのは一

回きりだった。それもMが意地悪をしたからだ。三日前、Mを女として意識していないような態度を試したくて、さり気なく大屋の背中に乳房を押し当てた。ウエストに回した両手をできるだけ下で組み、荒れた路面でバイクがバウンドする度に股間をなぶってやった。ペニスが勃起したのはその時の一回きりだ。大屋は意地悪をしたくなるほど無防備な男だとMは思う。とても卸業の経営者には見えない。工事現場の休憩時間も、昼休みにも、大屋は美術と芸術の話しかしない。Mの知らない画家の名前をたくさんあげる。画集も色々集めているそうで、様々な画風を知っている。ずっと画家になりたいと思っていると、無邪気に打ち明けたことさえあった。口を開けば芸術の話だ。Mはそれが特に嫌いではないが、子供のまま大人になったような男をつい構いたくなってしまふのだ。だが、今朝のMはなにもしない。所帯苦勞と言った大屋の言葉と芸術との関連について考えることにした。大屋が大人と子供のどっちを取るか楽しみでもあった。やはり意地悪をしたくなってしまふ人物には違いない。

産業道路を工業団地の手前で右折してしばらく行くと、右手に野球場の高いスタンドが見えてきた。スタンドの回りに巡らせて植えた満開の桜が薄いピンクの霧がかかったようで美しい。思わず心が浮き立ってくる。現場は運動公園の中を横切る二車線の市道だった。ちょうど球場のスタンドに面した部分だ。一日に五十メートルを掘り進め、古い石綿管に替えて鑄鉄製の新しい水道管を埋設している。公園を横断する道路でも交通量は多かった。花見気分ではできない仕事だ。Mと大屋は現場の両端に別れて配置に付いた。工事で一車線となった道路を交互交通で車両を誘導するのが仕事だ。まずMの方から車を流す。赤い誘導灯を振って遅滞なく車を流していく。ほど良いところで後続車を止め、大屋に誘導灯を振って合図する。今度は大屋の方から車が流れてくる。お互いの姿が視認できる今回の現場は比較的楽だった。相手が見えないときはトランシーバーで合図し合う。二人の息が合わないと大変なことになる。車の速度が遅いので事故の心配はないが、渋滞になる恐れはいつでもあった。今日の現場は近くに信号のないことも幸いした。車の流れだけに気を配れば済む。だが気は抜けない。鋭い春の日射しがじりじりと二人の肌を焼いた。

しばらく大屋からの車の流れが続いた。Mの前には一台しか停車していないが、若い女のドライバーはいらだちを隠さない。短くクラクションを鳴らした。Mは深く頭を下げて、すまなそうにドライバーに微笑み掛ける。運転者の気持ちを和ませるのも誘導員の仕事だ。大屋の合図を確認し、道路の安全を実際に目で点検してから、また深くお辞儀をして大きく誘導灯を振る。大きな動作が必要なのだ。若い女はMとすれ違いざま、開け放した窓か

ら「ご苦労様」と声を掛けた。若い女にしては珍しいことだ。途端に疲労が吹き飛ぶ。単純な作業を一時間も続けると喉が渇き全身がだるくなる。作業を初めてすぐの、身体が慣れるまでのストレスだった。これを上手に乗り切ると一日が持つ。正午が近付くころには全身が汗にまみれた。目に流れ込む汗を片手で拭い、誘導灯を水平にして進入しようとする車を止める。誘導灯は工事現場では指揮棒のようだ。すべての車が指揮に従う。気分によっては壮快な気もしたが、何といても身体がきつい。単純な作業の繰り返しが頭を空白にする。しかしそれも、今のMにはありがたかった。物を考える気はない。とにかく身体を使い、金を稼ぐことが先決だった。

「誘導組も昼休みにしようや。道路を何とか広げてやるよ」

若い現場監督がMに声を掛けた。気配りが身に滲みる。昼休みでも車の誘導は休めない。交替で食事をするか警備会社が要員を派遣するしかなかった。五分間で昼食を済ます日さえあったくらいだ。今日の現場は比較的路面が広いので、機材を整理すれば乗用車程度の対面通行が可能だった。

「大屋さん、監督さんが道を広げてくれるわ。交通量も少ないから一緒にお昼にしましょう」

二十メートル先の大屋に大声で呼び掛けて、Mは日陰に置いたリュックサックを取りに走った。二人は運動公園の水飲み場で手と顔を洗い、現場を見通せる日陰を探した。ちょうどスタンドのコンクリートの壁際が日陰だった。五メートル前には満開の桜の木がある。最高の場所だった。リュックから弁当とビニールシートを出してコンクリートの壁際に並んで座った。

「大屋さんも月一万円出せば、お梅さんにお弁当を頼んで上げるわ。量は少ないけどおいしいのよ」

いつものようにコンビニエンス・ストアで買ったパンを不味そうに食べている大屋に話し掛けた。

「いいよ。本当は俺、飯は食べたくないんだ。時間に追われているようで食事の時間が好きになれない。好きなだけ絵を描いて、好きなときに少しだけ食べるのが俺の理想だな。一生食べないで済むなら最高だ」

スケッチ帳を大事そうに膝に載せた大屋が、にべもなく答えた。Mは眉をしかめてわずかな量の弁当を食べ、温いウーロン茶に口をつけた。大屋もスケッチ帳を広げたまま、じっと前の風景を見て缶コーヒーを啜っている。Mは壁にもたれてそっと目を閉じた。スケ

ッチ帳に走り出した大屋の鉛筆の音が懐かしく聞こえる。絵を描くための筆記具を最後に持ったのはいつだったろうかと記憶を辿った。小学校のころまで遡らねばならないような気がした。無邪気に絵など描いていたのはそのころまでだったと思う。寂しさが込み上げてきて、急に大屋の絵が見たくなった。目を開き、身体を曲げてスケッチ帳をのぞき込んだ。目の前の風景とまったく違った絵が描かれている。桜の花びらだけが、かろうじて現実を写していた。花びらは画面隅に描かれた小さな子供の上を流れていた。一面の草原を渡る風に、なぜか桜の花が舞っている。広い草原と子供、そして舞う花びらしか描かれていない。だが、大屋はしきりに目の前の風景を見つめて鉛筆を走らせている。

「大屋さんの描く風景は、現実と全然似ていないのね」

絵を見つめて、Mが冷やかすような声で言った。

「俺の目にはね、風景がこう見えるんだよ。桜の花は、ただひたすら草原の風に舞うんだ。この絵が嫌いかい」

「いえ、好きよ。でも、どうしたらそう見えるんだろう」

「Mの思うとおりでいいんだ。所詮アートなんて好きか嫌いかだよ。好きな風景を見ようとすれば嫌いな物は消えてしまうさ」

目を輝かせて大屋が答えた。Mははぐらかされたような気がした。重ねて問い掛けたくなる。

「大屋さんの絵には色が無いのね。寂しいわ」

「色は俺の頭の中にあるのさ。描く絵にふさわしい、すてきな色合いがみんな頭の中に塗られている。でも、実際に色を塗ったら、それはもう俺の色ではない。俺は画家になると決心しない限り色は塗らない。せっかくのスケッチを情けない絵にしたいくないんだ。だが、俺は画家になれない。だから色は塗らない」

「大屋さんは子供みたいに勝手なことばかり言うわ」

「何かを表現しようとしている者はみんなそうだよ。例えば音楽家。ピアニストだって、頭の中に最高の音色を隠しているはずだ」

唐突にピアニストという言葉が爛漫の桜の下にこぼれ落ちた。途端にMの心臓が凍り付く。遠くのグラウンドから風に乗って聞こえていたマーチがやんだ。やんだ瞬間、音楽が鳴っていたことに気付いた。思わず耳を澄ますと、行き過ぎる車の騒音を縫ってピアノの音色が聞こえてきた。音は少々潰れているがショパンの「別れの曲」だ。春の運動会が昼に食い込んで終わり「別れの曲」が流されたらしかった。全身に衝撃が走り、目の前が真

っ白になった。確かにピアニストは音楽家の卵だったのだ。十五年前の春の宵に、演奏家になる道を捨てたピアニストはMに「別れの曲」を弾いてくれた。コンクリートの壁にもたれたMの身体がむせび泣いた。果てしない涙が堰を切ったように両目から溢れ出す。ああ、大屋の言ったことは皆真実なのだと確信した。色を音に置き換えれば、ピアニストが悶えるように悩み、投げ捨てていった道に一切に通じる。その道のしるべに、Mは確かに求められたのだった。完成されることのなかったピアノの音色は今もピアニストの頭の中で鳴っているのだろうか。しかし、もう二度とピアニストはピアノを弾くことはできない。アートは完成されることもなく一切が闇に葬り去られるのだ。ピアニストが聴いていた音のすべてを聴きたいと痛切に願った。未完の音色の悲しさがMを責め苛む。

どれほどの時が流れただろうか。涙も涸れ果て、声にならぬ嗚咽を繰り返すMに大屋が声を掛けた。

「もう仕事に戻る時間だ。横顔をスケッチしたよ」

差し出されたスケッチ帳にはMとまるっきり違う女の横顔が描かれていた。女は泣いておらず、涙の中に沈んだ横顔があった。

「俺はこれほど激しく悲しい泣き顔は見たことがない。Mが泣くのではなく、涙の中にMがいた。お節介のようだが、自分を隠し続けるのは良くないよ。ストレスが溜まってしまふ。俺みたいに、頭の中で生きるようになったらおしまいだ」

大屋の言葉が空っぽになった頭に突き刺さった。すぐにでもピアニストに会いたいと思った。

待っていた日曜日がやっと来た。交通誘導の仕事もさすがに休みだ。Mはこの四日間を悶々として暮らした。飛んで行ってピアニストに会いたい衝動と必死に戦ってきた。たとえ自ら求めたとしても、ピアニストに求められたとしても、閉塞された場で悩むピアニストを煽るような真似だけはしたくなかった。今の暮らしの中で許された道だけが未来を切り開くことに通じると、自分に言い聞かせて過ごした。もう夢は見たくなかった。だが、今日こそピアニストに会おうと思う。せっかくの休日を有効に使うだけの話だった。

Mは封筒の裏書きにある刑務所の住所を何度も読んだ。そこは市から電車を乗り継いで二時間の日本海に面した地方都市だ。給料日を明日に控えた手元には三万円しか残っていない。刑務所までの交通費は往復で約二万円だ。電車賃を節約して、祐子にMG・Fを借りようかと思ったが思いとどまる。一緒に住む婆さんたちの真摯な生き様を踏みにじるよ

うな気がしたのだ。身一つでまず足搔いてみない限り他人事になってしまう恐れがあった。

午前六時に富士見荘の大階段を下りた。服は一張羅の煉瓦色のジャケットに黒のロングスカートを選んだ。日に焼けた黒い顔が少し気になったが、かえって煉瓦色の服がよく似合うと思い直す。唇には真紅のゲランを思い切って引いた。玄関のガラス戸を開けると運悪く井戸端にお菊さんとお梅さんの姿が見えた。老人は日曜日でも朝が早い。大きな声で朝の挨拶をすると、二人そろって挨拶を返した後、訝しそうにMを見つめた。

「早いね。せっかくの日曜日なのに、お出掛けかい」

当然のようにお菊さんが尋ねてきた。

「ええ、日本海まで行って来るわ。お梅さん、朝御飯が食べられなくてごめんなさい」

「なに、気にすることはない。そのぶん食費が助かる」

お梅さんに代わって、お菊さんが婆さんらしい答えを口にした。お梅さんはじっとMを見つめている。刺すような視線が痛い。

「M、男に会いに行くんだろう」

お梅さんが唐突に口を開いた。勘の鋭さにMがたじろぐ。

「そう、でも刑務所にいるのよ。ただの面会」

話を早く切り上げたくて、無愛想に答えた。今度はお菊さんの目が鋭く光る。

「その男は、いつ出て来るんだ」

静かな声で尋ねてきた。立ち話では済まない迫力がある。Mは戸惑う。刑務所の話はやはりまずかったと悔やんだ。

「彼は出て来れない。死刑囚よ」

薄く曇った春の天気がMの一言で凍り付く。だが、お菊さんの迫力は衰えはしない。

「行くのはよせ」

鋭い声で言った。

「いいえ、私は行く。行かなければ生きていく自信が持てない」

冷静な声で答えられたことにMは満足した。お菊さんの硬い表情が潮が引くように解けていく。哀れみのこもった声が小さな口にこぼれた。

「やはりやめておけ。死刑囚には身内しか面会できん。行っても無駄だ」

「でも行くわ。夕方には帰る。夕食はご一緒します」

お菊さんの情けを振り切ってMが答えた。婆さんは二人とも黙ったままだ。Mが頭を下げて歩き出すと、背中に「行っておいで」とそろった声で呼び掛けた。今にも降り出しそ

うな空が三人の頭上を被っていた。

Mはこの市で初めて電車に乗った。午前六時二十分発の上り普通電車だ。二両編成の電車はゴトン、ゴトンと少しの間を走っては小さな駅に停まる。乗降客のいない駅もあり、乗客も少なかった。交通の要衝の都市に着くまで九つの駅に停まりながら一時間をかけて電車は走る。有識者の言うとおりの、確かに市は陸の孤島だった。やっと交通の要地についても、都会から走ってくる特急電車との連絡に三十分間待つ。乗ってしまえば早い。一時間ちょっとで日本海に面した都市に行けるのだ。やっとホームに着いた特急電車も思ったより空いていた。Mは先頭車両の窓際の席に座った。県境の長いトンネルを抜けると車窓を雨が濡らした。高い山脈を隔てて両側の天気がこんなにも違うのだ。多分、人の気持ちも違う。異境の地で確実に訪れる死を待つピアニストの心境を思ってしまう。その死はひょっとすると今日かも知れないし、昨日であったのかも知れないのだ。密室同然に隔離された刑務所で襲う死は、外の人間に知る術がない。死刑廃絶に関心のある一部の新聞が刑の執行を小さく紙面に載せるだけだ。死刑囚の死は法務大臣の気まぐれで決まる。在任中に死刑執行の署名を一度もしない大臣もいるとのことだ。死刑とは、すべてが人の恣意に委ねられた最も不自然な死だった。

終着駅には心なしか日本海の潮の香りが流れているようだった。Mは重い腰を上げて地方鉄道の連絡通路へ向かった。たった一両きりの茶色の電車が古ぼけたコンクリート造りの駅舎の隅でMを待っていた。Mは座席に座らず、ドアの横に立った。たった一駅のために乗る電車だったが、見ず知らずの土地では歩くにしても見当がつかない。刑務所にタクシーで乗り付けるのは何となく気が引けた。一か月前まで刑務所にいたMにとって、今も刑務所は威圧的に映る。一切の自由と人格を奪い去られた屈辱の暮らしが思い出されてしまうのだ。貧相な電車は定刻通りに走り出した。電車は新しい建築物で混雑した市街地の中を走る。都市化の波が日本海沿いの地方都市にも確実に襲い掛かっているのだ。車窓から見える市街はすべてショーウィンドウの眺めだ。だが、少し目を凝らすと、切ないほどの暮らしの匂いが雨にくすんだ街から漂ってくる。富士見荘で嗅ぐのと同じ、お金の追われる切ない匂いだ。

電車は五分ほどで刑務所のある駅に着いた。時刻は午前九時を回ったところだった。まだ雨は降りやまない。ちっぽけな駅前広場には商店街があり、スナックやバーの看板も出されていた。夕刻になれば雑然とした活気が溢れるはずだが、この時間ではコンビニエン

ス・ストアと刑務所の差し入れ屋以外はシャッターが下りたままだ。差し入れ屋は囚人に面会に来た者が所内に持ち込みを許された弁当や雑貨を買う店だった。どこの刑務所の前にも必ずある陰気な店舗だ。締まったガラス戸に貼ってある地図で刑務所への道順を確かめる。駅前の道と交差する広い国道を渡り、大河にかかる橋を渡りきった先の左手に刑務所はあった。地図で見る限り寂しそうな場所だ。都市化が進む地方都市だが、大河の向こうには刑務所と埠頭しかない。地図を見上げるMの頬を冷たい雨が濡らした。潮の混ざったような、ねっとりとした雨だ。髪も肩先もじっとりと濡れる。コンビニエンス・ストアに入って四百円で傘を買った。透明のビニールでできた小さな傘だ。背筋を正し、うなじを上げて歩き出す。透明な傘の上を涙のように雨の滴が流れていく。

大河にかかる長大な橋をMが一人で渡っていく。歩道に吹き上げる風に乗った雨の滴がワインレッドの靴と黒いスカートを冷たく濡らす。眼下に見える広大な川筋はどんよりした鉛色に染まっている。まるで流れることをやめてしまったようだ。川筋の果ては雨足に溶け込み、垂れ込めた雲と海の境目すら定かでない。全身が雨と潮で濡れそぼってしまう気がする。時たま通り過ぎる車が徐行してクラクションを鳴らす。乗っていけという合図だ。Mは合図を無視して真っ直ぐ前を見て歩く。ようやく橋を渡りきると、左手に刑務所の望楼が見えた。広大な方形の敷地の四隅に赤煉瓦を積んで築いたどっしりとした望楼が周囲を威圧している。望楼は同じ赤煉瓦で築いた高い塀に根を張り、雨空に向けて直立していた。雨は赤い煉瓦の表面を叩いて内部に浸み込む。煉瓦の鮮やかな赤は黒へと彩りを変え、塀際を歩くMの気分をなお一層暗く打ちのめした。T字路になった交差点の左が正門だった。傘をすぼめて潜り戸に入る。短い渡り廊下の先に面会者専用の自動ドアがあった。ドアの両側には粗末なベンチが二つ置いてあるが座っている者はいない。Mは歩調を変えずにドアを通った。

室は思ったより狭い。すぐ前が受付の窓口だった。パソコンのディスプレイを前にして紺の制服を着た職員が座っている。職員は先着の老婆の話聞き、キーボードを叩いている。他に人影はない。右手に待合室と銘板の打たれた部屋があり、開け放されたドアから四人の男女が見えた。室は明るく照明されているが全体に疲れ切った重い雰囲気が漂っている。Mはドアの横に立って、しばらく老婆の様子を見ていた。刑務所に来るまで考えてきた筋書きを頭の中でおさらいする。誰にともなくうなずき、室の中央に用意された記載台の前に行った。面会申請書に備え付けのボールペンを走らせる。文字をなぞる音がうるさい。続柄に姉と記入し、備考欄に五日前に認知された腹違いの姉と書き添えた。後は受

付の対応を待つばかりだ。老婆の後ろに並んで待つ。胸の鼓動が高まっていくのが分かる。職員から面会許可証をもらって老婆が退くと、すぐ窓口申請書を出した。差し出した紙片を職員が手に取って見て、黙ったままキーボードを叩く。待つ間もなく現れたデータを横目で読んで職員がMの顔を見上げた。

「家族票には父と母しか記載されていません。姉の名前はありませんね。残念ですが面会はできません」

「嘘よ。五日前に父に認知されたって書いておいたでしょう。データが間違ってるんじゃないの。見せてください。納得できないわ」

困惑と哀願の調子が強く出るようにして抗議し、これ以上ないほどの熱い視線を若い職員に浴びせた。職員が困惑して視線を落とす。

「嘘じゃないですよ。ほら見てください」

職員がディスプレイをMの方に回した。Mはとっさに目を走らせ、ピアニストの囚人番号だけを見つめ、必死で記憶に焼き付けた。ディスプレイの向きはすぐもとに戻される。Mは大きくうなずいて囚人番号を頭の中で復唱した。

「改めて、また来てください。本籍地からのデータが遅れているのかも知れませんよ」

首を縦に振ったMの仕草を誤解して、職員が申し訳なさそうな声で言った。

「そんなのダメよ、今さら帰れないわ。やっと認知したと、父から連絡があったので札幌から飛んできたのよ。弟はいつ死刑になるか分からないんでしょう。お願い、市に問い合わせてください」

職員目をじっと見つめて哀願した。今にも泣き出しそうな目を見て、職員の困惑が深まる。

「いいでしょう。今日は日曜日だけど、市役所には日直がいるかも知れない。事務所に連絡して、そこから市に問い合わせてもらいますよ。しばらく待っていてください。時間がかかるかも知れないけど、それでダメなら次の機会ですよ。いいですね」

思いの外親切な対応が返ってきた。背後で人の気配がした。Mは黙ってうなずいて道を空ける。黒い背広を着た三人連れが代わって窓口に向かった。Mは室の隅に立って目まぐるしく頭脳を働かせた。爪先から髪先へと焦りが行き来する。時間はそれほど残されていなかった。嘘の筋書きは市に問い合わせればすぐにばれる。それまでに次の作戦を考えねばならない。せいぜい一時間が勝負だった。Mはいらだちに身体を震わせて待合室に入っていった。方形の部屋の中はひっそりしている。壁にもたれて見るともなく室内を見回

す。黒いビニールレザーを張ったベンチに、ひっそりと座っている老婆が目に入った。先ほどMの前に受付を済ませて面会許可証をもらった老婆だ。窓口で盗み見た書類では内縁の夫と面会する様子だった。嫉妬心が頭をもたげる。老婆の横顔にお菊さんの顔が重なる。その瞬間、頭の中で形をなさないアイデアがひらめいた。Mは老婆の前にゆっくり歩み寄り、足下にひざまずいて両手を握った。老婆の顔が驚愕に震える。優しく手をさすって祈るような目で視線を捕らえた。

「お婆さんは、よくここに来るのですか」

静かな声で尋ねると、老婆が首を横に振った。

「私はM。お婆さんにお願ひがあります。ここもすぐ面会人で一杯になってしまいます。一緒に外に出て、ぜひ私の話を聞いてください。頼みます」

縫り付く声にありったけの誠意を込めて、老婆の手を取って立ち上がった。老婆は一言も口を利かずに黙ったままMに従う。混雑してきた受け付け室の自動ドアから外に出てベンチに並んで座った。

「お婆さん。あなたの会う人に私を会わせてください。お願いします。私はM。愛しい人に会いたくてここまで来ました。その人は死刑囚です。身内の者しか面会できない。でも、どうしても私は会いたい。殺される前に会って、愛を、憎しみを確かめたい。お願い、あなたの代わりに私を面会室に入れてください」

老婆に訴える目に涙が浮かんだ。涙は降りやまぬ雨のように次から次へと両目に溢れ、冷たい頬を濡らした。

「わしの代わりに爺さんに会っても、あんたの思ひは遂げられはしない」

黙って聞いていた老婆が初めて口を開いた。Mの目に希望の火が灯る。

「面会室に入れるだけでいいのです。その後は私が全力で切り開きます。入れ替わりが発覚したときは、愛想のいい女に面会許可証を預けてしまったと言ってください。すべての責任は悪者になった私が負います。お婆さんに罪はないのです。少し時間がかかるでしょうが、お婆さんも今日中に面会できる。私に騙されて下さい。お願いします」

老婆はMの訴えを黙って聞き、遠くを見つめる目で降り続く雨を見つめた。

「わしの会う男は若いころに添い遂げられなかった男だ。金がなくて一緒になれなかった。わしは仕方なく親の薦めで嫁に行き、四人の子を育てた。四人とも成人して独立したと思ったら夫を亡くした。あの男は自堕落な生活を続け、小さな罪を犯し続けていた。わしのせいだったかも知れない。わしは反対する子供たちと親子の縁を切って男の元に帰った。

そう、帰ったんだ。だが、男はまた罪を重ねて刑務所にいる。でも、ありがたいことに生きている。Mの男とは違う。また娑婆に出れば、わしに当てつけるように罪を重ねるだろう。M、こんな紙は好きに使ったらいい。愛しい男が死ぬ前にぜひとも会え」

静かな語り口の底で愛憎の残り火が熱く燃え上がった。Mの頬が上気する。くたびれた巾着から面会許可証を出して老婆がMに差し出す。Mは拝むようにして小さな手から許可証を押し頂いた。

「少し寒いけど、しばらくここにいてください。すぐ騒ぎになって迎えが来ます。その間これを着ていてください。お願いします」

Mは煉瓦色のジャケットを脱いで老婆の肩に着せかけた。深々と礼をしてから自動ドアに戻っていった。

待合室も面会人で混雑していた。賑やかに私語が飛び交っている。Mがベンチに座るとすぐ、スピーカーが老婆の名を呼んだ。素知らぬ顔で立ち上がって奥のドアに向かう。背中に刺さる視線を意識して背筋を伸ばしてドアを開け、面会室に続く廊下に出た。三メートル先の突き当たりに置いた机の向こうに係官が座っている。面会許可証を差し出すと、刺すような目でMを見上げた。背筋を冷や汗が流れる。許可証の年齢と照合されれば万事休すだった。だが、係官は事務的に許可証を箱に入れ、右手に延びた廊下に視線を向けた。「一番奥の、ドアの開いている六番の部屋に行ってください。中に係官がいるから指示に従ってください。面会時間は十分間です」

事務的に答える声を上の空で聞いて、Mは面会室に向かう。五つ並んだドアが歪んで見えた。最後の勝負が待っているのだ。開いたドアの中は三畳ほどの狭い空間だった。目の前の透明な間仕切りの前に粗末な椅子が置いてある。

「椅子にかけて待ちなさい。すぐに来るよ」

横柄な声がした。しおらしくうなずいて椅子に向かいながら声の主をうかがう。かっぶくの良い初老の男がつまらなそうな顔でドアの横に立っていた。一目で人手不足で駆り出された事務管理職と分かった。幸先のいいスタートにMは思わずほくそ笑む。最後の舞台は現場職員の覚めた目だけが脅威なのだ。プラスチックの間仕切りの向こうには小さな丸椅子と、看守が座る椅子と書き物机が置いてある。その狭い空間に連なるドアが外に開いた。若い看守に腰縄を曳かれて老人が入ってくる。灰色の囚衣から伸びた両手は前手錠で繋がれていた。疲れた顔をした痩せた老人は、鋭い目でMを見た後、とぼけたような声を

出した。

「やあ、やっと昔の彼女が面会に来てくれたな」

正体不明のMを見咎めることもない、徹底した反権力の姿勢に感謝したが、芝居は続けねばならない。Mは声を張り上げて若い看守に抗議した。

「馬鹿にしないでよ。人違いじゃない。死刑囚に面会するからといって、いいかげんにしたら許さないわ。新聞に大きく書いてもらうわよ」

Mの剣幕に若い看守がどぎまぎする。ドアの横に立っていたかっぶくの良い男が歩み寄って来た。即座にMがピアニストの囚人番号を大声で告げた。見知らぬ女が口にした、聞き慣れた囚人番号が二人の職員の耳を貫く。二人の脳裏に単純ミスという言葉がよぎっていった。

「お願い、札幌に帰る飛行機の時間まで一時間しかないの。早く連れてきてください」

横に並んだ管理職員目を捕らえて、Mは熱っぽく哀願した。

「次長。僕が間違えるはずはありません。この人が面会室を間違えたんだ」

次長と呼ばれた男は、まぶしい目でMを見た後、若い看守に目をやる。看守のだらしなく曲がったネクタイを厳しい目で見つめてから冷ややかな声を出した。

「コンピューターの端末で呼び出した面会データのコピーは持ってきたのか」

「いえ、忙しくて画面を確かめるのが精一杯でした」

頬を赤く染めた若い看守が下を向いて答えた。

「囚人番号まで指摘されては抗弁できないだろう。早く連れてこい。飛行機が間に合わなくなると言っているぞ。それから、ネクタイはきちんと締めろ」

次長が権限を傘に若い看守を叱り飛ばした。看守は青い顔で老人の腰縄を曳いてドアの外に消える。外に出る瞬間、老人の鋭い視線がMを捕らえた。Mは小さくあごを引いて目礼した。老人の目が優しく笑った。

「大丈夫、すぐ連れてくるよ。四月に人事異動があったばかりで慣れない奴もいる。新聞には書かないでくれ」

なにを勘違いしたのか、次長はMを新聞記者と思ったらしい。好都合だったが全身がむず痒くなった。ピアニストと再会できる希望が膨らむ。

若い看守は腹を立てて獄舎に戻った。雑居房の看守に老人を引き渡してから走って管理センターに向かった。同僚の看守たちは面会の立ち会いに出払っているらしく、センター

には誰もいない。日曜日は本当に忙しすぎると看守は嘆いた。大きく舌打ちをしてコンピュータの端末に面会データーを呼び出す。ディスプレイに浮かび上がった番号に間違いはなかった。しかし、もう老人は雑居房に戻ってしまった。艶めかしい女と一緒に待っている次長の怒った顔が臉に浮かんだ。

「受付の入力ミスさ」

低くつぶやいてキーボードを叩き、囚人番号を打ち直した。番号さえ分かっていたら簡単なことだった。昼日中に脱走の恐れがあるはずもない。面会人とのトラブルだけが日曜日の不祥事になる。有能に事務をこなすことが最優先だと思った。思った途端、受付の怠慢に腹が立った。ちらっと見た面会人の続柄と年齢が看守を嘲笑う。

「内妻、七十五歳だって。まったくあきれる」

若い看守は叩き付けるように実行キーを押してから独房棟に向かった。

ピアニストは狭い独房の床に正座して雨音に聞き入っている。昨夜から雨は降り続いていた。雨音はコンクリートの壁の手も届かぬ高みに空けられた窓から流れてくる。ショパンのプレリュード「雨だれ」の調べが聴覚を満たした。ピアニストにはもう風景の中に降る雨をイメージすることができない。雨はすべて耳の中で抽象化された音になって降る。心の中で、かつて存在していた風景が消えてからもう久しい。今は方形のコンクリートの壁がその日の気分によって伸縮するだけだった。目をつむるとMの姿が浮かぶ。目を開くとぼっかりと開いた漆黒の深淵だけが見えた。じっと目をつむり、Mの姿の中に降る雨音に耳を澄ませた。雨音に靴音が混じり、ピアニストの房に向かって来る。目を開くと鉄格子の前に黒い靴の先があった。見上げると新任の看守が一人で立っている。いつもは主任看守に従うだけの脇役しかできない男だった。

「面会だ。立て」

新任看守は主任の口調をまねてピアニストに呼び掛けた。見上げたピアニストの目に浮かんだ訝しさが見習い中の職業倫理に引っかかった。主任看守からはいつも、死刑囚の処遇には細心の注意を払えと言い聞かされていたのだ。だが、この忙しいのに主任は二時間の遅刻をするという。知ったことではないと新任看守は思う。規則に外れさえしなかったら判断に迷うことはないと思った。大きくうなずいてから胸を張り、鉄格子の錠を外した。

ピアニストは黙ったまま両手を前に差し出す。手錠をはめられ、腰縄を打たれて房外に連れ出されてから面会人に思いを馳せた。誰とも知れぬ面会人が恐ろしかった。看守に名

を尋ねることもできない。小さな希望の火が灯ってしまった。係累の少ないピアニストに面会できるのは両親だけのはずだった。両親の面会はずっと拒絶してきた。だが、三年の刑期を終えたMは、もう出所して三週間になるはずだった。出所したら面会に来てくれと、一方的な手紙も出してあった。もちろん返事はない。刑務所にいるMに勝手に三十通の手紙を送り続けたが、一度も返事はなかった。それに、Mには面会の資格がない。しかし、心の底に灯った小さな希望の火は獄舎の廊下を歩むごとに大きくなった。エレベーターの中では炎となって燃え上がるほどに膨れ上がった。胸の動悸が早鐘のように高まる。手錠をかけられた両手で何度も顔の汗を拭った。身体は寒く、心の底だけが熱い。面会室のドアが開く前に目をつむってしまった。Mの姿が脳裏に浮かぶ。目をつむったまま看守に腰縄を曳かれて室内に踏み入る。

「ピアニスト」

恋い焦がれた声が耳を打った。ピアニストは大きく目を見開く。透明の間仕切りの向こうに現実のMがいた。椅子から腰を浮かせ、じっとピアニストを見つめている。いとおしく美しかった。灰色の囚衣の下でペニスが大きくいきり立ってくる。Mが欲しい。

Mを見つめるピアニストの目は、まるで子犬のようだ。繊細すぎる神経が剥き出しになったような、縋り付いてくる視線がまぶしかった。たまらずに目を伏せ、浮かしかけた腰を椅子に下ろした。ピアニストが目の前の丸椅子に座る。二人の間を透明なプラスチックの間仕切りが隔てている。

「会えてうれしい。M、来てくれて本当にありがとう。未だに信じられない。目の前でMが消えてしまうようで怖い。僕はこの瞬間だけを三年間待っていたんだ。ほら、僕はずっとピアノの練習をしている」

椅子に座った途端、ピアニストは機関銃のように言葉を打ち出した。手錠のかけられた両手を前にそろえ、懸命に見えない鍵盤を叩く。指先が美しく舞うと聴き慣れたショパンの響きがMの耳に甦った。

「ほら、ショパンのスケルツォだよ。これからはMのためだけに弾く。僕にはピアノとMしか要らなかったと、ようやく気付いたんだ。どう、僕のピアノが、ショパンの調べが聞こえるかい」

「聞こえるわ。十分聞こえる」

掠れた声で答えたMの頬を涙が伝った。

「泣くことはないよ。僕にはMとピアノだけで十分だ。Mにやっと会えた。もう言うことはない」

ピアニストの激した声が面会室に響き渡ったとき、新任看守の背後のドアが大きく開いた。

「主任、どうしたんですか」

慌てて立ち上がった新任看守が、息をはずませて飛び込んできた主任看守を面食らった顔で振り返った。

「面会は中止だ。この女は身内ではない。騙されたんだ」

主任看守は乱暴にピアニストの肩をつかみ、椅子から立ち上がらせようとする。ピアニストは全身で抵抗した。つかまれた囚衣が音を立てて破れ、細く白い両肩が露出した。Mも驚いて立ち上がる。Mの肩を次長が強い力で押さえ付けた。

「M、Mが欲しい、僕はMのものだ。ずっと会っていたい」

立ち上がらされたピアニストが大声で叫んだ。あまりの勢いに二人の看守が息を呑んだ。その隙に全身を激しく揺すって二人の看守を振り払う。手錠をかけられた不自由な手で囚衣を膝まで下ろした。突き立ったペニスを誇らかにMに向け、再び吼えるように絶叫する。

「Mが欲しい。M、結婚してくれ。僕は死にたくない」

二人の看守がピアニストを突き倒した。囚衣をつかみ、床に引きずってドアに向かう。またもや囚衣が破れた。丸裸になったピアニストが看守の手を放れ、開かれたドアの前に仁王立ちになった。

「M、M、結婚してくれ」

プロポーズの熱い言葉がMの耳に突き刺さる。肩を押さえた次長の手をはねのけて前に踏み出す。両足を左右に広げて黒いスカートを捲り上げた。剥き出しになった股間をピアニストに突き出す。

「この身体は全部ピアニストのものよ。きっとピアノを聴きに来る」

静かに抑えた声で言い放つと、ピアニストの肩が安心したように下がった。新任看守がピアニストを羽交い締めにした。主任看守が強引に腰縄を曳いて裸身をドアの外に引きずり出す。逞しく勃起したペニスの上で、腰縄を打たれた細いうエストが無惨に歪んだ。

エレベーターの中でも、獄舎の廊下でも、ピアニストは素っ裸で引きずられながら全身をのけ反らせて暴れ回った。

「Mに会わせろ、もっとMに会っていたい」

掠れきった怒声が静まり返った獄舎にこだました。

「仕方ない、このまま反省房に入れよう。口枷を用意しろ」

主任看守が反省房のドアを開けて新任看守に命じた。房内は一畳ほどの広さしかない。空っぽの室だ。コンクリートの壁面と鉄のドアには身体をぶつけても傷つかないように厚いゴムが張ってある。自殺の恐れがある囚人を懲罰するための特別の独房だ。

「後ろ手錠にしろ」

戻ってきた新任看守に主任看守が命じてピアニストを床に押し倒した。片手の手錠を外して両手を背中にねじ曲げて後ろ手に手錠をかけ直す。喘ぐ鼻を摘み上げて口を開かせ、両端に革紐の付いたゴムの棒を口にくわえさせた。もうピアニストの出す声は言葉にならない。舌を噛む恐れもない。二人の看守に再び立ち上がらされた股間でペニスだけが逞しく屹立していた。散々手こずらせたあげくに今もって支配を拒んでいるようなペニスが看守を嘲笑っているように見える。

「この生意気なペニスにも反省させましょう」

新任看守のいらだった声が響いた。ピアニストの股間を冷え冷えとした手錠が襲う。猛々しく勃起したペニスの根元を鉄の輪が緊縛した。金輪の先に突き出された二個の睾丸が滑稽に見える。短い鎖が股間を通り、もう一方の金輪が後ろ手の手錠と繋ぎ合わされた。直立したペニスが背後から根元を曳かれ、仕方なく龟头を垂れる。無惨な光景だが本当に反省しているようだからおかしい。二人の看守が大笑いして溜飲を下げた。

「勃起している限り手錠は外れんぞ。反省して、熱を冷ませ」

憎々しい声で新任看守が言い放った。ピアニストを房に入れ、ドアを閉めて錠を下ろした。

天井から落ちるランプの光が直立した裸身を照らし出す。ピアニストは言葉にならぬ声を絶え間なく上げ続けた。腰を狂おしく振って激しく足踏みを繰り返す。勃起したまま下を向いた龟头を太股が妖しく撫でる。Mを思う官能の炎が股間を焦がした。頭の中が空白になると、背筋を官能が貫いていった。ペニスの先が痙攣し、ゴム張りのドアに白い精液が飛んだ。根元を手錠に繋がれたペニスはまるで少年のように長々と射精を続けた。空白になった頭に大きくMの姿が甦ってくる。涙が溢れて頬を伝った。後ろ手に縛られた裸身が力無くゴム張りの床にひざまずいてしまう。慟哭の音が殷々と獄舎に響き渡った。

Mは刑務所が呼んだ警察官に連れ出され、パトカーに乗せられて市街地の警察署に連行された。四階にある取調室で二人の刑事からたっぷり一時間の間、厳しく説諭された。だが、耳には何も聞こえない。言葉は聞こえても意味をなさなかった。しおらしく下を向いてただけだ。ピアニストの過激すぎる反応だけを反芻していた。協力してもらっただけで、礼も言えずに別れてきた老婆の言葉が甦って耳を掠めた。老婆は尾羽打ち枯らした男の元へ、一切を投げ捨てて帰ったと言ったのだ。だがMは帰るわけにいかない。帰る所もない。ひたすら前に進むしかないのだ。

「まあ、好いた男が死刑囚で、どうしても会いたいという気持ちは分かるよ。でも無茶したらいかん。無茶はだめだ。みんなが迷惑する。分かったかい」

年配の刑事が最後に言った。Mは黙ってうなづく。威嚇のためか、十本の指の指紋を採られた後、身分を証明した運転免許証と煉瓦色のジャケットが返された。指紋を採っても無駄なことだとMは思う。二度の前科と共に、指紋は大切に警察に保管されているはずだった。二人の刑事に送られて警察署の玄関に立つ。遺失物の傘をさして行けと言う刑事の声に首を振り、しのつく雨の中を濡れながら駅に向かった。雨には潮の香りが混ざっていた。まだここは日本海に面した街なのだと、改めて思い知らされたような気分になった。

## 5 婚姻届

Mは疲れ果てて市に帰ってきた。すっかり暗くなった駅前広場で空を見上げる。厚く垂れ込めた雲が夜目にも黒く重苦しいが、雨の降り出す気配はない。身体全体がだるく、肩が痛んだ。だが、神経はずっと研ぎ澄まされたままだ。真っ直ぐ富士見荘に帰る気には到底なれない。駅前で思案した末、市役所に向かった。人気のない市役所の夜間通用口から庁舎に入り、警備室の宿直窓口で職員に婚姻届の用紙を請求した。途端に照れくささがこみ上げてくる。たまらなく頬が火照ってきたが応対の職員は事務的に用紙を取り出す。慣れた手つきで赤い文字の印刷された用紙を開いて一枚のざら紙を挟み込んだ。

「この記載例を読んでもらえば書き方が分かりますよ。今年は国勢調査の年ですから、お二人の職業を必ず書いてください。おめでとうございます」

愛想よく祝福までして職員が用紙を手渡した。Mは小さく折り畳んでジャケットのポケットに入れた。ポケットの上から用紙を触ると、素っ裸で看守に引きずられながらプロポーズしたピアニストの悲痛な声が耳の奥で響いた。プロポーズを受け入れることに異存はない。Mは今年で四十三歳になる。未婚のまま。死を賭けてMを求めるピアニストに婚姻届の一枚で報いることにこだわりはなかった。妻になる以外にピアニストと会う方法はない。何としても会い続けねばならないと思う。手を尽くしたあげくにピアニストに会った瞬間の、胸つまる感動が全身に甦った。剃り上げた股間が悩ましく痛んだ。

市役所を出た足は歓楽街に向かう。サロン・ペインにいこうと思った。チーフと天田に婚姻届の証人になってもらうつもりだった。二人の証人さえ確保しておけば、いつでもピアニストに婚姻届を郵送できる。手続きは早いほど良いと思う。別に気が変わることを恐れたのではなく、ピアニストに早く会いたいと気がはやった。十八歳の少年に逆戻りしたようなピアニストの言動は危険な兆候とあってよかった。体験したことのない者には決して伺い知ることのできない死刑囚の心理かとも思うが、そのすべてがMに繋がっていることが心に重い。

日曜日の午後七時では歓楽街を歩き交う人も疎らだ。金曜日と土曜日の夜に吐き出されて保管できなくなったゴミの山が、それぞれの店の裏口で山になっている。Mは赤と黒を斜めに染め分けたサロン・ペインの看板灯の前に立った。この店に足を運ぶのも七年振り

だった。いつのまに改装したのか、分厚い樞のドアの周りは赤煉瓦の壁になっていた。わざわざ使い古した煉瓦を注文して積んだらしく、黒ずんだ壁面に青い蔦が絡んでいる。七年という歳月をまざまざと見せ付けられた気分になった。ドアを開けると昔なじみの白い公衆電話が置いてあった。フロアに通じる自動ドアのガラスはハーフミラーに変えてあって中が見えない。雨に濡れてよれよれになってしまった煉瓦色のジャケットと黒いロングスカートを着たMの姿が映っている。暗い目をした陰気な顔が他人のように見えた。切りつめてショートにした髪の下に大きすぎる耳が観葉植物みたいに生え出ている。やはりロングの方が似合うと、一人で納得してうなずくと同時にドアが開いた。

「M、いらっしゃい。何をぐずぐずしているのよ。帰られてしまうと思って飛んできたわ。このドアは中から見通せるの」

チーフが大声で言ってMに抱き付く。Mは両手を広げてしなやかな身体を包み込んだ。「やっと来てくれたのね。うれしいわ。とびっきりのマティニを作るわ。ゆっくり飲んでいって。祐子も呼びましょうよ。出所祝いができるわ」

華やいだ声でチーフが言って猫のように身体をなすりつける。本当にしなやかな身体だとMは思う。七年前と同じように黒のパンツの上に白いシルクシャツを着ている。二の腕まで折り上げた長袖のシャツがマニッシュな姿態によく似合っていた。懐かしさが喉元までこみ上げてくる。目頭が熱くなってきたがかろうじて踏みとどまる。腕を背に回したまま静かな声で応じた。

「チーフ、マティニは頂くわ。祐子を呼んでもいい。でも、お祝いはごめんよ。今夜はチーフと天田さんをお願いがあって来たの」

「Mの願いなら何でも聞くわ。天田ももうじき帰る。さあ、カウンターに行きましょう。とにかく今日は飲んでもらうわ」

Mにもたれ掛かったまま、甘える声でチーフが答えた。

「チーフ、私は結婚することにしたの。天田さんと二人で婚姻届の証人になって欲しいの」

Mの一言でチーフが身体を真っ直ぐにした。ぼかんと口を開けたまま、まじまじとMの顔を見つめた。

「おばちゃん、おばちゃん、大きいおばちゃんはきれい」

突然、足元で舌足らずの音が響いた。Mはぎょっとして視線を落とした。三歳くらいの男の子が足元に近寄り、脚に抱き付いてくる。ねっとりした手の感触が素肌を通して全身

に伝わる。

「進太。Mおばちゃんにご挨拶なさい。きれいなおばちゃんによかったね」

絶句していたチーフが慌てて男の子に呼び掛けた。

「まさか、チーフの子なの。なぜ連絡してくれなかったの」

「ハハハハ、いやだな。私の子ではないわ。進太は修太の子よ。ナースの孫になるわ」

今度はMが耳を疑い、絶句してしまった。

「どういうこと、初めて聞くわ」

「出所したら真っ先に話すはずだったのよ。でも、Mはよそよそしくて怖いくらいだったから、私も祐子も言い出しかねてしまったの。進太は修太と睦月の子供よ。睦月が獄中で生んだ子なの。どういう訳か、祖母に当たるナースでなくて祐子に連絡してきたの。睦月が故意に父を不明なことにしてしまったからナースも手が出せなかった。祐子は睦月に事情を聞いて進太を引き取ることを承諾したのよ。祐子はお金持ちのテキスタイル・デザイナーでしょう。児童相談所も大喜びで進太を引き渡したわ。睦月の刑は三年だったの。でも、進太を産んで間もなく仮釈放になった。それから進太を引き取って働かだしたの。今は歓楽街のクラブでホステスをしている。天田が子供好きだから、よくうちで預かるのよ」

チーフの話はMの右の耳から左の耳へと、ただ流れ去っていく。頭の芯が痛み、激しくめまいがした。

「おばちゃん、おれ、しんた、おばちゃん大きい」

かん高い甘え声がまた足元で響き、進太がMを見上げて挨拶をする。

「進太、俺じゃなくて、僕でしょ。天田の口まねするから弱るのよ。睦月にまた嫌味を言われる」

進太を注意したチーフが楽しそうにMに話し掛けた。

「ちーふはうるさい。きらいだ」

足に縋り付いた進太が叫んでチーフにアカンベーをした。くりっとした大きな目といたずらそうな口元が死んだ修太に生き写しだった。生意気なところまで幼いころの修太と似ている。見下ろすMの目に涙が溢れた。全身が小刻みに揺れる。足元の進太が不安そうな目でMを見上げた。

「おばちゃん、ないてる、いたいよ、おれ手をはなす」

「いいのよ。おばちゃんではなくMと言って。私はM」

涙を拭って恐る恐る進太の頭に手を伸ばした。柔らかな黒い髪をそっと撫でる。また涙がこぼれた。

「M、ないちゃだめ」

進太の声が優しく響く。とうとうこらえきれずにMの嗚咽が部屋中を満たした。チーフが気を利かせて進太の手を取り、カウンターの裏に回った。シェーカーを用意してマティニを作り始める。Mの嗚咽はとどまるところを知らない。フロアに立ちつくして全身で啜り泣いた。恥じ入ることはない。ピアニストの分まで泣こうと思い定め、激しく慟哭した。

どんなに悲惨な心の傷も泣き疲れるまで泣けば必ず癒える。人が引き受けられる痛みと涙の量は、あらかじめ微妙なバランスを取って量られているに違いなかった。激しくしゃくり上げる肩が背後からそっと抱かれた。振り向くと白い頬を痙攣させた祐子の顔があった。大粒の涙が頬を伝っている。涙で濡れた頬がMの頬に寄せられ、二人の涙が混じり合って胸の谷間に流れ落ちた。嗚咽する祐子の背をMが優しく抱き締める。

「Mも、ゆうこも、みんな、なきむし、おれはつよいぞ」

カウンターの前で背の高いスツールにちょこんと腰掛けた進太が、泣きじゃくる二人に大声で言った。その声がまた二人の涙を誘う。

「さあ、Mも祐子もたいがいにして飲みなさいよ。修太は修太、進太は進太よ。一緒にしたら二人とも怒るわ」

わざとらしく怖い顔でチーフが言って、温くなってしまったマティニを流しに捨てた。Mは啜り泣きを続ける祐子の肩を抱いてカウンターに向かった。進太の隣に祐子を掛けさせ、その隣に座る。

「M、ごめんなさい。来た早々泣いてしまって嫌になるわ。でも、Mの泣き顔を見たら胸が詰まって泣かずにはいられなくなってしまった。進太のことも、これまで言い出しかねていてごめんなさい。Mがパニックになってしまいそうで怖かったの。今日言おう、今日言おうと思っているうちに時間ばかりが経ってしまった」

祐子がしゃくり上げながらMの顔を見て言った。化粧をしていない素肌に涙の跡がよく似合う。

「いいのよ、祐子。私も出所してすぐは気が動転していた。進太のことを聞かされたら、きっとパニックになったわ。働きだしてやっと落ち着いたのよ」

優しい声で祐子に言った。ピアニストとの結婚を話しに来たというのに、進太に会った途端にこの始末だ。パニックとしか言えないと思った。だが、Mの言葉で一安心したよう

に、祐子が本題に切り込んできた。

「M、結婚するんですって。おめでとう。相手は誰。チーフは意地悪をして電話では言ってくれなかったわ。私は急いで飛んできたのよ。ねえ、誰と結婚するの。早く教えて」

尋ねる声は華やいでいたが泣き笑いの顔だ。確かに祐子は着古したジーンズに黒いトレーナーを着た作業中のスタイルだった。靴もスニーカーだ。期待の大きさを表している。とっさにMは言葉に詰まった。

「祐子、私は意地悪はしないわ。まだ私も聞いてないのよ。祐子と一緒にMを祝福したかったの。さあ、M。新しいマティニを作ったわ。一口飲んでからフィアンセを紹介してね。その後でみんなで乾杯しましょう」

チーフが口を挟み、新しいカクテルグラスに満たしたマティニをMの前に置いた。Mはグラスに口をつけて一口味わう。久しぶりのマティニがおいしい。このまま酒を飲んでいたと思った。だが、祐子もチーフも口元を見つめ、期待のこもった目で聞き耳を立てている。口を開かないわけにはいかなかった。

「結婚の相手はピアニストよ。今日、刑務所に面会にいったの。プロポーズされたわ。ピアニストは真剣だった」

発せられた言葉が宙を舞った。祐子もチーフも余りのことに開いた口が塞がらない。信じがたい事実を耳を疑っている。進太の口ずさむでたらめな歌だけが、のんきな場を装っていた。誰もが思っていることを言葉にしたくなかった。長い沈黙が続いた。

「どうしたの。チーフ、祐子、二人で祝福してくれるはずじゃなかったの」

低いつぶやきがマティニのグラスに落ちた。待っていたようにチーフが口を開く。

「信じられない。Mらしくないわ。失礼だけど、死刑囚と結婚するってどんな意味があるの。同情、憐憫、それとも自己満足。これまでのMの生き方とは違うわ。私は賛成できない」

興奮に肩を震わせ、怒ったような強い調子で言い切った。

「私は悲しすぎていやよ。Mがかawaiiそうすぎる。ピアニストは喜ぶだろうけど、Mはどうなの。明日死ぬかも知れない人よ。鉄格子を挟んで面会することしかできないんですよ。希望が無いもの。残酷だわ。私はMにプロポーズしたピアニストを憎む」

祐子がまた泣き出しそうな声で言った。Mの顔も苦悩で歪む。祝福されなくて当然だった。愛を確かめ合えない結婚なんて考える方が無理なのだ。しかし、Mは重い口を再び開く。

「結婚という言葉が衝撃的だったみたいね。私の言う結婚とは婚姻届を役所に出すということよ。ピアニストと結婚するための手続きをしたいの。最後までピアニストに寄り添っていただけ。そのために必要な手続きをするのよ。祝福は要らないわ」

Mは言葉を選んで話した。自分自身を納得させたかった。

「やはりおかしい」

チーフのいらだった声が飛んだ。

「M、おかしいわよ。結婚が方便で、婚姻届が目的のための手段だと言っても無理があるわ。死にかけた老人の遺産目当てで結婚するのとどこが違うの。老人の死ぬ間際まで愛情を込めて寄り添ってやりたいと言っても、二人の愛と官能を確かめて育てていかない限り、どんなことを言いつくろっても嘘になる。Mとピアニストには育てていく機会も時間もないわ。やはりMは自分を大切にしていないと思う。ピアニストに対しても傲慢に見える。Mらしくない」

Mはマティニをまた一口飲んだ。ジンの刺激が疲れ切った舌を刺す。

「私とピアニストは、お互いの世界を共有し愛を確かめることができる。別に私がピアニストの犠牲になるわけではないわ。ピアニストはピアノの練習を始めているの。私のためにだけピアノを弾くよ。私にはそのピアノの調べが聞こえる。私への愛の深まりが、そのまま音になって私に語り掛ける。私は毎日その音を聞く。愛が深まり、官能が高まるのよ」

「M、ピアニストの責任と人格はどうなるの。死を目前にしたピアニストはMに死を贈ることしかできない。つまり、二人は対等ではない。Mに叱られるのを覚悟で言うと、驕りがあるような気がする」

祐子が遠くを見る目で言った。これまで接してきたMの幻影を追っているような眼差しだ。

「祐子、私は二人分の責任と人格を引き受けてもいいと思っているの。刑務所を出所してから会った何人もの女がそうして生きて来ていたわ。私は独りだけで生きることができる」

Mの言葉でサロン・ペインをまた沈黙が満たした。

「ただいま」

陽気な声と共に自動ドアが開き、天田が太った身体を現す。まっすぐ進太の所に行って、小さな頭を乱暴になでた。進太がキャッ、キャッと言って喜ぶ。本当の親子のようだ。

「あなたの同級生のピアニストとMが結婚するって言うの。祐子も私も反対していた所よ。あなたも意見してやってよ」

チーフが天田に訴えた。天田の目が鋭く光った。

「死刑囚と結婚するのか。物好きなMらしい思い付きだ。でも、金にはなるぜ。ピアニストの個人資産は一億円くらいあると、俺は踏んでいる。結婚すれば時間の問題で全部Mのものになる。何と言っても効率がいい。戸籍が汚れるくらい何てことないもんな」

「あなた、Mに何を言うの。私が許さないわ」

チーフが顔を真っ赤に染めて睨み付けた。天田の憎まれ口を聞いたMの顔がやっと緩む。勝手な思惑や親切は聞き飽きたと思った。

「天田さん、遺産の話は初耳だけど、ピアニストの同級生として婚姻届の証人になって欲しいの。ぜひお願いします」

頼みを聞いた天田がさもおかしそうに笑った。進太を抱き上げ、高い高いをしてやってから、また笑った。大笑いした後、真顔になってMの目をじっと見つめた。

「本当の話なのか。悪い冗談かと思ったよ。失礼なことを言って済まなかった。Mの物好きには恐れ入るよ。でも、俺の同級生に配偶者は要らない。あいつは天才だ。一人で死んでいくべきなんだ。俺は証人にならない。あいつの親父の歯医者に頼むのが筋ってもんだろう」

確かに天田の言うとおりでMも思った。これまで気付かなかったことが恥ずかしいくらいだ。手続きは遅れるが、十五年振りで歯科医に会おうと思った。サロン・ペインに来た甲斐はあったのだ。

「天田さんありがとう。明日にでも歯医者さんに会うわ」

礼を言って立ち上がった。もうサロン・ペインに用はなかった。進太を抱いた天田の前まで行って両手を伸ばす。進太が小さな手を伸ばして腕の中に移ってきた。そのまま抱き上げて弾力のある柔らかな頬に頬ずりした。

「M、きれい、おれ、Mがすき」

進太がうれしそうな声で言った。

「まったく、こんな小さな時から隅に置けない。立派なスケベ坊主だ」

天田もうれしそうな声を出して、Mのぎこちない手から進太を抱き取る。

「さようなら」

誰にともなく言って自動ドアに向かった。

「お願いM、結婚は考え直して」

弱々しい声で祐子が背中に呼び掛けた。だが、追ってくる者は誰もいない。Mは背筋を伸ばしてサロン・ペインを後にした。

月曜日の朝は快晴だった。寝付かれぬ長い夜だったがMは定時に起きた。丸一か月続いた朝の日課を慌ただしく順調にこなす。ガードマンの制服に着替えて四人の婆さんたちと朝食を囲んだ。昨日の小旅行であったことを問わず語りに作り話にして婆さんたちに話した。たとえ黙っていても、婆さんたちが旅の成果を聞いてくることは目に見えていたのだ。婆さんたちは目を輝かせて話に聞き入っていた。どうしても愛しい死刑囚に会わせてもらえなかったと知ると、お梅さんと桜さんが目頭に手を当てる始末だった。ただ一人、お菊さんだけが黙ったまま鋭い視線をMに向けていた。嘘のすべてを知っていると叫びたげな視線だった。だが、知ったことではない。今日は待ちに待った給料日なのだ。初月給で服を買い、仕事を休んで歯科医に会おうと思った。

「いってきます」

大きな声で婆さんたちに挨拶し、さっそうと仕事に出掛けた。昨日と打って代わった晴天の工事現場で誘導灯を振り続けた。風がなくて照りつける日射しは強い。身体はぐったりするが気分は高揚していた。希望があると人は強いと思う。いつになく疲れ切った様子の大屋の分まで大きな声を出し、休みなく誘導を続けた。だが、休み明けの仕事はつらい。やっと一日の仕事が終わったときは全身に気怠さが残った。でも、今日は給料日だ。気持ちを取り直して大屋のバイクの後ろに跨る。二人で警備会社の事務所に向かった。事務所はバイパス沿いにある四階建てのビルの中だ。構内には三台ほどの警備車両が待機している。提携先のセキュリテー・システムから異常通報がありしだい、直ちに出動できる体制を整えている。それが警備会社の本業なのだ。警察と同じ二十四時間体制だった。Mたちの仕事は事業多角化の一環に過ぎない。なんのノウハウも要らない仕事だった。

「悪いけど俺の分の給料も受け取ってきてくれないか。俺はここで待っているよ」

構内の隅にバイクを止め、先に降り立ったMにはんこを差し出ししながら、気弱な声で大屋が言った。

「この主任が苦手なんだ。頼むよ。はんこがあれば給料は渡してくれる。うるさいことは言われないよ」

いつも胸を張って芸術の話をするときの面影もない、哀れな中年男の顔が再び哀願した。

「いいわ。大金を持ってすぐ帰ってくるわね」

大屋の手からはんこを受け取り、Mは颯爽と職員通用口に向かった。バイクの後ろに跨り、風を受けて走ってきたのに汗は乾ききっていない。肩に張り付いた制服の袖が不快だった。まだ四月というのに一階の事務所は寒いほど冷房が効いていた。同じ会社の職場とは思えないほど現場とは環境が違う。どの職場でも厳然とした階級があるのだ。その階段を上り詰めていくことに人は汲々としている。しごく当たり前の風景だった。Mは採用の時に会った交通係の主任の席に真っ直ぐ歩いていった。

「やあ、お疲れさま。暑くて大変だったでしょう。まあ掛けてください」

現場と姓名を申告して二つのはんこを差し出すと、主任に愛想よく椅子を勧められた。Mが座るとにこやかな笑顔を見せて話を続ける。

「Mさんは今日で一か月になるね。本当によくやってくれて会社も喜んでますよ。実は一緒に組んでもらっている大屋さんには困っていたんです。間違いが多くて工事関係者の苦情も多い。今度失敗したらやめてもらうはずだったんだ。それがMさんと組んだら見違えるようになった。人の能力が変わるはずがないから、たとえ新人でもMさんの指導力の成果だよ。いや、立派な仕事ぶりです。いろいろと報告が入ってくるから会社はすべて把握してるんですよ。今月は初月給ですが、皆勤賞の他に特別に報償を含めて三十万円を支給します。今後も、うちで働いてください。お願いしますよ」

椅子に浅く掛けて話を聞いていたMは尻の辺りがこそばゆくなってしまった。居心地の悪さが足元から立ち上がってくる。誰にでもできる仕事を大過無くこなしただけで大仰な褒め言葉だと思った。馬鹿にされたような気がして、意識しなくても慥然とした顔になってしまう。目ざとく表情を読みとった主任がすぐ言葉を続けた。

「勘違いをしてもらっては困る。私は馬鹿にしてるんじゃないよ。Mさんは優れた能力を持っているから馬鹿にされた気がしたんだ。でも、誰もがMさんほどの能力を持っているわけではない。さっき言ってしまったついでに言うが、大勢の中には大屋さんのように仕事のできない人もいる。できる人とできない人の間に大勢の人が散らばっているんだ。人は千差万別だからね。至極当然な話だよ。Mさん、現場の仕事をもう一か月続けたら内勤になってもらいますよ。警備会社はサービス業だ。売り物は人材しかない。優れた人材はいつでも欲しいんです。Mさんには将来、現場に派遣する人材の配置をしてもらいたいと思っています。お願いしますよ」

主任は二回目のお願いをしてから机の横の携帯金庫を開けた。二つの給料袋を取り出し

てMに手渡す。

「Mさんに話したことは秘密でもなんでもありませんよ。大屋さんに話してもらっても一向に構いません」

給料の礼を言うMに、主任が畳み掛けるように言った。残酷な言葉だった。大屋に伝えることなどできるはずがない。しかし、能力を評価されて悪い気がする人間はいない。Mは爽快な気分です主任の席を後にした。廊下を歩きながら手にした二つの給料袋をうれしそうに見る。右手に持った大屋の給料袋の上書きは二十五万円だ。一万円札五枚分だけMの袋が厚い。決して悪い気分ではなかった。お陰でMは明日の休暇を言い出しかねてしまった。暮らしはいつも人に不自由を強いるようだ。暑さの残る構内の隅で、大屋が浮かぬ顔でMを待っていた。疲れ切った顔でバイクの横にしゃがんでいる。主任の言ったできない男のイメージが連想されてしまう。

「お待たせ、大金をせしめてきたわ」

明るい声で言って大屋に給料袋を渡した。大屋は上書きの金額を確かめただけで、封も開けずにポケットにしまう。そのまま立ち上がろうとせず、上目遣いにMの顔を見ている。縫り付くような眼差しが情けなく見えた。給料日の華やきなど無縁な暗い表情だった。

「話の分かる主任さんだったわ。大屋さんも会った方がよかったのに」

無理に愛想笑いを作って、しょぼくれた大屋の目に呼び掛けた。

「Mはきっと主任に評価されたんだ。あいつは社長の息子だから権限がある。俺なんか先月の給料日に首にされるどころだったよ。とても会いたくはないね」

にべもなく答えた後も大屋は立ち上がる気配がない。

「M、十万円貸してくれ」

上目遣いにMの視線を捕らえていた大屋の目が一瞬光り、小さな声で叫ぶように言った。

「なあ、頼むよ。必ず返す。明日までに四十万いるんだ。金融会社に息子の学費を取り上げられてしまったんだ。明日中に大学に半額振り込まないと息子は退学になってしまう。

M、頼むよ。助けると思って十万円貸してくれ」

Mの答えも待たずに大屋が言い募った。哀れに萎んでいた身体が急に大きくなったように見えた。借金を申し込んだことで胸のつかえが取れて居直った感じだ。ある種の迫力さえある。金を貸さない奴は人非人だと言い出しかねない風情だった。

「十万円では、とても足りないでしょう」

うんざりした顔でMが答えたが、大屋は少しも動じはしない。

「俺の給料と家賃収入を足せば四十万円になる。頼むよ。息子は後二年で卒業なんだ」

答えた語尾が甘い期待で震えていた。もらったばかりの給料の全額をつぎ込んで、どうして後の一か月を暮らせるのかとMは不思議に思う。だが、誰もがいつも冷静でいるとは限らないのだ。まさに主任の言うとおりであった。Mの心の底で、冷静な声が金を貸してはならないと叫び続けていた。その声は貸した金が戻ってこないからではなく、貸すことが大屋を追い詰めることになるかと警告していた。自らの暮らしが立たない者が息子の学費を心配するのは筋違いだった。息子が親の暮らしを心配すべきに決まっている。しかし、目の前にしゃがみ込む哀れな中年男をMは軽んじてしまった。お金のことであくせくするのがやり切れなかったのだ。Mは無造作に給料袋の封を切り、十万円を抜き出して大屋に渡した。富士見荘の婆さんたちの叱責する声が耳の底で聞こえたが、首を振って耳を閉ざした。十万円を押し頂く大屋の身体は小さく萎みきってしまっていた。

「ありがとう。M、ありがとう、恩に着るよ」

明るさの戻った顔で大屋は何回も頭を下げ、バイクに跨ってMを待つ。空っぽの明るさだけが、ただの哀れな中年男になった大屋の全身を満たしていた。

Mは織姫通りの商店街で大屋のバイクを降りた。慌ただしく去っていく大屋の後ろ姿を見送ってから、先日買い物をしたトラッドショップに向かった。夕闇が迫り、涼しさが増したにもかかわらず、店内は冷房をいれたままだ。汗まみれになったガードマンの制服の背が寒々とする。Mの格好に眉をしかめていた店員が先日の客だと思い出して近付いて来た。表情に好奇の色が浮かんでいる。

「大変なお仕事ですね」

精一杯の笑顔を浮かべた店員がMにお世辞を使った。金を取ることは本当に大変だとMも同意して、日に焼けた顔に笑みを浮かべた。それほど迷うこともなく前回と同じメーカーのスーツを選んだ。レモンイエローのサマーウールのスーツは日に焼けた顔によく似合うと思った。インナーも欲しかったが、この前のシルクシャツをクリーニングすることにする。仕事を休めなくなったので歯科医を訪ねるのは次の日曜になる。一切を買いそろえる必要はなかった。思い付くまま行動してきたMにとって、規範に縛られた社会人の暮らしは新鮮だった。すぐに行動できなくてもじっくり計画を練ることができた。確実な希望ににじり寄っていく手応えが感じられる。レジで店員がスーツを畳んでいる間に見るともなくガラスのショーケースの中を見ていた。衣料品店には珍しく、かなりの種類の装身具

が並べられている。中央に置いてあったペアのデザインリングが目をついた。シンプルなプラチナの指輪はマリッジリングといっても良いほど落ち着いたデザインだ。

「お出ししましょうか」

視線に気付いた店員が言って、Mがうなずくのも待たずにショーケースを開けた。赤い宝石箱に入ったペアリングを目の前に置く。大きい方の指輪を手にとって迷わず左の薬指に通した。Mにぴったりのサイズの指輪が左手で輝いている。

「それより大きいサイズの物もお取り寄せできますよ」

男物のリングをはめたMに店員が気をきかせて言った。Mはピアニストの指のサイズを知らない。また、知ったからといって刑務所にいるピアニストが指輪をすることを許されはしない。Mの喜びだけのための指輪だった。だが、それでもよいと思う。すべてが思い出だけになったときに、思い出のよすがとなる物が欲しいと思った。リングにぶら下がった小さな値札にはペアで十萬円の金額が記してあった。薬指から痛みと共に指輪を引き抜き、赤い箱に戻した。次にピアニストを訪ねるときは必ずこの指輪を持っていこうと決心する。レモンイエローのスーツは六萬円の出費だった。

富士見荘に戻ったMは真っ先に風呂に入った。婆さんたちは一番風呂は湯が固いと言って誰もが敬遠するのだ。Mに続いて婆さんたちが順番に入る。寒い季節は全員が一緒に入ることもあるという。燃料費の節約になるのだ。金貸しの先生は滅多に風呂に入らない。婆さんたちは、垢と一緒に寿命まで流されると思っているのだと言って先生を笑う。Mは広い湯舟で手足をいっぱい伸ばす。湯は熱いほどだが、勝手に水を足すと婆さんたちの叱責を浴びる。この一か月で熱い湯に短時間で入る習慣が身に付いてしまった。湯舟は広いが古い木製だった。ひょっとすると檜かも知れなかったが、黒ずんでしまって材質は分からない。もうとっくに耐用年数は過ぎている。婆さんたちの余命まで持つかどうか分からないくらいだ。富士見荘では何もかも古ぼけていく。頭の先まで湯に沈めてから風呂を上がった。ショートの髪は本当に便利だ。脱衣所に水滴が落ちぬよう、洗い場で丁寧に身体を拭く。婆さんたちの仕付けは本当に厳しい。裸身にバスタオルをまいただけの格好で大階段を上がって部屋に向かった。不思議なことに婆さんたちは、廊下に湯水をこぼさない限りは裸に寛大なのだ。かえって裸を奨励されているような気さえする。不思議な仕付けだった。

部屋の前まで行ってドアを開けると、金貸しの先生の部屋のドアが開く音がした。久し

ぶりに先生に挨拶をしようと、踊り場を隔てた薄暗い廊下を見つめた。しかし、ドアから出てきたのはガードマンの制服を着た大屋と腰を屈めたお菊さんだった。二人とも一様に青白い顔をして下を向いている。まるで絶望の淵に立たされたような暗い陰鬱な雰囲気だ。挨拶をしようかと思ったが、二人が下を向いているのを幸い、急いで部屋に滑り込んで静かにドアを閉めた。大屋は先生に借金を断られたに違いなかった。素人のMが貸したくなかったほどだ。プロの先生が貸す道理がない。大屋の甘さに腹が立ってくる。だが、お菊さんの目的は分からなかった。素肌にまいたバスタオルを壁に掛けて素っ裸になる。薄暗い部屋の隅に畳んである敷き布団を広げて部屋の中央に敷いた。桜さんが洗ってくれた白いシーツを布団の上に敷いて蛍光灯をつけた。淡い光がシーツに反射して狭い部屋がまぶしいくらい明るくなる。裸のまま布団の上で胡座をかいた。品のよい座り方ではないが、剃り上げた股間が大きく開いて気持ちがよい。誰に見られるわけでもないし、見られて恥ずかしいとも思わなかった。十分に身体を使って労働している裸身は均整がとれて美しかった。枕元に手を伸ばして黒い文箱を手取る。二つに折った婚姻届の用紙を取り出し、膝の上で大きく広げた。記入できるところはすべて記載例に従って記入してあった。結婚後に二人が住むはずの住所欄に目がいく。別々の住所がよそよそしく並んで書いてあるのが悲しく侘びしい。国勢調査の年だけに記入する職業欄には迷わず医師と警備員と書いた。後はピアニストの署名捺印と、二人の証人の署名捺印がいるだけだった。ただ「結婚後の氏・新しい本籍」欄はわざと空白にしてある。この欄はピアニストが書くべきだと当初から思い定めていた。

「ごめんよ」

ノックもなしに声が掛かり、ドアが開けられた。お菊さんが無遠慮に部屋の中に入ってくる。

「おお、何度見てもMの身体は艶めかしいぞ。女のわしが惚れ惚れする。本当に羨ましいぞ」

いつもの常套句を口にしてから、お菊さんは素知らぬ顔で敷き布団に上がってMの前に座り込んだ。Mの方が面食らう。開いた股間を婚姻届の用紙で隠し、文箱の中から急いで六万円を取り出した。

「お菊さん、会費をお届けしなくてごめんなさい。面倒でも納めてください」

頭を下げて言ってから札を差し出す。細い右手がさっと伸びて六枚の紙幣を持ち去っていった。

「これはもらっておくが、会費の督促に来たわけではないぞ。死刑囚の男と会えなかったという今朝ほどの嘘を糺しに来たんだ。M、他のもうろく婆さんは騙せても、わしは騙されはせぬ。Mほどの女が手ぶらで帰ってくる道理がない。その股間を隠した紙片を見れば一目瞭然だ。わしの目は節穴ではない。死刑囚との婚姻届を見た。だが、M、やめておけ。その男は紙片の下の股間をかわいがってはくれない。女を喜ばせられない男はいない方がいいのだ。喜ばされもせず、泣かされ続けるのではあんまりというものだ。その紙は早く破り捨てた方がいい。悩ましいほどの裸身がもったいないぞ」

説教を終えたお菊さんが腰を浮かせた。素早く手を伸ばして婚姻届の用紙をつかみ取るうとする。Mはすんでの所で用紙を取って背後に隠した。お菊さんは頓着せず、剥き出しになった股間の中心に手を潜り込ませた。Mの口から短い悲鳴が上がった。お菊さんの萎びた指が性器をつまみ、陰門をまさぐる。Mは婚姻届を持った両手を背後に回したきり抗うこともできない。それほどお菊さんの指先は巧妙だった。やがて胡座を組んだ膝先が震え、組んだ足が高く上がっていった。股間にのし掛かってきたお菊さんに倒されまいとして背後に回した両手を広げて布団の上で上体を支える。後ろにのけ反って肛門まで丸出しになった股間をお菊さんが両手でなぶり始めた。指先に強弱をつけて性器と陰門を執拗にまさぐる。Mの口から高く低く喘ぎ声が漏れ始めた。愛液で股間がびっしょりと濡れた。「ほらM、こんな淫乱な身体が男無しで我慢できるはずがない。死刑囚と添い遂げようなど笑止だと、この股間が正直に答えているぞ」

お菊さんのなぶり声にMの官能が高まり、神経がずたずたになっていく。波のように襲う官能に抗い喘ぎ声でお菊さんに哀願した。

「お菊さん。私の官能を引き出したご縁で、どうか婚姻届の証人になってください。お願いします。この燃え上がる身体をあの人にあげたいのです」

喘ぎに混ざる言葉を聞いて、お菊さんの指先が止まった。鋭い視線でMの目の底を見つめた。何気ない顔でMを起こし、ほんの少しだけ身体を引いた。

「M、わしに十万円貸してくれろ」

ポツンとつぶやいたお菊さんの言葉にMは耳を疑ってしまう。素っ裸のMを責めていたお菊さんが唐突に借金を申し込むのだ。聞き違いとしか思えなかった。

「たった一人の孫がイギリスに留学したいと言うんだ。登校拒否で二年間も部屋に閉じこもりきりだった高校生だ。やっと気力を取り戻し、外国に行こうと決心した孫に婆がしてやれることは金を送ることしかない。頼みの息子も交通事故を起こしたばかりだ。少いで

も金が要るんだ」

金の要る理由は分かった。お菊さんの気持ちも分かる。だが、たった十万円なのだ。貧者の一投と言っても哀れすぎた。

「お菊さん、気持ちは分かるけど、十万円で何とかなる問題とは思えないわ」

冷静に答えたMにお菊さんの怖い視線が突き刺さる。

「所帯苦勞をしたことがないMに分かりはしない。どんな大金だろうと、みんな一円の積み重ねだ。一円を笑う者は一円に泣く。Mに借りて足りない分は金貸しの先生に借りるんじゃ。今日は断られたが、誠意を持って頼み込めばきっと分かってもらえる。家主の大屋さんも、わし同様金が要るそうさ。ちょうどよいからわしが誘って、二人で先生から借りることにした。今夜で懲りずに願いがかなうまで何度でも頼み込むぞ。とりあえずは十万円だ。M、今日は給料日だろう。ぜひ貸してくれろ」

お菊さんの迫力の前にMはたじたじとなる。しかしもう、手元には十万円はない。給料日なのにと、思うといわれもなく恥ずかしさが込み上げてくる。

「お菊さん、貸して上げたいのは山々だけど私には八万円しかない」

「だってM、今日は給料日だろう」

あっけにとられた顔でお菊さんが叫んだ。Mは文箱をお菊さんに差し出し、大屋に貸した金の話をしてスーツを買ったときのレシートを見せた。

「金がないくせにMは甘過ぎるぞ。まあ、六万円の会費を払った後だから食べる心配はないが寒い暮らしだ。わしは五万円でいいぞ」

五万円を手にとったお菊さんが、三万円が残った文箱をMに返した。金を借りる方が貸す方より取り分が多いのだ。暴力的な借金だが、あっけらかんとして憎めないものがある。

「M、ありがたく借りて行くぞ。それから、その婚姻届を貸せ。わしが証人になろう」

Mの手から婚姻届の用紙を受け取ったお菊さんは何事もなかったように立ち上がり、ドアを開けて自分の部屋に帰っていった。しばらくして、ねじ曲がった大きな文字で署名し押印した婚姻届を大事そうに届けに来た。何とすることはない、お菊さんの署名捺印を五万円で買ったようなものだった。だがこれで、日曜日に歯科医を訪ねるだけで婚姻届が出来上がるのだ。十五年振りに会う歯科医の顔が脳裏に浮かび上がった。当然、当時のままのセクシーな表情だ。生々しいイメージに戸惑ってしまう。頭を振って幻像を追い払った。去っていく歯科医の口元に苦笑が浮かんでいた。

## 6 義父母

日曜日の朝、Mは市の福祉バスに乗って山地に向かった。六十五歳以上は無料のバスだがMは片道四百五十円の乗車料を払わされた。車内は老婆たちでほぼ満席だった。皆一様に山歩きの格好をしている。一人だけスーツを着たMは好奇の目に晒された。まるで若い者はバスに乗車をする資格がないとでもいった白々しい視線だ。だが、満員の乗客の中で運賃を払っているのはM一人にすぎない。全員が半額でも払えば民営の路線バスが廃止になることもなかったはずだ。福祉バスが悪いのではないが、どことなく居心地の悪さを感じる。ピアニストの実家の蔵屋敷に通じる停留場まで行っても誰も降りない。老婆たちは山の奥深くまで踏み込み、山菜を漁ってくるに違いなかった。M一人が降車口から路上に降りた。降りきってドアが閉まると同時にバスの窓から老婆たちの爆笑が聞こえた。気分の良いはずはないが、停留場にたたずんで見上げた空は美しく澄み渡っていた。しばらくぶりの春らしい陽気だ。風が立つ度に木々を彩った若葉が白い葉裏を見せる。新緑に酔って目が回りそうなほど周囲一帯が緑で燃え上がっていた。

Mは緑濃い山中に向かって疎水沿いの道を歩いていった。蔵屋敷まで歩くのは初めてだった。車で来たときは分からなかったが道は結構勾配がきつい。坂といっても良いくらいだ。五分ほど歩くとひたいにうっすらと汗がにじみ出てきた。さわやかに頬をなぶっていく風が心地よい。美しく気持ちを和ませる山間だった。ピアニストが生まれ育った土地だと、今更ながら思った。すべての風景を目に焼き付けようと願い、改めて周囲を見回す。緩いカーブを曲がりきるとピアニストの家の目印になった天を突くケヤキが見えた。競い合って空に伸びた梢の若葉越しに蔵屋敷の白い壁が光って見える。空の青と木々の緑、そして白い土蔵の壁。そのバランスの取れた配色が山地の谷筋をキャンパスの中に切り取る。すでにしてアートは出来上がっている。後は、人が込める感情の質量だけが問われていた。だがピアニストは二度とこの地に立つことはない。

疎水沿いに植えられた梅の並木が風に揺れている。十五年前に比べて、ひときわ太くなった幹が頼もしい。揺れる葉陰に小さな梅の実が見えた。青い宝石のような梅の実が葉の緑と空の青に溶け込んでいる。

「梅の実がなった」

Mのつぶやきが風に流れた。梅の実は年毎になるのだ。疎水を渡る橋の上でレモンイエ

ローのスーツに隠した裸身が宙に伸び上がる。目尻からこぼれた涙の粒が周囲の青に染まった。視線を落とすと清明な流れの隅に黒々とした固まりが見えた。目を凝らしてのぞき込むと小さなオタマジャクシが蝟集している。頭に比して大きな尾で水を蹴り、緩やかな流れに乗っておずおずと泳いでいる。虫ピンのようなクチボソの稚魚がオタマジャクシの横を素早く泳ぎ去った。限りないほどの命を春の山地は育んでいるのだ。Mは小さく溜め息を付いて歯科医院に使っているはずの母屋へ向かった。春の強い日射しを浴びた屋敷の景観は明るい。想像していた暗さも荒涼とした雰囲気もない。十五年前に比べ、歳月の分だけ成長した木々だけが現在という時間を証している。庭木にも丁寧に手が入れられ、古びたはずの母屋さえ落ち着いたベージュ色に塗装し直されていた。

歯科医院のドアには真新しい札が下がっていた。きれいに磨かれたガラスに掛けられた札には「本日休診。急患の方は蔵屋敷にどうぞ」と書かれていた。診療が続けられていることが我がことのようにうれしい。日曜日の急患への配慮を見せる歯科医に早く会いたくなってしまう。急いで蔵屋敷へ向かった。

「やあ、M。おはよう。手伝ってくれよ」

蔵屋敷の手前で突然声を掛けられた。声の方を振り向くと、駐車場の隅で歯科医が微笑んでいる。白いオーバーオールを着た歯科医は等身大の黒い金属の棒と格闘していた。曲がってしまった棒を立て直そうとしている。両手で棒を支え、片足で土を寄せ集めていた。

「おはよう、歯医者さん。朝からお庭の手入れじゃ大変ね」

大きな声で挨拶しながら無蓋の駐車場に歩いていった。

「庭の手入れじゃないよ。彫刻の展示だ。女房が帰ったとき驚かせてやるんだ」

庭仕事と間違えられて気を悪くした歯科医がふてくされた声で答えた。歯科医の前に立って金属の棒をまじまじと見つめた。

「いい作品だろう。一見ジャコメッティのようだが要所要所のフォルムはまるで違う。まったく新しい彫刻だよ」

得意そうに歯科医が解説した。黒い棒に見えたものはブロンズ製の彫刻だった。九等身ほどの足の長い裸婦が後ろ手に縛られて直立している。全体はスリムな姿だったが、歯科医が自慢するように腰や胸、頭部はボリュームのあるフォルムでデフォルメされている。現代の不安と古代の豊かさが混ざり合った印象とでも言えば歯科医が喜ぶ評になると思われた。意外に人を引きつけるきらめきを持った作品だった。Mは彫刻の足元にしゃがみ込み、傾いた台座の下に小石と土を注意深く詰め込んだ。

「ようし、これでいい。立派に作品が直立した。ありがとう。それにしても、お互いに歳は取りたくないもんだ。こんなに朝早く起きるMは想像もできなかったよ。十五年前には、この時間はまだ白河夜舟だったはずだ」

「歯医者さんこそ少しは空を見たがいいわ。ほら、もうあんなに日が高い。もう十時になる。ずいぶん目が赤いけど、きっと徹夜したんでしょう」

いたずらを見咎められたように歯科医の頬が赤く染まった。白いオーバーオールでひたいに浮いた汗を拭った。真っ白になった髪が歳月を告げるが、Mと歯科医の間には十五年の年月を越えて親密な時間が流れていく。

蔵屋敷の中はビニールシートを掛けた粘土や制作途中の塑像、イーゼル、油絵の具、おびただしい数のへらや絵筆が散乱していた。松ヤニの匂いが厳しく鼻を突いた。

「紙漉きはやめたのね。いつから彫刻屋さんになったの」

キャンパスを張った椅子に歯科医と向かい合って座ったMが尋ねた。

「三年前からだよ。紙漉きはとうにやめている。息子が帰ることもないので、またここをアトリエにしたんだ」

歯科医の答えはあっけにとられるほど明るかった。一人息子の不幸を帰ることがないと表現した。Mは次の言葉に迷ってしまった。困惑した様子を見かねた歯科医が笑みを浮かべて口を開く。

「昔話をするのはやけに歳を取ったようで嫌いだが、私も六十五歳になる。なぜMが訪ねてきたのか知らないが、これも巡り合わせだ。十五年前だって、私か息子のどちらかがMを奪う予感があった。私は才能はあったが歯科医で妻がいた。息子はいい奴だが私ほどの才能に恵まれなかった。世界中の美をつかみ取ることができないうちにピアノを捨てた。今でも息子に才能があったらと悔やむことがある。一切の音を、世界を、美のすべてを、そしてMを手中にできたかもしれない」

話し終わった歯科医はMの目を見つめてから遠く視線を巡らせた。真っ白になった頭髪が窓から入るさわやかな春風に揺れた。

「歯医者さんの言うことはよく分からないわ。ピアニストはあなたの跡を継いで歯科医になるために音楽を断念したんでしょう」

「いいや、息子は才能が足りなかったのだ。足りない部分を補う努力もしなかった。うかがい知ることのできぬ表現の闇に足を踏み入れるのが怖かっただけだ。もちろんでき過ぎ

た息子だったから私の気持ちを勝手に押し量ったのかも知れない。だが、息子は歯科医にならずに医師になった。父として息子の心中の悔しさは痛いほど分かる。性格が優しいまでに弱すぎたのだ。あの弱さでは一人きりで表現の道を押し渡ることはできない。M、ひょっとして息子は、あの時Mに救いを求めなかつただろうか。同行を頼みはしなかつたろうか」

失った時を惜しむように紡ぎ出された言葉がMの胸に突き刺さった。身体が小刻みに震え、涙が頬を伝った。唇に触れた涙に後悔の味が混ざる。居たたまれなくなったMが携えてきた思いを言葉にした。

「ピアニストは、またピアノの練習を始めているわ。先日、刑務所に面会に行きました。研ぎ澄まされた音色が今も私の身体の中で鳴り渡っている」

「そうか、息子に会ったのか。だが、独房にピアノのある道理がない。空しく脳裏に組み立てた音を誰が聴くというのだ」

「私が聴くわ。ピアニストは私のためだけにショパンを弾く。私とピアニストは二人で音の世界を共有して、生きられるだけの時間を生きるの」

「またショパンかね。せめてドビュッシーであつたら音に生きることも出来たろうに」

歯科医がつぶやくように言ってMの目を見つめた。促すような視線を受け、Mは用意してきた婚姻届をテーブルの上に出した。

「獄中のピアニストにプロポーズされました。結婚を承諾してください」

唐突なMの言葉にも歯科医は驚く様子がない。しばらく黙ったままテーブルの上に広げられた紙片に見入っていたが、静かに椅子から立ち上がった。Mの頭上から低い声が落ちてくる。

「死刑囚の息子と結婚したいのか。考え直した方がいいと言ってもMのことだ。決心を変えることはないのだろう。だが、立派な息子を選んできたことには父として感謝するしかない。Mも息子に劣らない立派な女性だ。私が結婚に反対する理由はない。祝福したいとさえ思う。M、至らなかつた表現の道に帰るといふ息子を、時が隔てるまでの間、どうか見捨てずにいてやって欲しい。お願いします」

足元から頭の先まで奔流のように駆け上っていく熱を感じながら、Mは頭上からこぼれる歯科医の声を聴いた。目の前が真っ白になり、黙ったまま何度もうなづく自分だけを意識した。耳の底でピアノの調べが鳴り響いている。ショパンの幻聴だった。耳の底でたゆたう調べを低いエンジン音が踏みにじった。棚からペンと印を取った歯科医が素早く婚姻

届の証人欄に署名し、押印した。

「ポルシェのエンジン音だ。妻が帰ってきた。母である彼女は私とは違う見解だろう。会わずに済ませた方がいい。M、裏口から帰りなさい」

早口に言う歯科医の言葉にMは首を横に振った。

「立派な息子さんの母に会わない理由はないわ。ましてや逃げ帰るわけにはいきません」

Mの言葉に歯科医が辛そうにうなずき、ゆっくり椅子に座った。

「私も妻も息子に面会を拒否されている。もう三年間も会っていない。妻の気持ちも分かって欲しい」

歯科医が言い終わらないうちに、蔵屋敷の自動ドアが開く音が聞こえた。

「ただいま」

聞き覚えのある声と共に歯科医の妻がアトリエに姿を現す。若やいだ姿態にパープルのシルクスーツを品よく着こなしている。歯科医と違って老いは感じさせない。

「やあ、お帰り。妻は生け花の集いで昨日から市に泊まりがけだったんだ」

椅子に座ったまま、歯科医が妻とMを交互に見て言った。

「奥様、お久しぶりです」

椅子から立ち上がったMが深く頭を下げて挨拶した。

「お前はM、まさかMがいるとは思わなかった。私の留守中に何の用事で来たの。年寄りの夫をたぶらかすつもりではないでしょうね」

居丈高に背筋を伸ばした歯科医の妻がMを見据え、挨拶も返さず言い放った。予期していた反応を全身で受け止め、Mは冷静な声で答える。

「私はあなたの息子にプロポーズされたから訪ねて来たのです。今、歯医者さんに結婚を認めていただき、婚姻届の証人になってもらいました。ふつつか者ですがどうかよろしくお願いします。お義母さん」

「何ですって、言うに事欠いて、お義母さんですって。あなた、どういうことなの」

怒りで顔を真っ赤に染めた歯科医の妻が、肩を震わせながら歯科医を睨み付けて叱責した。

「Mの言ったとおりだよ。立派な息子が立派な娘を選び、結婚するだけのことだ。私は祝福して、息子をよろしく頼むと言った。息子は私たちに会おうともしないのだからMにすべてを託すしかない」

「そんな、そんないい加減なことがありますか。しかも祝福だなんて。こんな女に息子は

渡せない。死刑囚だと思って馬鹿にしているに違いない。そうだ、そうに決まっている」

両目を吊り上げて叫ぶ剣幕にMも歯科医も声がでない。黙って下を向いている二人に歯科医の妻が新たな怒りをぶつけてきた。

「M、遺産ほしきの結婚でしょう。息子には一億円の財産がある。あの子が稼いだお金と私たちが将来の開業資金に積み立ててやったお金よ。この蔵屋敷も土地も生前贈与してある。その財産をみすみす取られてはたまらないわ。この女は盗人に違いない。ねえあなた、目を覚ましなさいよ」

肩で息をつきながらまくし立てた言葉を歯科医は落ち着いた顔で聞いて、低い声で答えた。

「たとえ財産目当てだとしても、それが何だというのだ。死刑が執行されても相続権者は私たちしかいない。息子のために積んだ金がまた手元に戻ってくるなんて、こんな悲しいことはない。息子の選んだMが相続しても私は一向に構わないね」

「何てことを言うの。あなたはこの女にたぶらかされてしまったのよ。何と言っても一億円は大変な財産よ。目が回るほどの金額だわ。その大事な財産をどぶに捨てるだなんて、とても正気とは思えない」

またしても金を巡る話が延々と続きそうだった。Mはもううんざりだった。椅子を鳴らして立ち上がり、大きな声で二人の間に割って入った。

「私はお金なんかに関心はない。死刑囚のピアニストには親族でないと面会できないから、妻になるために婚姻届を出すだけよ。財産なんてこれっぽっちも欲しくない。相続拒否の書類を、今、この場で書いてもいいわ」

Mの言葉を聞いた歯科医の妻の顔が一層険悪になる。

「言わせておけば勝手なことばかり言う。何が相続拒否よ。金に関心がないですって。私たちが馬鹿にするにもほどがあるわ。道端で拾ったお金じゃないのよ。大切な息子のために苦勞して貯めた金に関心がないと言われて、はいそうですかと引き下がる親はいないわ。いくら相続を拒否すると言っても妻の地位は法律で篤く守られている。やはり財産が欲しいに決まっている。お金目当てでなくて、どこの女が死刑になる息子と結婚するというのよ」

「私がいるわ。私はピアニストとの愛を確かめるために婚姻届を出します」

即座に答えた自信に満ちた態度が歯科医の妻を逆上させた。きつく唇を噛んでMを睨み付けた後、急に皮肉な口調に変わった。

「また聞いた風なことを言う。息子と結婚するなら、Mの言うように私は義母だわ。財産目当てかそうでないか、私がお前の身体に訊く。黙って息子を取られてたまるもんですか。息子に代わって私が試す。M、素っ裸になりなさい」

冷酷な言葉を聞いてMは一瞬目がくらんだ。十五年前の光景が鮮やかに甦った。あの時とまるで同じ情景が繰り返されようとしている。だが、苦悩に惑うピアニストの姿だけが無い。歳月の残酷な匂いが鼻先を掠めた。Mは大きくうなずいて椅子から立ち上がった。胸を張ってレモンイエローのスーツを脱ぎ去る。ピアニストの母に理解されることは永遠にないと思ったが、息子を奪われる母の憎しみを甘受することに露ほどの異論はなかった。天涯孤独のMが配偶者を得るための儀式とも思われた。

歯科医夫妻の前にMの裸身が直立した。雑然としたアトリエがまばゆいばかりに明るくなる。歯科医の口から思わず溜息が洩れた。

「まあ、首から上と手だけが真っ黒だわ。白と黒の不気味な身体ね」

歯科医の妻が目ざとくあらを探した。剃り上げた股間の上で両手を重ねたMが軽く唇を噛んでから応える。

「私は毎日、工事現場で交通整理をして働いている。お金は自分で十分に稼げるわ」

労働を軽んじることは誰にも許せなかった。鼻で笑った歯科医の妻が背後に回る。太い麻縄を手にして憎々しい声でMに命じた。

「さあ、黒い手を背中に回しなさい。厳しく縛り上げて打ち据えてやるわ。財産目当ての結婚を汚い口からきっと白状させてやる」

後ろに組んだMの両手に縄が巻かれる。手を縛った縄は首に引き上げられて胸元に回された。後ろ手に引き上げられた腕が痛い。乳房の上下を走る縄がうつむいた目に映った。塑像の骨組みに巻く、粘土のこびり付いた汚れて黒ずんだ麻縄だった。

「わざわざ子供のようにツルツルに剃り上げた股間なんて見たこともない。いやらしい。こんな変態女に大事な息子を取られてはたまらないわ。臭い股も厳しく縛り上げてやる」

歯科医の妻がさげすみの声で言って、ウエストを縛った縄を臍の下で固く結んだ。結び目から延ばした二本の縄尻を真っ直ぐ股間に下ろし、剥き出しの性器を縄の間に挟んでから背後に回した。尻の割れ目に食い込んだ縄を引き上げて後ろ手を縛った縄と結び合わせる。股間を縄で割られて一層悩ましさが増した尻に甲高い鞭音が響いた。

「ヒッー」

不意に鞭打たれたMの口から悲鳴があがった。長い竹べらを振りかざした歯科医の妻が続けて尻を打ち据える。たまたま逃げ出す白い尻を竹べらが追い回した。二本の縄で無惨に股間を割られてしまったMの逃げ足は鈍い。たちまち壁際に追い詰められ、したたかに鞭打たれた。豊かな尻に縦横に赤いミミズ腫れが走った。どれほど打たれただろうか。緊縛された素肌全体に赤黒い鞭痕が浮き出したころ鞭がやんだ。苦痛に呻きながら床にうずくまって鞭を避けていたMを、歯科医の妻が鋭く問い詰める。

「これしきの責めで音を上げられたら息子が浮かばれない。さあ、M。白状しなさい。息子の財産が欲しくて結婚するんだらう。さあ言え。言えば許す。まだ折檻されたいのか」

Mは歯を食いしばり、力を振り絞って尻を高く掲げた。ひときわ強く、二回、尻が打たれた。

「ヒッ、ヒヒッー。お義母さんのおっしゃるとおりです。許してください。財産目当ての結婚です」

Mの悲鳴がアトリエに響いた。歯科医の妻が竹べらの鞭を捨てる。怒らせた肩がやっと落ちた。上気した頬を二筋の涙が伝う。

「とうとう白状した。やはり財産目当てだったのね。ねえあなた、この女は変態どころか盗人よ。庭の梅の木に吊さなければ気が済まない。結婚をやめさせられないのなら、盗人のMを梅の木に吊して罪を償わせるのよ。そうでないと余りにも息子がかわいそう」

小さくうなずいた歯科医がMが脱ぎ捨てた服と太い麻縄を手にする。腰に打った縄尻を歯科医の妻に曳かれてMが立ち上がった。Mの頬も涙に濡れている。鞭の痛みと母から息子を奪う痛みが全身に広がっていった。うなだれて歩みだしたMを、急に歯科医が引き留める。壁の隅の一角を被っていた濡れた布を一気に引き剥がした。スツールほどの大きさの粘土がよく練られて滑らかな地肌を見せている。

「M、お願いだ。そのまま粘土の上に座ってくれ、Mの型が欲しい」

「あなたっ、たいがいにしなさい」

妻の叱声を尻目に、歯科医は真剣な眼差しで鞭打ちの跡が浮き上がった裸身を見つめる。Mは請われるまま粘土の上に腰を下ろした。尻全体が冷たい弾力のある粘土に沈み込む。歯科医の合図で尻を上げると、見下ろした粘土の上に股間を割った縄の跡も生々しい尻の雌型が出来上がっていた。

「M、ありがとう」

さり気なく礼を言う歯科医の口元が少年のように無邪気に笑っていた。思うがままに美

を追求した芸術家の満足感がありありと表情に浮かんでいる。確かに息子のピアニストより父の歯科医の方が才能があると認めるしかない気分になった。歯科医の妻がのんきな歯科医を睨み付ける。荒々しく腰縄を引いてMを曳き立てていく。素っ裸のMを真ん中にした異様な一行はそのまま玄関から戸外に向かった。

Mは突き刺さる春の日射しを全身に浴びた。木々の緑と空の青が目まぶしすぎるほどだ。股間を割った縄目の痛さに狭い歩幅で尻を振って歩く。裸身の至る所に浮き上がる赤黒い鞭の痕が痛々しい。うなだれて歩く目に剃り上げた股間が見える。二本の縄目に挟まれて突き出た性器の先が強い日射しに透けてしまいそうだ。目を上げると庭の真ん中に並んだ太い梅の木が見えた。

「この枝に逆さに吊すわ。縄を引くのはあなたしかいないから、片足吊りにしましょう」

Mの足元にうずくまった歯科医の妻が右足首を太い麻縄で縛り上げた。服と靴を地上に置いた歯科医が、妻に命じられるまま足首を縛った縄を頭上の太い枝に回した。

「さあ、力いっぱい縄を引くのよ」

苔むして湿った柔らかな地面に仰向けに寝かされたMの耳に合図の音が聞こえた。歯科医がゆっくり縄を引き始める。右足が徐々に上がり、斜めに腰が浮かび上がる。なおも引き上げられる足の痛み悲鳴を上げ、後ろ手に縛られた裸身を震わせて悶えた。十五年前と同じ責めだったが左足を吊り上げる役目のピアニストはいない。右足を襲う痺れるような痛みがピアニストの不在を改めて肉体に教える。止めどなく涙がこぼれ落ちた。

突然、疎水の向こうの道路でクラクションが鳴った。初めは遠慮がちに鳴ったクラクションがやがて大きな音で鳴り響いた。誰かが折檻を見咎めたようだった。

「ドーム館の娘の車だわ。生意気に、いいところを邪魔する。あんなにクラクションを鳴らしたら近所の人が出て来るわ。私たちは家に入りましょう。息子を奪ったMをこれだけ懲らしめれば我慢もできる」

憎々しく言った歯科医の妻が、行き掛けの駄賃とばかりに逆立ちになった尻を力任せに蹴った。悲鳴が上がり、不安定に吊り下げられた裸身が大きく揺れた。たわわに茂った梅の枝葉も一斉に震える。葉陰からこぼれた小さな毛虫が白い裸身を掠めて落ちた。聞ききった股間に三匹のイラガの幼虫が入り込んだ。三匹の幼虫は苦痛に悶える太股を毒針で刺した。瞬時に股間から脳に電撃が襲う。電気虫と呼ばれる毛虫の針から出た毒液は痛烈な痛みをMに見舞った。悲痛な叫びが春の山地に響き渡った。

歯科医の妻が笑い声を残して引き上げていく。歯科医がMの股間を婚姻届の用紙で被い、妻の後に続いて蔵屋敷に戻っていった。あまりの痛みに全身で悶える耳に駆け寄ってくる足音が聞こえた。祐子が来ると思った途端に緊張が解け失禁してしまった。

「やはりMだったのね。待ってね、すぐ縄を解くわ」

息を切らせて走り寄った祐子が梅の幹に縛り付けた縄を素早く解く。音を立てて裸身が地上に落ちた。

「M、ごめんなさい。私の力では支えきれないの」

横たわるMの前にうずくまった祐子がそっと裸身をなでる。剥き出しの股間をのぞき込んで眉をしかめた。

「股間を電気虫に刺されているわ。針を抜くから大きく足を広げていてね。かわいそうに、性器を刺されている。でも、股縄がガードしていたから他は内股だけよ。不幸中の幸いだわ。ピアニストの両親は最低。MもMよ。結婚なんてしてやらなければいいんだ。ピアニストの家の前を通る度にのぞき込んでいてよかったわ。M、もうちょっとで殺される所よ」

「祐子、もういいのよ。歯医者さんに結婚を承諾してもらったわ。お願い、すぐドーム館に戻って封筒と切手を持ってきて。婚姻届をピアニストに速達で出したいの」

素っ裸で後ろ手に緊縛されて横たわり、大きく股間を広げたMが祐子の話を無視して懇願した。泣き笑いになってしきりに頼む顔をのぞき込んで、祐子は絶句してしまった。土と涙で汚れた顔に確かな官能のきらめきが浮かんでいた。

## 7 結婚

工事現場で誘導灯を振り続ける日が三日続いた。この間Mは、ピアニストから返送されてくるはずの婚姻届をひたすら待ち続けた。言い古されたことだが待つ身はつらい。日毎に焦燥が募っていった。今日の昼休みには書留の控えを何度となく見てしまった。心身ともに疲れ切って富士見荘に帰った。汗みずくになった身体を風呂の湯で揉みほぐしたが疲労は消えない。浮かぬ顔で部屋に上がっていくと、茶色の封筒を手にしたお菊さんが待っていた。

「ほら、待ちに待っていた便りが来たぞ。素っ裸になってとくと見ろ」

お菊さんの声を聞いた瞬間、火照った顔が真っ赤に染まった。慌てて封筒に手を伸ばすと裸身に巻いたバスタオルが意地悪くむしり取られた。お菊さんの視線が無毛の股間に吸い寄せられる。電気虫に刺された性器が無惨に赤剥けになっていた。慌てて背中を向けた。今度は無数の鞭痕が赤黒い痣になって残る尻が露になってしまった。

「ほう、折檻されたのか。苦勞したな。これも美しく生まれた者の定めだ」

お菊さんがぼつりと言った。裸身に残る数々の傷跡を目にしても動じる気配はない。さり気なく手を伸ばして鞭痕の走る尻の割れ目をさすった。Mの裸身がビクッと震える。ざらついた手の感触が妙にうれしかった。今度は陽気な声が耳元で響いた。

「さあ、わしが証人になった婚姻届をゆっくり見るがいい」

促されて封筒を開けた。中には郵送した婚姻届が一枚入っているきりだ。急いで郵送したMも用紙以外は入れなかったが、返送してきたピアニストの手紙が同封されていないのは拍子抜けだった。足元から不安が込み上げてくる。紙片を開くのが怖い。おずおずした指先で、見つめるお菊さんの目を意識して婚姻届を開いた。真っ先にピアニストの署名と押印を確認して大きく息を吐いた。これで手続きができると、全身で安堵してから視線を進めた。空けたままにして郵送した「婚姻後の夫婦の氏・新しい本籍」には妻の氏が選ばれ、山地の住所が本籍地にしてあった。

「ややっ、婿殿になるな」

横に回って婚姻届をのぞき込んでいたお菊さんが感動の声を上げた。証人になった歯科医の署名を、ピアニストはどんな気持ちで見ただろうかとMは思いをはせる。父の氏を捨てMの氏を選んだ気持ちを考えると、うれしさと悲しさが目まぐるしく交錯していった。

他はみなMが書いたとおりだった。ただ一個所「夫の職業」の医師が二本の赤線で消され、几帳面な文字で演奏者と訂正してあった。Mの目に始めて涙が溢れた。

「お菊さんありがとう。お陰で婚姻届ができたわ。これから市役所に行って届け出てきます」

大きな声で言って白いシルクシャツを素肌に着た。ピアニストと面会したときと同様、黒のロングスカートと煉瓦色のジャケットを選ぶ。

「まったくMははしこいの。思い定めたら一直線だ。そんなに急ぐとすぐ転ぶぞ。ところでM。おめでたついでに、わしに三万円貸さぬか」

顔一杯の笑顔を浮かべたお菊さんが堂々と言い切った。足元を見透かしたような借金の申し入れだ。給料日に奪われるようにして五万円を貸したMの手元に三万円が残ったことをちゃんと覚えているのだ。

「私だって、無一文になるわけにはいかないわ」

「それでは一万でいい。孫の留学が早まりそうなんだ。息子が百万円も無心してきた。よっぽどのことだぞ。何とかしなければ親子の縁も絶たれそうだ。M、恩に着るぞ」

ちゃっかり手を差し出しているお菊さんに、仕方なく一万円を渡した。もうMの手元には一万円札と数千円の小銭が残っているだけだった。

「車に気をつけて役所に行けよ」

機嫌よく、子供に言うような注意を口にするお菊さんと連れだって廊下に出た。一刻も早く届け出がしたかった。有り余る苦労が一枚の紙片に込められているのだ。Mにとっては初めての所帯苦労といえる経験だった。

人気のない市役所の宿直窓口に婚姻届を出した。ちょうどピアニストくらいの年齢の職員がファイルから出した例文と届けを慎重に照合する。

「おめでとうございます。今日の日付で婚姻届を受理します。明日は祝日なので明後日の三十日に市民課の職員が処理します。でも、婚姻の日付は変わりません」

Mとピアニストの結婚記念日は四月二十八日になった。ついでに婚姻の証となる新戸籍の謄本を二通予約した。三十日のこの時刻に宿直窓口に戸籍を取りに来ることを約して晴れがましい顔で市役所を後にした。挙式も披露宴も、祝福もない結婚でも気にならなかった。宿直職員のおめでどうの声だけが心に染みた。いつまで続くか知れないが新しい家族ができたのだ。Mはできるだけ長い家族の存続を瞑目して願った。

Mの足は行きつけになったトラッドショップに向かった。まばゆい店内に入ると顔なじみになった店員が愛想笑いで迎えた。

「いらっしゃいませ。今日は何をお探しですか」

来る度にまとまった買い物をするMは、店員には上得意に見えるらしかった。

「先日見せてもらった指輪を見せてください」

「ええ、プラチナのペアリングですね。やはり大きなサイズの品をお取り寄せしましょうか」

ショーケースの鍵を取りにレジに向かう店員が勝手に気を回して振り向く。Mは答えずにショーケースから出された赤い宝石箱を手を取った。大きな方の指輪を摘んで左手の薬指にはめた。じーんと結婚の感触が指から全身に伝わってきた。結婚の記念が指に重い。喉から手が出るほど指輪が欲しかった。ぶら下がった小さな値札をまた読む。十万円を示す小さな洋数字が六桁になって並んでいる。だが、Mは一万円しか持っていない。どうしても指輪が欲しいと、また思った。これほど物に執着したのは初めてのことだ。大屋に貸した十万円が目の前をよぎる。すぐ返してもらおうと思い定めて指輪を抜いた。

「またどうぞ」

店員の明るい声が背中に響いた。十万円の指輪が売れそうな予感に、うれしさが溢れた声だった。Mは大屋の店に急いだ。二時間前に別れたばかりの暗い顔が脳裏を掠める。金のことしか考えていない血走った目をしていた。この一週間、大屋は昼食を食べない。節約が食費にまで及んでいるのだ。でも、金が必要なのはMも同じだった。息子の学費の捻出に苦しむ大屋と結婚記念の指輪の費用がいるMと、金の悩みに差別はない。何よりも大屋に貸した金はMが労働した金なのだ。しかし、店のシャッターは下りたままだった。潜り戸に小さな書き置きが貼ってある。

「都会に出張します。三十日の朝、お出でください」

書き置きの文字は無惨なほど力がなかった。大屋の描くスケッチに笑われそうな文字だ。弱々しく夜風に揺れている。Mは仕方なく富士見荘に戻った。大屋の戻る三十日が待ち遠しかった。

指輪のことが頭から離れず、Mは二十九日の祝日の午前と午後の二回、トラッドショップに指輪を見に出掛けた。二回目に行ったときは店主が奥から出てきて応対した。店主は現品で構わないなら二割引きで八万円でよいと申し出た。Mにとっては渡りに船の話だっ

たが、手元には一万円しかない。もう一度よく考えて来ると答えて帰ってきた。指輪どころではなく刑務所までの旅費にも事欠きそうだった。どうしても五月の連休中に一回は妻としてピアニストに面会したかった。いらだちが募る。婚姻の証となる新戸籍が手元にないことがもどかしくてならない。戸籍ができなければ面会が許される道理がなかった。とりあえず新しい戸籍だけは、受け取りしだい速達で郵送することに決めた。だが、いくら筆無精のMでも、夫になったピアニストに戸籍謄本だけを送るわけにはいかない。散々思案したあげくに短い手紙を書いた。

### 前略

私の夫になったピアニストに、正直言って、何を書いていいか迷っています。書きたいことが多すぎて、何を書いたらよいか思い悩む気持ちのすべてを、とりあえずお送りします。

四月二十八日に届け出た、二人の婚姻届は、同じ日付で受理されます。明日の三十日には、新しい戸籍を速達で同封します。でも、今は、私自身も戸籍を見ていません。特に結婚の実感はないのですが、これであなたに、いつでも面会に行けると思うと、いらだつ心が安らぎます。

すぐにでも飛んでいきたい。新しい戸籍も会って手渡したい。でも、私も意外に不自由な暮らしをしています。以前のMでいられないことが、きっと妻の証だろうと思って、高ぶる気持ちを慰めて仕事に励んでいます。

五月の連休中には、一度はお訪ねしたいと思っています。

ご自愛ください。

M

三十日の朝、朝食の席に下りていくと、お菊さんの姿がなかった。四人の婆さんがそろわないのは初めてのことだった。

「お菊さんは借金の申し込みに飛び回っているぞ。できの悪い息子と孫を持つと、あの歳になってまで所帯苦労だ。足手まといの係累ならいい方がいい。わしらはさばさばしたもんだよ」

Mが事情を尋ねる前に、お米さんがとくとして留守の理由を説明した。四人の婆さんの中で子供がいるのはお菊さんだけだ。言葉の端に羨ましが含まれているようで聞くのがつらい。急いで朝食を食べて大屋の店に向かった。だが、シャッターは下りたまま、相変わらず貧相な張り紙が貼ってある。借金を返してもらうどころか、工事現場までの交通を心配しなければならない予感がした。今日の現場の近くには福祉バスの路線はない。

イライラしながら古い家並みの立て込んだ市道の先に目を凝らした。高架のガードをくぐって現れた大屋の姿を見たときは、さすがにほっとした気持ちになった。ガードマンの制服のままいつものバイクに乗っている。疲れ切った様子でMのすぐ前に停車した。黒ずんだ顔を目深に被ったヘルメットで隠していたが、左の目の下に黒い痣が見えた。誰かに殴られたに違いなかった。

「大屋さん、その格好で都会に行ったの。まさかバイクで行ったんじゃないでしょうね」

Mの問いに答えるのもつらそうに、大屋はうんざりした素振りで両肩をすくめた。

「この格好で都会に行ったのさ。もう電車賃もない。息子の下宿で雑魚寝だよ。情けないったらありゃしない。M、後十万円貸してくれって言ったって無理だよ」

「当然でしょう。今朝だって十万円を返して欲しくて待っていたんだから」

大屋の凶々しい申し出に腹を立て、Mの声が尖った。

「分かっているんだが散々だよ。もう親子で心中するしかない。連休明けまでに四十万つくらいと息子は退学になる」

「だって、その四十万のために私は十万円貸したのよ」

訳の分からない大屋の答えがMの怒りに油を注いだ。

「甘かったんだ」

大屋は嘆息してうなだれてしまう。

「都会で何があったの。何が甘かったのよ」

「学費を全額払いたくて、息子の学費を押しえた金融業者の所に行ったんだ。やっとつくれた四十万円を見せ金にして、息子の学費を返してくれるように交渉したんだ。鬼のような奴らだった。利息が高くなってもいいという俺の申し出を鼻で笑い。今までの利息だと言って全部取り上げたんだ。見てくれ、暴力金融だよ」

目深に被っていたヘルメットを上げて、大屋は殴られた後の痣を見せた。黒く内出血した肌にうっすらと血が滲んでいる。Mは大きく溜息を付いた。大屋はなけなしの金を四十万円も捨ててきたのだ。最低の男だった。後は息子の中退させて稼がせるしかない。Mの十万円は今日返るどころか返済も怪しそうだ。このままでは指輪どころか刑務所までの電車賃も出ない。最悪の朝だった。

惨憺たる気持ちでMと大屋は一日の仕事を終えた。満足に食事をとらない大屋の身体は仕事中にも危なげに震えた。その分Mに負担がかかる。全身が疲労に浸かってしまったような気がした。お互いに無言のままバイクに乗って帰路に着いた。途中で市役所に寄って

くれるよう大声で頼む。大屋の返事はない。返事のない様子から交通費を請求される予感がした。考えてみれば、毎日バイクに乗せてもらっているのだ。だが、最後のプライドが大屋に交通費のことを言わせないようだった。Mとのコンビを解消されれば、今の大屋ではきっと会社をやめさせられるに違いなかった。バイクは市役所の構内に滑り込んだ。大屋を待たせて宿直窓口に向かった。用意してあった新しい戸籍謄本を二通、七百円と引き替えに受け取る。そのまま一通を準備した封筒に入れ、大屋に郵便局に向かってもらった。受付窓口で速達の手続きを終えると、やっと肩の荷が下りた気がした。借金に回るという大屋に礼を言って織姫通りでバイクを降りた。トラッドショップに寄ってみたい誘惑に駆られたが、まず電車賃の捻出が先だと思って真っ直ぐ帰る。あいにく富士見荘の玄関先でお菊さんと鉢合わせしてしまった。お菊さんの焦燥も思いの外深そうだ。

「M、千円貸してくれろ」

暗がりで見え合くなり、些細な借金を申し込まれた。

「千円でいいんだ。知人に借金を申し込むのに菓子折がいる。貸してくれろ」

財布からまた千円が消えた。お菊さんの方が数倍も上手だった。身体がぐったりして風呂に入る気力もなくして部屋に上がった。だが、親切な桜さんが風呂の時間を告げに部屋を訪ねてくれた。婆さんたちは一番風呂に入るのがどうしても嫌らしい。桜さんは風呂を勧めた後もおずおずと言葉を続ける。

「Mは現金で持っているからお菊さんに借りられるのよ。お金は全部郵便局に預けなさい。手元に現金がなければ、たやすく貸すこともできないでしょう。どうしても貸したいときは郵便局まで同行して貸すの。必ず局員の見ている前でね。そうすれば局員が証人になると借りた人も思う。貸したお金が帰ってくる確率も上がるわ」

Mに返す言葉はなかった。うなだれたまま何回も首を縦に振った。肉食獣の集まる草原に放り出された子ウサギのような惨めな気分になった。暮らしの奥は本当に深いと思って大きく溜息を付いた。

暗い気持ちで迎えた連休初日の五月三日の午後、Mに宛てて速達が届いた。茶色の封筒の裏には氏の変ったピアニストの署名があった。Mの心が高ぶる。部屋の中央に座って封を開いた。

## 前略

M、手紙と新しい戸籍謄本を送ってくれて、ありがとう。

Mと僕の、二人だけの戸籍は新鮮な感動を与えてくれた。気持ちの高ぶりが今も消えない。やっと思いを遂げられたうれしさで全身が震えている。

今すぐにでもMに会いたい。連休中に僕を訪ねるという手紙の言葉に胸がときめく。だが、僕のために、連休中の面会は取りやめて欲しい。

恥ずかしい話だが、喜びのあまり、まだ冷静になれないでいるのだ。

またしても取り乱した姿を見せてしまいそうで怖い。連休明けの最初の日曜日に僕はMを待っている。ゆっくり仕事の疲れを癒して欲しい。

三日前、読書班の囚人が僕の独房にも本を届けてくれた。

荒川洋治詩集「水駅」に僕は感動した。僕がピアノで表現したかった音のすべてが彼の詩の中にあると思った。つい、慣れぬ手つきで、勝手に荒川洋治の詩を借りて、Mのために文字を綴った。ぜひ、読んで欲しい。

## 「音の駅」

Mはしきりに曲の名を訊いた。柔らかな肌を重ねて私たちは眠る。

音は流れる、静寂を敷き詰めた枯れ野をひとときの風となって。これっきりの耳の数で、風の調べを聞き分けるのはつらい。

ときにピアノの音色を追い、声楽の沈黙を撃つ、流れきたる音の彼方に。だが、調べに拒絶された音のかけらは、静けさの果てで飛び交うこともなく、聾者の耳に囁きかけることもない。

Mには告げて。過誤の世界を、過ぎ去った夢を。無償の音色に揺れた山地はすでに無く、沈黙の素肌の下にあるのは白々とはぜる炎の音だと。

妄執、この激しい音に惹かれて、道はふたつに別れた。沈黙と喧噪、両極に引き裂かれた地平を吹き抜け、歌い続け、私たちはどこまでも進軍する。懐かしい陰部を求めて、十五年間の官能を貫く。

五月五日、私はこの静寂の地平を旅発つ。その朝も私は、きっと演奏者ではない。肉と肉を繋ぎ合わす魔法も知らず、沈黙したピアノの音色だけを求め続けたという。その音色は、死に絶えた者を悼む挽歌ではなく、生き延びる者がすべてと言って笑い、笑い疲れて眠る、幼子のための子守歌でもない。負け続けた静寂の果てに突き刺す、歓喜のシンフォニーでもなかった。永遠の極みで純質な骨となって鳴り響くという、ただひたすらに寄り添い、慕い合う者への、かなわぬまでの告別であったと。

官能の極みを求める、妻には告げて。

Mはピアニストからの手紙を何回も読み返した。短い手紙だったが難しい内容だった。最後の詩などはまったく理解できない。ただ、連休中は仕事で疲れた身体を休めるようにという優しい配慮だけは痛いほど心に染み入った。無理をして電車賃を捻出しなくても済むこともうれしかった。たとえ離れていてもピアニストと気持ちが通いあったと独りで決めて、小さな声で啜り泣いた。

夜遅くなってから、Mは素っ裸のまま井戸端に下りていった。連休中は婆さんたちは風呂をたてない。火照った身体を冷水で拭ってからでないと眠れない気がした。春の夜風を受けて冷水に浸したタオルで裸身を拭いた。気持ちがすっきりして爽快になる。人気のない夜とはいっても、人妻が素っ裸で外にいるのは結構スリリングで粹なもんだと勝手に思い、にんまりと笑ってしまった。いつになく浮き立った気分で、濡れ手拭いを肩に掛けて玄関に上がった。大階段に足をかけると凄いい勢いで金貸しの先生の部屋のドアが開いた。

「しつこい、二人とも早く帰れ。何回来ようが大屋さんとお菊さんに貸す金はないよ」

先生の怒声が階段の下まで落ちてきた。

「そこを何とか頼みますよ。出世払いと言うじゃないですか」

大屋の縫り付く声が弱々しく響いた。

「だめだ、何と言ってもだめだ。返済できない金を貸す金貸しはいないよ。僕は社会事業をしてるんじゃないんだ。息子の学費や孫の留学に貸した金が返る道理がない。ねえ、大屋さんもお菊さんもよく聞きなさい。話は簡単だよ。金がないなら大学を辞めて働けばいいんだ。高校が気に入らないのなら丁稚奉公でもすればいい。大学も留学も金の余ったお人のいく所だ。分を知らない人に金は貸せない。出世払いとはよく言ってくれたものだ。出世払いは親の信用じゃないよ。子供の信用に貸すんだ。見ず知らずの子供に金は貸せない。さあ、さっさと帰っておくれ」

先生の説教が終わると、大きな音を立ててドアが閉められた。しばらくたたずんでいたらしい大屋さんとお菊さんが悄然として大階段を下りてきた。階段の下で、隅に寄って道を空けたMには気付かない様子だ。無言のまま下を向いて、二人並んで外に出ていく。お陰でMは素っ裸で挨拶を交わさずに済んだ。大屋さんとお菊さんの苦悩はまだまだ続くようだった。

## 8 試練

五月四日の休日をMは昼近くまで寝て過ごした。この一週間の疲れがピアニストからの手紙で吹き払われて、久しぶりに安らかな気持ちで眠れたのだ。頭は幾分重かったが身体は見違えるように軽い。次の日曜日までには金の工面も何とかなるような気がした。決められたスケジュールどおりに起きて、洗面し、朝食を取った。昨日までの焦燥に駆られた暮らしが嘘のように思えてしまう。連休中は婆さんたちは食事を作らない。年に三回、正月と五月の連休とお盆が婆さんたち休暇だった。もちろん内職も休みだ。金策に駆け回っているお菊さんを除いた三人は、連日市の老人福祉センターに出掛けている。大きな風呂に入り、カラオケを歌い、ダンスをし、それぞれが持ち寄った御馳走を分け合って食べるのだという。何も持っていかなくても、褒めてやりさえすれば食べきれないほど、ご相伴に預かれるのだそうだ。三人の婆さんは温泉旅行のようだと喜んで喜んでいるが、Mは老人福祉センターに行くわけにはいかない。三日間の食事を自分で賄わねばならなかった。嫌でも出費がかさんだ。

Mは腰高の窓を大きく開き、たまに高架を通り過ぎる電車を見て漠然と時間をつぶした。無為の時間のありがたさが素肌の上をゆっくり流れていく。五百円の予算でコンビニエンス・ストアで買って来た幕の内弁当とウーロン茶で一日分の食事をとる。婆さんたちの作る質素で量の少ない食事に慣れたため、たとえ一食きりの幕の内弁当でもヴォリュームがあった。ことさらゆっくり食べ、唯一の情報機器の携帯ラジオのスイッチを入れた。Mのような屋外労働者にとって、ラジオは天気予報と時報を聞くための必需品だった。地元のFM局が流すピアノの音色がちっぽけなスピーカーから聞こえてきた。ドビュッシーの流麗な調べが部屋を満たす。ピアニストの才能を惜しんだ歯科医の言葉が耳に甦った。確かに今からでは遅すぎるのだ。何もかもが遅いと思った。Mの涙腺がまた緩み始める。たまたまなくショパンが聞きたくなった。ハッとしてラジオを消した。ピアニストの弾くショパンが勝手に耳の底を駆け巡る。悲しいまでに透き通った音色だった。夕日の射し込む部屋で、身体の中で鳴り響くピアノは明確な声をMに伝えた。

静けさの戻った部屋で、Mは文箱を開けてピアニストの手紙を開いた。獄中で綴られた文字を急いで読み返す。だが、ぜひ読んで欲しいという詩は難解だった。何度読み直してもよく分からない。Mは繰り返し、繰り返し詩を読んだ。やがて声に出してつぶやく詩文

の向こうから音楽が聞こえてきた。ピアノの音色だった。その清明なピアノの調べは、まがうことなくショパンの「別れの曲」だ。詩文の中の告別の文字だけが大きく目の前に広がる。手から手紙が落ちた。耳の底で「別れの曲」がむせび泣いている。すっかり日の落ちた暗い部屋で、目に焼き付いた告別の文字と、耳に張り付いたピアノの音色が疾走する。全身が寒い。

開け放した窓から入る冷たい夜風を受けて、Mは敷きっぱなしの布団の上で正座している。不吉な予感が裸身を包み込んでいるが、金縛りにあったように身体が動かない。冷たくなった肌の感触が他人事のように寒さを訴えてくる。不思議だった。よろよろと立ち上がって窓を閉めようとした。目の前の高架を轟音を上げて電車が通り過ぎる。架線がスパークして、白い火花が黒い夜空に飛び散った。瞬く間に光の帯となった電車が目の前を走り抜けた。日本海沿いの刑務所のある駅まで鉄路は続いているのだ。行かなくては、とMはつぶやく。行かなくては、とMが叫ぶ。五月五日と日付の打たれた告別の言葉と「別れの曲」の調べに、Mはピアニストに会って応えなければならない。素肌に鳥肌が立って全神経が緊張した。たとえ不吉な予感が杞憂に過ぎなくても、連休中に行かなくてはならないと決心した。だが、金がなかった。今日までクリアできなかった問題がまた頭をもたげた。大屋もお菊さんも貸した金を返すはずがなかった。

「私も借りればいい」

大きな声で言って壁に掛けた鏡を見た。鏡に映った黒い顔はいつになく生気に溢れている。結果を考える功利を捨て去ったいつものMの顔だ。まなじりを決した目には涙の予兆もなかった。

「ようし」

もう一度大きな声を出してうなずいてから勢いよくドアを開けた。暗い廊下を素っ裸のまま大股で歩く。空き室を過ぎ、大階段の踊り場を過ぎて金貸しの先生のドアの前に立った。夜風に吹かれて冷たく冷え切った肌が、身体の芯から込み上げる熱で燃え上がってくる。もはや世界にはMとピアニストしかいなかった。厚い木のドアに備え付けられたインターホンのボタンを、Mは確かな指先で押した。

「誰だね」

小さなスピーカーから、かん高い声が返ってきた。

「Mです。お金を借りに来ました」

躊躇なく答えたが、頬が赤くなるのが分かった。

「Mさんに貸す金はないよ。身体だけが資本の者には金は貸せない。いつ壊れるかも知れないからね。金貸しの常識だよ」

にべもない答えが返ってきた。Mは愕然とし、絶句した。

「Mさん、金は貸せないが、身体は買うと言ってあったろう。金が必要なら僕に身体を売rinaさい」

感情のこもらない機械的な声がスピーカーから流れた。Mの裸身が小刻みに震える。

「私に、春をひさげと言うのね」

「ハハハハ、やけに古い言葉を使うね。女を買うと言っても僕は九十歳だよ。前にも言ってあったと思うが、自由恋愛と言ってやに下がりたくないから買うと言うのだ。後は売方の方の自由意志だよ」

先生が事務的な声で、借金の代わりに売春を迫った。声とは裏腹な楽しそうな表情が目には浮かぶ。金の欲しいMを翻弄して喜んでいるに違いなかった。唇を噛みしめたが、もう道は残されていない。

「お願いします。私の身体を買ってください」

震える声で答えると同時に、ドアの錠が外れる音が大きく響いた。Mは思わず辺りを見回してしまう。だが、暗がりには人の気配はない。老人福祉センターで遊びまくってきた婆さんたちは、とうに寝入ってしまったようだ。冷たくなった手でドアのノブを回し、そっと手元に引いた。開いたドアから室内の明かりが走り出る。裸身が白々と照らし出された。胸を張って前に進もうと決心したが、妙に背中が屈んでしまう。

「ほう、いい覚悟だ。初めから身体を売るつもりだったのかね」

Mを見た先生が感動の声で言った。急いで黒檀の机に広げた書類を引き出しにしまい、うなだれた裸身を鋭く見上げる。射るような視線が全身に突き刺さってきた。Mは後ろ手にドアを閉めながら慌てて言葉を搜した。

「いいえ、すぐにでもお金が貸してもらいたくなって、闇雲に飛んできてしまっただけです」

とんちんかんな答えを口にすると、妙な自信が湧いてきた。たかが電車賃を借りるのに、よそ行きは要らないと思った。すでに素っ裸でいるのだ。よく事情を話せば電車賃ぐらいは貸してもらえそうな気がしてきた。Mは背筋を正し、うなじを伸ばして先生の目を見つめた。一通りの事情を話し終えると文机の向こうで先生が大きくうなずいた。丁寧に着こなした桐生お召しの単衣が豪奢で鷹揚な雰囲気伝える。Mの口元に思わず微笑みが浮か

んだ。

「新妻になったばかりのMさんが金の要る事情はよく分かった。つまり、結婚指輪の八万円と刑務所までの旅費の二万円、締めて十万円が当座に必要な金だ。そしてMさん自身が、大屋に十万円、お菊婆さんに六万千円を貸しているというのだな。つまり債権がある」

債権という言葉聞いてMの希望が大きく膨らむ。

「そうなんです。債権を抵当に取ってくれていいわ。私は身体だけが資本でなく、債権を持っている。今は電車賃だけでいいんです。十六万千円の債権を担保に二万円を貸してください。先生に損な話ではないわ」

「ハッハハハハ、話ではそうなるというだけだよ。債権は債権でも、超不良債権では紙代にもならない。金は人を見て貸さねばだめだ。現在のMさんに金を借りる資格はない。やはり身体を売るしかないね」

先生の言うとおりであった。Mの裸身がまた小さくなる。

「この前Mさんが訪ねてきたとき、僕の買ったSM用品を身に着けてくればいつでも二万円出すと言ったはずだ。今回はそのほかに八万円支払う。SM用具を使って一晩身体を責めることが条件だ。悪い条件ではない。僕としては結婚のお祝いも入れてあるつもりだ。たったの一晩、老人の前で恥ずかしい姿に耐えるだけだ。何と言っても人妻の身体を買うほど楽しいことはない」

人妻の身体を買うと言った言葉が胸に突き刺さった。だが、ピアニストの告別の不安が大きくMにのし掛かる。是が非でも明日は面会に行きたかった。もう退くことはできない。

「お願いします」

小さな声で言って頭を下げ、きつく唇を噛んだ。

「よし決まった。異例だが先に十万円を渡そう。Mさんも領収書を書いてください。そうすれば間違いがない」

#### 領収書

金壱拾万円也、五月四日に將に領収しました。

但し、拘束具等SM用品のモデル及びSM器具の使用モニターの役務料として。

M

Mは言われるままに、一晩身体を買われる証文を書いて署名した。書き終わると同時に

見えない縄で全身を拘束された感じがした。何のことはない、性の奴隷としての一夜が始まるのだった。

「さあM、寝室においで。金庫もそっちにある」

Mの書いた領収書を大事そうに文箱にしまってから、先生が立ち上がって促した。隣の室に通じる両開きの引き戸が開けられると、暗い方形の室の中央に置かれたダブルのロー・ベッドが真っ先に目に映った。先生は壁のインバーター・スイッチを調整して、新聞の見出しが読めるほどの光量に間接照明を調整した。南側の腰高窓の上でエアコンの微かな音が響いている。窓は隣の事務室と同様、ステンドグラスがはめ込みになっていたが、図柄は豊満な西欧の裸婦だ。事務室の聖母マリアとは対照的だった。先生がベッドの上にビニールシートを拵げた。Mは命じられるままベッドに上がり、シートの上に正座した。マホガニーの頑丈な枠に載せられたマットレスは極めて固い弾力だった。高価なスプリングの動きが素肌に伝わってくる。

「高い買い物だったが、やっと使うことができる。楽しい夜になりそうだよ」

生き生きとした表情で剥げ頭を輝かせた先生が、部屋の隅の棚からSM用品の入った袋を取ってMの前に置いた。

「さあ、一晩お世話になる品を膝の前に並べるんだ」

命じられたMが袋から婆さんたちの自信作を取り出す。柔らかな黒革を縫製した乳房強調拘束具、口枷、手枷、足枷、膝枷。最後に肛門調教具とT字帯が膝の前に並んだ。婆さんたちの内職現場で見たときとは違い、いずれも凶々しい光を放っている。自分の身体を拘束する器具を並べる情けなさに、つい眉をひそめてしまった。目ざとく表情を読んだ先生が口元に笑みを浮かべた。

「おお、そうだ。領収書だけ書かせて金をやらぬのでは詐欺になるね。すぐ十万円を支払おう」

うれしそうな声で言って、先生は部屋の北隅に置いた金庫の前にしゃがみ込んだ。金庫は小さな冷蔵庫ほどの大きさがある。何回もダイヤルを回したあげく、小さな金属音と共に錠が外れた。金庫の中を見せ付けるように扉を大きく開けた。厚さ十センチメートルほどの札束が三つ並んでいる。先生は三千万円もの大金を部屋に置いているらしい。一つの札束の上から十枚の札を数え、そのまま手に持って戻って来た。金庫の扉は閉めようとしていない。金の力をMに見せ付ける気のようなのだ。

「十万円だ。この札が身体を買うんだ。ちゃんと渡すぞ」

先生が厳しい声で言って十万円を手渡す。素っ裸のMにしまうところはない。身体を売った屈辱だけが札から伝わってきた。仕方なくベッドの横のテーブルの上に置いた。落ちて無くならないようにインターホンの受話器を札の上に乘せた仕草を、我ながら見苦しいと思ってしまった。

「さあ、M。これで身体は僕のものだ。早速、拘束具を身に着けてもらおう。手の届くところはすべて自分で装着するのだ。順序を間違っただけで着けられない装具があれば、初めからやり直しをさせる。最初だけ指定するが、まず口枷にする。生意気なことを言えないように口を大きく開けているのだ。言葉が話せなくなる前に言いたいことを言ってから口枷を装着しなさい」

ベッドの正面に置いたスツールに座った先生が冷酷な口調で命じた。

「言いたいことなど何もないわ。どうせ一晩買われた身体よ。存分に辱めるがいい。私は心までは売らない」

「ハハハハ、やはり生意気なことを言う。女郎に売られた娘がほぎくのと同じ台詞だ。今も昔も女は変わりはない。そんな娘もつらい折檻を味わった後は嘘のように転ぶ。ここは遊郭の跡だ。Mにも折檻に泣く女郎の気持ちを味あわせてやる。さあ、口枷をするんだ」

先生の言葉が待ち受けている現実をMに思い知らせた。屈辱と恐怖が身体の中で交錯する。固く唇を噛みしめてから膝の前の口枷を手を取った。大きく口を開けて金属の輪を口にはめ、両手を後頭部に回して黒革のベルトで止めた。もっと強く、もっときつくと先生の注文が飛ぶ。Mの顔は縦横に走る革ベルトで無惨に歪んでしまった。次から先生の指示はない。装着する拘束具を自分で選ばねばならなかった。いずれにせよ手枷が最後に残ることに間違いはない。できれば一番恥ずかしい肛門調教具は後回しにしたかった。しかし、身体と足を拘束した後で、器具をうまく肛門に挿入できなければ初めからやり直しだった。やはり肛門調教具を選ぶしかなかった。Mはヒョウタンのように二つの瘤がついたゴムの筒を手を取った。手に取った瞬間、尻の穴がキュッとすぼまる。婆さんたちに強引に挿入されたときの激痛が甦った。確か、婆さんたちはLサイズだと言っていた。それを今度は自分で挿入するのだ。大きく股を開いて片手を尻に回した。目をつむって指先で肛門をゆっくりもみ上げる。先生の目が股間に吸い寄せられているのが目をつむったままでも痛いほど分かる。恥辱を振り捨てて一心にピアニストのことを思った。小さな官能の炎が下腹部に灯る。肛門が快樂に咽び、陰門に愛液が溢れ始めた。愛液を指先ですくって肛門にな

すりつける。黒いゴムの筒先を肛門にあてがい、陶然とした気持ちでゆっくり挿入していった。ピアニストの逞しいペニスを初めて尻に迎えるのだと思い定めた。陰門が歓喜に震え、大きなゴムの瘤を肛門が一気に飲み込む。Mは大きく溜息を付いた。だが、休んではいけない。皮のT字帯でゴムの筒を嚴重に股間で止めた。異物を体内に呑み込んだ尻が屈辱に震えた。次に乳房強調拘束具を取り上げ、複雑に交差する皮帯に苦勞しながら全身を拘束した。惨めな自縛を続けるMを、尻に垂れ下がった二本のゴムパイプとゴム鞠が滑稽に揺れて嘲笑う。最後に膝枷と足枷を着けて立ち上がった。引き締まった肉体に柔らかな皮帯が食い込み、裸身を縦横に拘束している。

「よし、面白い見せ物だった。手枷は僕がはめよう。後ろを向きなさい」

先生に命じられてMが後ろを向く。九十歳の老人とは思えない力が背中で組んだ両手を手枷で拘束し、皮帯で首筋近くまで引き上げた。

「さあ、いよいよ女郎の折檻が始まるぞ。生意気に、少しも泣きを見せない罰だ。存分に苦痛を味わうんだな」

楽しそうに先生が言って、棚の上からゴムのベルトを手取る。長さ二メートル、幅二センチメートルの丈夫なベルトだ。そのベルトをMのウエストの少し上に二重にして厳しく巻き付ける。ちょうど胃の下に当たる位置だ。ベルトが素肌に深く食い込むまできつく締め付けて縛り上げた。

「座り込めるように膝枷は外してやろう」

独り言をいった先生が膝枷を外した。尻尾のように尻から垂れているゴム鞠の一つを右手に持つ。ゴム鞠のバルブを閉めてから無造作に鞠を握った。途端に肛門の内と外にあったゴムの瘤が動きだした。先生が鞠を押す度に二つの瘤が膨れて肛門の内と外から括約筋を圧迫する。

「これくらいでよかろう。もう外れる恐れはない。次は空気浣腸をしてやる」

下品な笑いを浮かべた先生が握ったゴム鞠を代え、同じように無造作に鞠を握り締める。今度は肛門に挿入されたゴムの筒先から腸内に空気が入り込んできた。侵入してくる空気の異様な感触にMは面食らってしまう。排泄を目的とした肛門から逆流して上がってくる空気の存在は恐ろしい。正常な感性が麻痺してしまいそんな違和感と屈辱感が全身を襲った。そんなMの気持ちにはお構いなく、先生はゆっくりと規則的にゴム鞠を握り続ける。

Mの下腹が目に見えて膨れてきた。体内の空気を何とか排出しようと脂汗を浮かべて息むが、肛門を内と外から挟み込んだ風船はビクともしない。やがて下腹が臨月を迎えた妊

婦のように膨れ上がった。苦しさにうなだれると、膨れた腹が目に入るだけで股間はおろか足の先も見えない。口から流れ出た涎が空しく突き出た腹に当たる。立っていることができなくなり、足枷に拘束された不自由な身体でビニールシートの上にしゃがみ込んでしまった。その姿はまるで、飛び上がろうと身構えたカエルのようなのだ。全身から脂汗が滴り、苦しきで目が回りそうになる。ゴムベルトで胃の下をきつく縛られているため、口から空気を逃がすわけにもいかない。今にも下腹がパンクしてしまいそうな恐怖で全身が小刻みに震えた。先生がひたいの汗を拭ってから、やっとゴム鞆を手放した。体内に送り込まれる空気は止まったが苦痛はゆっくり全身に広がっていく。

「どうかね、M。これが女郎の折檻だよ。大枚を叩いて買った身体を傷付ける心配がない。その格好で三日も晒されることを想像してごらん。たまったもんじゃないよ。許してもらえらなら、身も心も売り渡したくなること請け合いだ」

Mは先生の言うとおりでろうと思って小刻みに尻を振り続けた。妊婦よりも膨れた下腹部が膀胱を圧迫し、今にも尿が洩れそうでならない。過酷すぎる責め苦だった。揺れ動く尻を見た先生がにっこりと笑った。

「M、我慢せずに失禁してもいいよ。この折檻を受けた者は皆失禁する。尿にまみれた無様な姿を、許されるまで晒し続けるしかないんだ。残酷な仕打ちだよ。だが、ほんの少し前までこの遊郭でも行われていた仕置きなんだ。女郎の血の涙を一晩味わうがいい。Mはたったの一晩だよ。夜は短い。そろそろ私も楽しませてもらう」

急に若やいだ声になった先生が総絞りの帯を解き、桐生お召しの単衣を脱いで井桁に掛けた。痩せて皮膚のたるんだ股間で醜悪なペニスが揺れている。口枷で大きく開かされた口に羞びきったペニスが挿入された。Mは抵抗もせずにペニスに舌を絡ませる。買われた身体と思うと涙が湧いてくる。だが、先生の言葉の通り、確かにこの屋根の下で多くの女が屈辱の涙を流したはずだった。今、Mはその何分の一でも味わいたいと真剣に思った。女郎同様に金で買われ、恥辱にまみれて折檻を受けているが、決してへこたれまいと決心する。どれほどの苦悩や屈辱にまみれても生き延びるのが女だと確信した。たっぷり時間を掛けて舌を使うとペニスがゆっくりと鎌首をもたげてきた。九十歳にもなって単純な性だけを追う未熟な男だ。先生の口から低い喘ぎ声が出ると同時にMは失禁した。

ルッルルー

突然インターホンの電子音が鳴り渡った。先生がMの口からゆっくりペニスを引き抜いてから受話器を取った。

「誰だね」

機嫌の悪い声で訊ねると、聞き慣れた声が受話器から漏れてきた。

「先生、大屋です。でも借金の話じゃない。切らないでください。富士見荘の権利書を引き取りに来たんですよ。先生は狡いですよ。木造三階建てのこの家は、今では文化財級というじゃないですか。富士見荘が担保なら金融会社が五十万円貸すそうです。先生に借りた二十万円を返済しますから、権利書を返して下さい」

「利息をいれて二十五万円だぞ」

「分かっていますよ。ちゃんと持ってきました」

先生は素っ裸のまま、受話器を片手に首を傾げて考えていた。だが、借金を返済するという大屋を断る口実は見当たらないようだった。

「もう休んでいたところだから、ちょっと待っていなさい」

無愛想に言って受話器を置いた先生は、井桁から着物をとって素肌に着た。禿げた頭に手をやったが乱れた髪があるはずもない、ただのご愛敬だった。

「文化財かどうか知れないが、確かに富士見荘は近代化遺産だ。あながち嘘でないかも知れない」

独り言のようにいつてから、先生はMが身動きできないように黒革の首輪を延ばしてベッドの柵に縛り付けた。室の照明を消してから事務室に出て、引き戸を閉めた。真っ暗になった寝室のベッドにしゃがみ込んだMの前に、五センチメートルほどの光の帯が見える。先生が戸をぴったりと閉めなかったのだ。戸の隙間からは、ちょうど文机を前にして座った先生の横顔が見えた。先生がMを見て好色そうに笑った。故意にしたとしか思えなかった。あまりの仕打ちに背筋が寒くなる。先生が手元のセキュリティーセットを操作してドアの錠を開けた。

「こんばんわ」

「おぼんです」

荒々しくドアを開けて、大屋とお菊さんが事務室の中に上がり込んできた。

「何だ、お菊さんが一緒なのか。やはり借金話の蒸し返しか」

うんざりした声で言って、先生が二人を睨み付けた。

「いや、ちゃんと二十五万円を持ってきましたよ」

大屋が立ったまま憎々しい声で言って紙袋を突き出す。反射的に先生が首を伸ばして袋の中をのぞき込もうとした。Mの目に腰を浮かして前屈みになった先生の上半身が映った。

「何をするんだ」

大きな叫びを發した先生の首に、大屋が袋から出した電気のコードを巻き付ける。素早く先生の横に回ったお菊さんが、大屋から渡されたコードの端をつかんだ。二人一緒に綱引きのようにコードの両端を握って先生の首を絞め上げる。狭い戸の隙間からは先生の苦悶の表情だけが見えた。鼻から血を吹き、獣の唸りを上げて先生は暴力に耐える。しかし、それも一瞬のことだった。お菊さんの背に隠された顔がもう一度現れたときは、もう絶命寸前だった。黒く充血した顔に真っ赤に血走った目が恐ろしかった。首を絞められて中腰になった先生の身体がブルッと最後に震えた。それでも大屋とお菊さんは力を緩めず、悪鬼の形相で掌に食い込むコードを引っ張り続けた。とうとう先生の首の骨が折れる陰惨な音が部屋に響いた。あまりの修羅場にMは我を忘れて目をしっかり閉じてしまった。

「やっと終わった」

疲れ切った大屋の聲がのんきそうに部屋中に響いた。

「長居は無用だ」

答えたお菊さんが寢室の戸を開け放った。事務室からの明かりを一身に浴びたMの姿を見て殺人者が度肝を抜かれた。二人が息を呑み、絶句する声がMに聞こえた。不気味な沈黙の後で大屋が掠れた声を出した。

「臨月の妊婦が縛られているのかと思ったら、Mだ。どうして金貸しの部屋で妊娠してるんだ」

大屋のとぼけた言葉にもMは笑うことすらできない。口枷をはめられた口を大きく開き、まん丸く見開いた目で二人をぼう然と見つめた。

「妊娠ではない。すけべ爺に折檻されただけだ」

お菊さんが陰惨な声で言った。二人の身体から殺気が伝わってくる。

「かわいそうだが見られてしまった。お菊さん、Mを殺そう。Mも責め苦から逃れられる。さあ早く、一緒に首を絞めよう」

獣のように暗く光る大屋の目がMを射すくめた。だが、お菊さんの答えはない。待ちきれなくなった大屋が片足をベッドにかけたとき、お菊さんが厳しい声で制止した。

「だめだ、Mを殺すことは許さん。殺さなくともMは何もしゃべりはしない。のうM、Mは責め苛まれて失神していたんだ。何も見てはいまい」

鬼気迫るお菊さんの形相に、Mはただうなずくだけだった。命が助かった喜びもない。一切の感情を無くして過酷な責めだけを肉体で甘受していた。

「ちょうどいい、金庫が開いたままだぞ。大屋さん、早く金を借りておさらばしようぞ。ざっと三千万円あるぞ。大さんはいくら借りたいんだ」

金庫の前にしゃがみ込んだお菊さんが大屋に尋ねた。

「俺は百万でいい。それ以上借りては返せなくなる」

「大さんは正直なお人だ。それではわしも百万円を借りようぞ」

殺人者とも思えぬ対話の後、二人はそれぞれ苦勞して百万円ずつ抜き取ってから金庫の扉を閉めた。

「M、さっきも言ったとおり。ぬしは失神していたのだぞ」

帰り際にお菊さんが因果を含めてから、寢室の戸を閉めた。真っ暗になる寸前に見た事務室の文机には、醜く首をねじ曲げられた先生の小さな死骸がうつ伏せになっていた。ゴミのように惨めな死骸だった。殺人者はいなくなった。暗闇の中でカエル腹になった下半身が苦しく疼き、二度目の失禁が股間を濡らした。科せられた過酷な責めだけが、科す者が死んだ後もMを責め苛み続けていた。

## 9 事情聴取

夜明けと共に警察官が富士見荘に駆け付けてきた。カエル腹の責め苦が続くMの身体を案じたお菊さんが、匿名で交番に通報したらしい。やってきたのは自転車に乗った若い制服の巡査が一人きりだ。110番に通報しないところがお菊さんの老練なところだった。

巡査は出迎えた四人の婆さんに、先生の部屋に忍び込んだ者がいるという通報で出動したことを告げた。急いで全員で二階に上り、息を殺して部屋の様子をうかがう。お菊さんがドアを叩き、何回となく呼び掛けたが返事がない。緊張した顔になった巡査が婆さんたちを下がらせて、ノブに手を掛けた。ドアは簡単に開く。先生の無惨な死体が巡査の目を打った。一瞬身体が凍り付いたが、慌てて部屋に踏み込んでいく。先生の開ききった瞳孔を確認すると全身が震えた。任官したばかりの巡査が他殺死体を目にするのは初めてだった。たちまち気が動転してしまう。かろうじて無線で本署に殺人事件の一報を入れ終えてから、ほっと肩で息を付いた。閉められた寝室の戸が妙に気に掛かった。犯人が潜んでいるかも知れないと思った。全身で身構えて一気に戸を開いた。今度は拘束された裸身が目飛び込んできた。妊婦に違いないと思った。縛られたまま死んでいるのかも知れなかった。恐る恐る裸身に近寄り、そっと肌に手を触れる。手に温もりが伝わると同時に裸身が身を震わせた。巡査の背筋を安堵と感動の混じり合った衝撃が走った。女が妊婦ではなく過酷な拷問に遭っていることも分かった。慌てて救出に取り組み始める。もはや現場の保存も念頭になかった。震える指先で手枷と乳房強調拘束具を解き、下腹の膨れ上がった裸身を立て膝にさせた。両足の間から黒革のT字帯で装着された肛門調教具を観察する。尻にぶら下がった異様な器具で体内に空気を注入したことは理解できたが、空気を抜こうとして重大なミスをした。巡査は浣腸のバルブでなく、肛門の内と外を挟んだ風船のバルブを開けてしまったのだ。

口枷を噛まされたMは巡査に注意する術がない。肛門の内と外から括約筋を強く圧迫していた二つの風船が急激に萎んだ。下腹に充填されていた空気が凄い圧力で栓の緩んだ肛門に向かった。

ブワーン

尻の割れ目で凄まじい爆発音が響き、裸身が後ろにのけ反る。尻から肛門調教ポンプが吹き飛び、糞便の混じった空気が部屋中に吹き出す。慌てて巡査が身を避けたが、発射さ

れた空気鉄砲のスピードにはかなわない。全身を糞便に見舞われてしまった。Mの下腹が急速に萎む。体内に残った空気が腸の蠕動に応じて排出されていくのがよく分かる。括約筋が弛緩し、肛門が開ききってしまったため恥ずかしいガス音も出ない。なんとも言えない爽快な開放感が全身を満たした。やっと部屋に静寂が戻る。

「ハッハハハハハハハ」

突然、けたたましい笑い声が響いた。廊下で待っていた四人の婆さんが、異様な音を聞きつけて部屋に踏み込んできたのだ。さすがに、お米さん、お梅さん、桜さんの三人は先生の死骸を見てぼう然としている。ただ一人、お菊さんだけが寢室の前に立って童女のように笑い続けている。ベッドの上に仰向けになったMの裸身がうっすらと赤く染まった。どんな状況にあっても、恥ずかしさは感じるらしい。なぜかほっとして、首をもたげてお菊さんを見上げた。数時間前の悪鬼の形相が嘘のように鼻を押さえて笑っている。いたずらっ子のように片目をつむって首を振った。昨夜の約束を守れという合図に違いなかった。仕方なくMも目で笑い掛けた。

サイレンの音が近付いてきて階下で止まった。本署から駆け付けてきた三人の私服刑事が部屋に踏み込んできた。中年の男が目を白黒させて大声を出す。

「だめじゃないか。これじゃ捜査にならない。みんな出てってくれ」

四畳半二間の先生の部屋は十人の人出で大混雑だ。捜査員が怒鳴りたくなるのももっともだった。

「これはすまんことで、わしらは部屋で待機しますよ。聞きたいことがあったらいつでも呼んでください。この娘も連れていきます」

腰を低くしたお菊さんが、一番年配の捜査員に媚びるように言って寢室に入ろうとする。廊下を挟んで向かい合わせの自室からバスタオルを取ってきた桜さんが後に続いた。

「だめだよ。この女性は目撃者なんだろう。事情聴取が済んでからだ」

一番若い捜査員が興奮した口調で二人を押しとどめた。

「刑事さん、それはあんまりじゃないか。この娘は誰が見ても被害者だよ。死にそうな目に遭っていたから交番のお巡りさんが助けたんだ。病院に入れるのが筋ってもんだ。素っ裸で糞まみれの娘から警察が強引に事情を聞いたと、わしらは誰にでも話して回るよ」

お菊さんが若い捜査員を睨み付けて鋭い声で言った。死体の横に屈み込んでいた中年の捜査員が立ち上がり、二人の背に声を掛ける。

「婆さんたちの言うとおりで。下で待機してもらえばいい。すぐ鑑識を入れよう。俺

たちはまず、巡査から事情を聴くんだ」

うんざりした声で言って、三人の捜査員を見回す。全員が苦い顔でうなずいた。

「僕もこの有様ですよ。早く着替えさせてください」

交番の巡査が情けない声を出した。

「何言ってるんだ。殺人事件だぞ。じっくり話を聞く。早くこっちに来い」

若い捜査員が怖い顔で巡査を呼びつけた。お菊さんと桜さんが寝室に入り、口枷が残る無惨な裸身にバスタオルをかけた。Mは壁に向かってよろよろと立ち上がる。片手をさり気なくサイドテーブルに伸ばしてインターホンの下に置いた十万円を取って素早くタオルの下に隠した。見咎めたお菊さんの目が鋭く光ったが何も言わない。足元のおぼつかないMに四人の婆さんが付き添い、死人となった先生の部屋を後にした。

婆さんたちのたててくれた朝風呂にMはゆったりと浸かった。珍しく熱すぎない湯が痛む節々を優しく包み込む。だが、一晚膨れ上がっていた下腹の感触は消え去らない。今にも腹が膨れ出し、水面に浮き上がりそうで怖い。ぽっかりと開いてしまった肛門からは、しきりに湯が入り込む感じがする。手を尻に回し、丁寧に肛門をマッサージして括約筋の回復を図った。十万円が手に入ったが散々な有様になったと思う。もう五月五日だった。早くピアニストに会いに行きたいと心が急くが、そう簡単に警察が解放するとは思えなかった。二十分かけて湯に浸かり、洗い場の隅で肛門から逆流した湯を排泄した。括約筋も引き締まるようになっていたが、醜く膨れ上がっていた下腹の感覚はまだ消えそうにない。バスタオルを裸身に巻き付けて台所に行き、朝食を食べていた四人の婆さんたちの輪に入った。殺人事件のあった連休最終日に、富士見荘では日常の暮らしが戻っていた。生活者が対処できないほどの異常事態をかいくぐるには普段の暮らしを守り通すことが最善の道なのだ。朝食が終わろうとするころ、紺の出動服を着た鑑識課員を従えた二人の捜査員が台所に入ってきた。

「Mさん。一晚中折檻されていたようだね。お疲れの所申し訳ないが、署まで同行してくれないか。仏を拝んだ後で食事ができるようなら、それほど負担ではあるまい。一か月前までは刑務所にいたそうじゃないか」

中年の捜査員が妙に馴れ馴れしい声で言って、Mの前に立った。五人の箸の動きが一斉に止まる。お菊さんの目が鋭く光った。

「刑務所が何だって言うんだ。わしだって明日にでも仏になる歳だ。仏が怖くて歳が取れ

るか。自分の金で飯を食ってどこが悪い。説明してもらおう」

お菊さんの剣幕に押し返された中年の捜査員に代わり、初老の男が答える。

「何でもないですよ。つまらないことを言って済まなかった。よかったらMさんだけでも署に来てくれるとありがたいんだ。頼みますよ」

打って代わったネコナデ声でMに強要した。

「警察に協力するのは市民の義務ですもの、拒否する理由はないわ。でも着替えるまで待って欲しい」

当然のように答え、Mはバスタオルの下に入れた十万円を押さえて立ち上がった。泣く子と警察を思い通りにする方法はまだ見付かっていなかった。

Mは午後七時になっても警察署にいた。十時間以上も署の四階にある狭い取調室の椅子に座っている。この間、先生の部屋に行ってから制服警官に救出されるまでのことを根ほり葉ほり訊かれた。捜査員はMを容疑者と疑っている素振りも見せていたが、じきに鑑識捜査の結果が複数による犯行を証明したらしかった。この三時間は殺人の状況を見たか、聞いたかの二点に質問が絞られている。しかしMは、苦しい折檻に耐えかねて失神していたと言い張ったままだ。殺人の様子は何も見ず、何も聞かなかったと答え続けている。今は捜査員との根比べになっていた。時間ばかりが過ぎ去っていく。暮れていく五月五日を恨めしく見つめた。警察への協力はこのくらいで十分だと思った。幸い、手元には身体を売って稼いだ十万円がある。明日は会社に無理を言っても仕事を休み、ピアニストに会いに行こうと決心する。

「今日の協力はここまでにさせてください。私はもうくたくたです。帰らせてもらうわ」

大きな声で、はっきりと捜査員に告げた。二人の捜査員が困惑した表情を浮かべて腕の時計を見た。

「まだ署の玄関先に記者たちが陣取っているよ。もっと遅くなってからのの方がわずらわされなくていい。家まで送っていきますよ」

初老の捜査員が何気ない声で言ったが、重ねての協力要請はなかった。被害者のMをまるで容疑者のように警察は長時間に渡って拘束したのだ。これ以上の事情聴取は無理と、捜査員が判断したに違いなかった。

「帰ります」

静かな声で言ってMは立ち上がった。つられて捜査員も立ち上がるが、どことなく表情

が落ち着かない。

「裏口から出てくれないか」

中年の捜査員が横柄に言った。

「いいえ、私は容疑者ではなく被害者よ。堂々と玄関から帰ります」

胸を張って答えると、慌ただしく初老の捜査員が取調室から走り出ていった。

「課長、すぐ玄関に下りて、被害者の協力に感謝する談話を報道に流してください。被害者を容疑者扱いしたと話される恐れがあります」

隣の部屋から初老の捜査員の大声が響き、エレベーターに急ぐ捜査課長の後ろ姿が見えた。Mは二人の捜査員に挟まれて殊更ゆっくり階段を下りた。警察の玄関から闇の中に歩き出すと、無数の白い閃光が目を打った。カメラマンのストロボが一段落すると記者たちが取り囲む。てんでに勝手な質問を投げ掛けるがMは歩みを止めない。五メートルも歩くと、ついてくる記者も疎らになった。捜査課長の発表が功を奏したらしい。しつこく追ってきた若い記者が横に並んだ。

「Mさん、素っ裸で縛られていたそうですね。どうしてですか」

記者の口元に好色そうな笑みが浮かんでいる。

「縛られるのが好きだからよ」

素っ気なく答えて足を早めた。背後で息を呑む音が聞こえ、記者の足が止まった。M一人が闇の中を歩いていく。

織姫通りまで歩くのに二十分かかった。全身が疲れ切って通りにしゃがみ込んでしまいたくなるが、神経だけは研ぎ澄まされて鋭敏になっている。目に映る通りの裏側まで見通せるような気がした。通りの向かい側に、店のシャッターを下ろそうとしているトラッドショップの店員が見えた。磁場に引き寄せられる鉄片のように、危うい歩調で通りを横切る。行き交う車のクラクションが響き渡った。店の前でブラックジーンズの尻ポケットから十万円を出して半分閉まったシャッターをくぐった。レジの前でレシートの控えに目を通して店主の前に八万円を差し出す。店主は深々と頭を下げ、ガラスのショーケースから赤い宝石箱を出した。指輪をつまみ、左手の薬指にプラチナのリングをはめた。四月二十八日の結婚の日に感じた高ぶりも誇りも湧いてこない。熱い湯気のような焦りが足元から上がってきただけだった。お包みしましょうと言う店主に首を振って、小さな方の指輪が入った箱を持って外に向かった。店先に立った店員が最敬礼でMを見送っていた。

富士見荘は何事もなかったように、闇の中に木造三階建ての姿を溶け込ませていた。玄

関の前までいくと、待ち構えていたようにお菊さんが出てきた。お菊さんはMの尻に手を回して軽く叩いた。Mは黙ったまま、闇の中でも分かるように大きくなずく。

「M、お疲れであった。恩に着るぞ。先生の遺体は都会に引き取られた。引き取った息子は医大の教授だそうだ」

掠れたお菊さんの声を背中で聞きながら、大階段を上って部屋に帰った。三十ワットの蛍光灯をつけて部屋の中央に布団を広げた。ブラックジーンズと黒いサマーセーターを脱いで、素っ裸になって布団に寝そべる。大きく手足を伸ばすと、やっと疲れ切った身体が落ち着く。だが、神経はとげとげとこすれ、頭が痛む。素肌の上に寒々とした時が積もっていった。冴え渡った耳に、遠くからやってくるエンジン音が聞こえた。玄関のガラス戸が開けられ、中に呼び掛ける男の声が聞こえる。大階段を下り、再び上がってくる足音が富士見荘全体に響き渡った。寝そべった裸身を恐怖が駆け抜ける。反射的に時計を見た。午後十一時を回っていた。お菊さんの呼び声がしてドアがノックされた。

「電報が来たぞ」

掠れ声にMの全身が鳥肌立つ。反射的に飛び起き、すぐドアを開けた。目の前で揺れる白い紙片をつかみ取って震える指先で開いた。

ピアニストキトク スグ コラレタシ

ケイムシヨチヨウ

カタカナの字面に張り付いた目から瞳が落ちそうになり、喉から胃が飛び出しそうになった。短い電文だけが方形の部屋を舞う。Mは耳まで裂けよと口を開き、声にならぬ悲鳴で部屋を満たした。お菊さんをはね除け、外へ走り出す。

素っ裸のMが無人の街路を北に走った。白々とした街灯の光を浴びた裸身が全身で慟哭している。真っ直ぐ歓楽街に向かい、サロン・ペインのドアを開けた。

「チーフ、お願い。祐子を呼んで。車が欲しいの」

フロアに飛び込んだMが大声で叫んだ。カウンターの中で片づけを始めていたチーフの顔が驚愕する。

「どうしたの、M。何があったの」

かすむ視界でカウンターから飛び出して来るチーフの顔が揺れた。聞き慣れた声がほっとさせる。一気に全身の緊張が解け、足元から床に崩れた。

「ピアニストが死んだわ」

小さくつぶやいた声がM自身の耳を打った。確かにピアニストは死んだに違いないと改めて断定した。危篤という曖昧な言葉の裏に隠されているはずの真実がフロアに裸身を投げ出させた。激しい慟哭の音が広いフロアに満ちる。

「Mは、はだか。また、ないてる」

カウンターの前のスツールに座っていた進太が、唄でも歌うように口ずさんだ。途端に甲高い怒声が幼い声を遮る。

「何がピアニストだ。何が結婚だ。醜い、Mは醜すぎる。当てつけがましく修太を殺したときと同じ格好で現れる。ピアニストの遺産が転がり込んで、うれし泣きって所が本音だろうよ」

「睦月、Mに何を言うの。許さないわ」

ホールの奥から響いてきた毒々しい声にチーフが叱声で答えた。

「あっ、ままも、はだかだ」

進太の声に迎えられた睦月も素っ裸だった。以前と変わらないぼっちゃりした裸身に赤い縄が菱形に食い込んでいる。薄い陰毛を分けて股間を割った二条の縄が白い肌に怪しく映えた。裸身は緊縛されていたが両手は自由だ。右肩下の、銃弾が貫通した痕が無惨なひきつれになっていた。

「M、私の姿を見れば思い出さだろう。素っ裸で後ろ手に縛られたMがオシショウを突き飛ばし、拳銃を暴発させた。Mが修太を殺したんだ。そのお前がピアニストの遺産を相続

するんだって。進太を抱えて生きていく私はクラブ・ペインクリニックでSMの自縛ショーを始めるんだ。チーフが許さなくても構わない。こんな不条理なことは私も許せない」

憎々しい声でいきまきながら近寄ってきた睦月が進太の横に立った。赤い縄で緊縛された裸身がぶるぶると震え、怒りにひきつった頬を涙が濡らした。

「Mとおなじ、ままも、ないた」

うれしそうにはしゃいだ進太の頬を睦月が張った。幼い頬で鳴る平手打ちの音がホール中に響き渡った。泣きじゃくる進太の声が全員の耳を打つ。電撃に打たれたようにMの裸身が震え、足に力を込めて立ち上がった。

「睦月、進太に罪はないでしょう」

怒りのこもったチーフの声を聞いた睦月が、泣きじゃくる進太を抱き上げた。睦月の口から嗚咽が漏れる。母と子の泣き声がホールを満たした。Mは何も言わない。何も答えようとしない。心を閉ざしたままじっと母と子を見つめていた。

「M、祐子は五分で来るわ。でも、その格好では刑務所に行けない。私の服を着ていってちょうだい。まだ少し二階に荷物が残っているの」

顔をしかめたチーフが気分を変えるようにMに勧めた。クラブに改造予定の二階の部屋で、Mは黒いシルクニットのワンピースを着た。八年前の大晦日の雪の朝に、鋸屋根工場でピアニストに脱がしてもらったワンピースだ。裸身を包む布が心に重い。外で大きくクラクションの音が響き、Mとチーフは階下に降りた。真っ青な顔で、ものも言えずに立ちすくむ祐子の手からMG・Fの鍵を受け取り、真っ直ぐドアに向かった。

「M、覚えておくがいい」

背中に襲い掛かる睦月の叫びにMが振り向く。

「お前は立派に刑期を勤めたと思っているだろうが、私の両親も、極月の両親も、霜月の母も、死刑の判決を受けたピアニストの両親ですら莫大な損害賠償金を市と競艇場に払ったんだ。生き延びた者の刑期をいくらかでも酌量してもらいたいと、爆発で破損した施設の示談に親たちは努めた。そのお陰でピアニストの他は判決が甘かったんだ。私の両親は土地を失い、返しきれない借財を背負った。着の身着のまま仮釈放になった私も進太を抱えて所帯苦労だ。来月からは自分の裸身を縛り上げて金を稼ぐ。M、お前の相続するピアニストの財産は私たち親子にも使う権利がある。決してMだけにいい思いはさせない」

進太を抱いて叫ぶ睦月の裸身が急に大きくなったように見えた。Mは睦月の目を見据えて初めて大きくうなずいた。

ピアニストは囚衣をほぐして作った紐で首を吊って死んだ。五月五日の未明のことだ。ちょうどMが、殺された金貸しの先生の執念の折檻に呻吟している時刻だった。祝日だったため、妻であるMと両親への通報がほぼ一日遅れたのだ。狭い独房の便器の下に寂しく吊り下がったというピアニストの首を絞めた紐は、確かに糸のようなものだったとMは思った。

日本海に面した町の人気ない火葬場にピアニストの両親と並んで座り、焼き上がる骨を待ちながらMは惑う。二人を繋いでいた糸も切れそうなほど細かったが、寄り添い求め合うほど強靱でもあった。ピアニストはMにとって他者としてあったのではない。互いの分身のように反発し、求め合ってきただけだ。そう思えば涙も出ない。ピアニストは死んで、Mの体内に戻ってきた。後は分身を無くしたMがピアニストの分まで生き延びるだけのことに思えてくる。

焼き上がった骨を胸に抱き、ピアニストの両親を従えて火葬場を後にした。この海辺の町で骨にすることを主張したのもMだった。歯科医の妻は息子がかわいそうだと言って泣いた。だが、ピアニストを骸のまま市に帰すことだけは、無惨すぎてMにはできない。生々しい思い出がピアニストの亡骸を冒瀡するように思われた。やはり、無機質の清澄な骨にして連れ帰りたかったのだ。

北の海沿いの町からオープンにしたMG・Fを飛ばして市に帰り着いた。水瀬川に掛かる大橋を渡れば市街なのだ。赤信号を見つめて大きく溜息を付く。暮れていく空が情けないほど美しい。つい人恋しくなってカーラジオのスイッチを入れた。地元のFM局が臨時ニュースを流し始める。

「五月四日の金貸し殺人事件が急転直下、解決しました。つい一時間前、被害者のアパートの家主と同アパートに住む老婆が容疑者として逮捕されました。逮捕された家主は今日午前、長男の在学する都会の大学に授業料八十万円を納入しました。この札束の耳の部分には幅五ミリメートルの赤い線がインクで引いてありました。この印を不審に思った大学事務員が金融機関に問い合わせたところ、警察の手配と一致する事が判明しました。警察当局は金庫に残されていた札に同様の印がされていたことから、被害者が札に塗っていたものと推定して極秘に金融機関に手配していたものです。札に残した被害者の執念が見事に犯人を追い詰めたと言えるでしょう」

Mは手を伸ばしてラジオのスイッチを消した。信号が青に変わる。お菊さんの顔も大屋の顔も思い出せない。暗く悲しい思いだけが、深く、深く、心の底に沈んでいった。産業道路から織姫通りに合流する信号で、MG・Fを先導するように走ってきた歯科医の運転するポルシェが左折の信号を出した。二人は山地に帰っていくのだ。Mは構わず右折の信号を出し、歯科医と反対に歓楽街の方向に向けてカーブを切った。いつも道は二手に分かれている。カーブを曲がりきった瞬間、助手席に置いた骨壺の中でピアニストの骨が小さく鳴った。Mは蓋を開けた骨壺に左手を伸ばし、指先で小さな骨を摘んだ。真っ直ぐ前を見つめたまま骨を口に含む。微かな塩の味のする骨をゆっくり噛んだ。明日の晩は通夜にしようと思う。

完